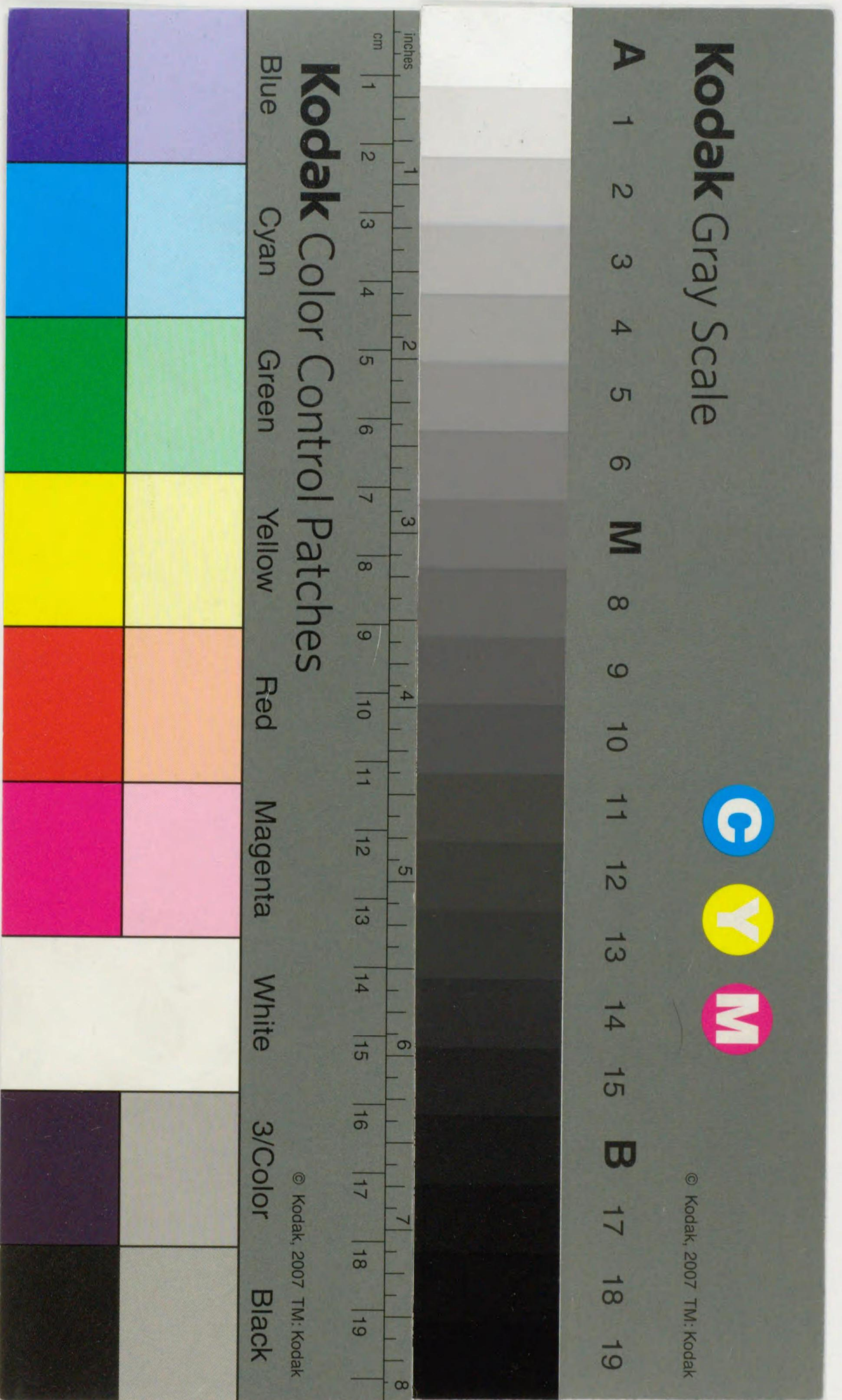


陸蕉影在歆

152
85

152-85
1200800048159



124



蕉
影
餘
韻





玄

妙



昭和己卯夏日

藤堂平助



序

伊賀衆、伊賀焼、伊賀越仇討など伊賀の名を負ふものは少くないが、
眇たる伊賀が天下に誇り得るものは、俳聖芭蕉を出したことである。
斯翁一たび出で、俳諧國を獨占し、萬代不易一時流行の旗幟の下に寂・
榮・細みを信條とし、我家の俳は水墨畫の如しと喝破して、閑寂幽玄の
體を鼓吹し、海内の俳風此に一變した。翁歿してより殆んど此に二百五
十年、伊賀に菊本直次郎君起り、その資を活用し、廣く翁の遺墨遺品を
蒐めて、敬慕の情を寄せ、更に上野の叢虫庵を修理擴張して、永遠に伊
賀の名蹟として傳ふることゝした。

然かも君が翁に傾倒する念は猶之を以て足れりとせず、往年伊藤松宇
先輩を勞して、蕉影餘韻を編し、今又同先輩の力に依りて其續篇を印行
し、洽く知友同好の士に頒ちて、翁を偲ぶよすがとした。續篇載録する

ところは、翁の墨蹟遺愛品のみではなく、蕉門の人々より天明の俳壇及化政期の俳人にまで及んで、俳諧史の好資料を提供してゐる。君が翁のためにつとむること至れり盡せりと謂ふべきである。

予も亦少年の折、家嚴に隨ひて伊賀に在り、或は神戸村の新田に、或は依那古村の下郡に、或は烏ヶ原村に轉々し、柘植・上野の地を往來すること、前後其の幾十回なるを知らず、山川路程歴々として今猶眼前に髣髴してゐる。蕉翁に依りて知られた此地が、又菊本君に依りて紹介せられたのを喜ぶもの、獨り伊賀郷人ばかりではない、予の如き因縁淺からざるものも、心からして之を祝福せずにはゐられない。

昭和十四年夏日

同年の友

笹川臨風識

續蕉影餘韻の成るに就て

伊藤松宇

蕉影餘韻の成りしは、今を去る十年前にして、菊本氏還曆祝賀の記念にとて老生が同氏の御依頼を受けて編纂し刊行せられしものである。歲月の經つのは實に矢よりも早き諺の如く、其後菊本氏は三井銀行取締役會長を、功成り名遂げて圓滿退任なされ、今年古稀の壽齡に躋られたるを以て、往年還曆祝賀の例もあればとて、續蕉影餘韻の刊行を慫慂したところ、其後芭蕉翁の墨蹟類が可なり手に入りたればそれもよからんとのことで、就ては前例の通り貴君に編纂方を依頼するにつき何分頼むとの仰せがあつた。然しおすゝめはしたものの、老生も當年取つて八十一歳、實は此大任覺束無しとの感起り、御辭退を申出たるに、御尤もではあるが、拙者も以前と違ひサウ劇務も無いから校正を初め、其他手傳ひするから是非遣て呉れとの御詞であつた。茲に於て老生も第一好き

な道ではあり、其後の御入手品は前回に優るとも劣らぬ名品が澤山あるので、之が出版せらるゝ曉になれば、斯道の爲めどの位有益になるか知れないと思惟し、遂にお引受をしたのである。さて今回第一に本書を飾るものは、芭蕉翁の生前非常に敬慕せられし西行上人の墨蹟白河切で、之は既に文部省から重要美術の指定がある、次に芭蕉翁の眞筆自然二字の大字書。明治天皇の御賞賛あらせ給ひしとか承る『物云へば唇寒し秋の風』の横幅。次に守口如瓶云々の大字一行書。次に破墨山水自書賛。狩野探幽齋守信の秋草に月の書芭蕉翁の賛。北國行脚の砌に成りし秋草に月の書賛幅。莊子の像自書賛。馬上の人物素描の自書賛等々、其他句入の文に至りては數十通ある中にも、翁より師の季吟に宛たる文に季吟公とあるのは流石に師に對する敬意を表したる所に千鈞の重みがありて床しい。又玄の妻にまゐらす明智が妻の貞節の話、楠公父子訣別の句等史的參考の資料がある。蕉門其他のものに至りては、翁の師たる珍中の珍なる季吟の自書賛。書道の師北向雲竹の筆萩に月の自書賛。又門人中の筆蹟には、其

角の三體詩短冊。嵐雪の扇面梅花の自書賛。去來の躍りの圖。同去來より浪化上人宛二十尺餘の長卷の文。同去來筆奥の細道の寫し物、越人瓢集の序。又卷尾には芭蕉翁の正風開眼の跡を慕うて俳道にいそしみし木枯の言水名譽の句を初め、蕪村の筆翁の像に得意の句十數句を自書賛的のものせし大幅。其門人吳春の筆になる二枚折屏風に、翁の幻住庵記を自書賛的のものしたる大作。千代女の筆になる豪放なる筆致で福祿壽と拂子の二幅は稀なる上出来である。(以下略)

本書の成るに就ては、例に據り杉原陽々子に菊本家への諸傳達等尠なからざる勞を煩はした事を深く鳴謝する次第である。

自序

予蕉翁の風韻を偲ぶこと此に年あり、特に其の郷貫を同うするの故を以て平素敬慕の念措く能はず、遺墨遺品の空しく散逸せんことを憂ひて、心を之が蒐集に用ひ、收藏するもの數百點、伊藤松宇君に囑して選擇解説の勞を煩はし、曩に蕉影餘韻一篇を編みて知友同好の士に頒ち、以て華甲の記念とせり。今茲古稀の齡を迎ふるに當り、其後又家藏となれるものを合せ、再び松宇君の拮撫を得て、更に續篇を纂録し、九月十二日誕辰の日を期し、之を記念として頒行することとす、花晨月夕、酒前茶後試に之を繙閱披觀すれば、翁の面目は髣髴として眼前に徂徠するの感あらんか。風流韻事は千古盡さず、遺芳長く後世に傳ふることを得ば予の本懐何ものか之に過ぎん。

昭和十四年初秋

蓑虫庵主 菊本直次郎 識

目次

- 一、題字 伯爵 藤堂高紹氏
- 一、序 文學博士 笹川臨風氏
- 一、續蕉影餘韻の成るに就いて 伊藤松宇氏
- 一、自序 蓑虫庵主
- 一、元祿年間伊賀上野城趾並芭蕉翁遺蹟其他地圖
- 一、蓑虫庵全景並舊表門
- 一、芭蕉翁像 松雲作
- 一、芭蕉堂並内部
- 一、蓑虫庵遺蹟碑
- 一、蓑虫庵内わらし塚跡
- 一、蓑虫庵内芭蕉翁碑並古池之一部

- 一、芭蕉翁像 破笠作 八千坊傳來
- 一、西行と芭蕉
- 一、西行法師白河切 重要美術品
- 一、無良尾花文臺
- 一、芭蕉翁自然書
- 一、同 秋風之詠
- 一、同 一行書
- 一、同 破墨瀧山水自畫賛
- 一、芭蕉翁賛 探幽筆芒の畫
- 一、芭蕉翁秋風の詠自畫賛
- 一、同 莊子自畫賛
- 一、同 四時の詠草

- 一、芭蕉翁賛 尙景筆五位鸞
- 一、芭蕉翁三ヶ月の自畫賛
- 一、同 四詠短冊帖
- 一、同 馬上人物自畫賛
- 一、同 行脚のころ
- 一、同 机 銘
- 一、同 又玄子妻にまいらす
- 一、同 勢田に泊りて
- 一、同 木因宛句入之文
- 一、同 橋の自畫賛
- 一、同 駿河の國に入りての詠草
- 一、同 鴉の自畫賛

- 一、芭蕉翁色紙扇面交せ張
- 一、同 款冬の露の詠
- 一、同 奥の細道の一節殺生石
- 一、同 奥の細道の一節實方中將の古蹟
- 一、同 文字摺石反故之文
- 一、同 天河之文章並句
- 一、同 岐阜山にて
- 一、同 初時雨の色紙
- 一、同 辛崎の松短冊
- 一、同 むら尾花の短冊
- 一、同 朝顔の短冊
- 一、同 季吟宛句入之文

- 一、芭蕉翁土芳宛句入之文
- 一、同 露言宛句入之文
- 一、同 用和宛句入之文
- 一、同 意水宛句入之文
- 一、同 松風宛句入之文
- 一、同 秋水宛雉子の句入之文
- 一、同 三木宛句入之文
- 一、同 宛名不明之文
- 一、同 牡丹の便の文
- 一、同 吟水宛句入之文
- 一、同 遊水宛句入之文
- 一、同 荷兮宛句入之文

- 一、芭蕉翁松風宛句入之文
- 一、同 一元宛句入之文
- 一、同 野水宛句入之文
- 一、同 半斗宛句入之文
- 一、同 友水宛句入之文
- 一、同 惣七宗無宛之文
- 一、同 山下宗閑老宛句入之文
- 一、同 石田左衛門宛句入之文
- 一、同 志水宛句入之文
- 一、同 和休宛句入之文
- 一、同 宗因宛句入之文

蕉門其他

- 一、北村季吟筆さゝげの自畫賛
- 一、北向雲竹筆萩に月の自畫賛
- 一、榎本其角七夕の詠
- 一、同 詠句短冊 抱一の筆繪表裝
- 一、同 菊の句詠草
- 一、同 七言二句並に詠句
- 一、服部嵐雪梅の自畫賛扇子
- 一、向井去來躍の詠短冊並躍の圖
- 一、同 短冊
- 一、同 浪化上人宛の文卷
- 一、同 奥の細道の帖
- 一、内藤丈草句入之尺牘

- 一、内藤丈草卓袋宛之文
- 一、森川許六送行之文並蕉門餞別之辭句
- 一、同 勢田の橋自畫賛
- 一、各務支考百合の花の自畫賛
- 一、同 句入之文
- 一、同 句入之文
- 一、同 鯉屋杉風風鈴猫の自畫賛
- 一、同 門松の畫 素堂の賛
- 一、越智越人竹の自畫賛
- 一、同 瓢集の序
- 一、陸雲子筆芭蕉翁像 野坡の賛
- 一、信田野坡自畫賛

- 一、服部土芳小男鹿の句短冊
- 一、築山猿雖芦雁之自畫賛
- 一、岡田野水短冊
- 一、中川乙由梅の自畫賛
- 一、川合知月さりくす短冊
- 一、斯波園女芦の花の句短冊
- 一、菊岡沾涼歸京之辭
- 一、池西言水名譽之句
- 一、蕪村筆芭蕉翁像並賛
- 一、同 秋冬雜詠句草
- 一、同 自畫賛
- 一、同 衣更の句短冊

- 一、吳春筆幻住庵記二枚折屏風
- 一、同 蕪村翁之像並句
- 一、千代尼壽老の自畫贊
- 一、同 拂子の自畫贊
- 一、俳諧寺一茶柳の自畫贊
- 一、長命寺畔芭蕉翁涅槃之像寫意
- 一、穗庵筆芭蕉翁行脚像 古稀庵島本青宜贊
- 一、清暉筆芭蕉翁と蛙
- 一、交山筆蕉風十哲 對山贊
- 一、容齋是真合作 西行法師行脚之圖
- 一、芭蕉翁印譜

法學博士 加藤正治氏

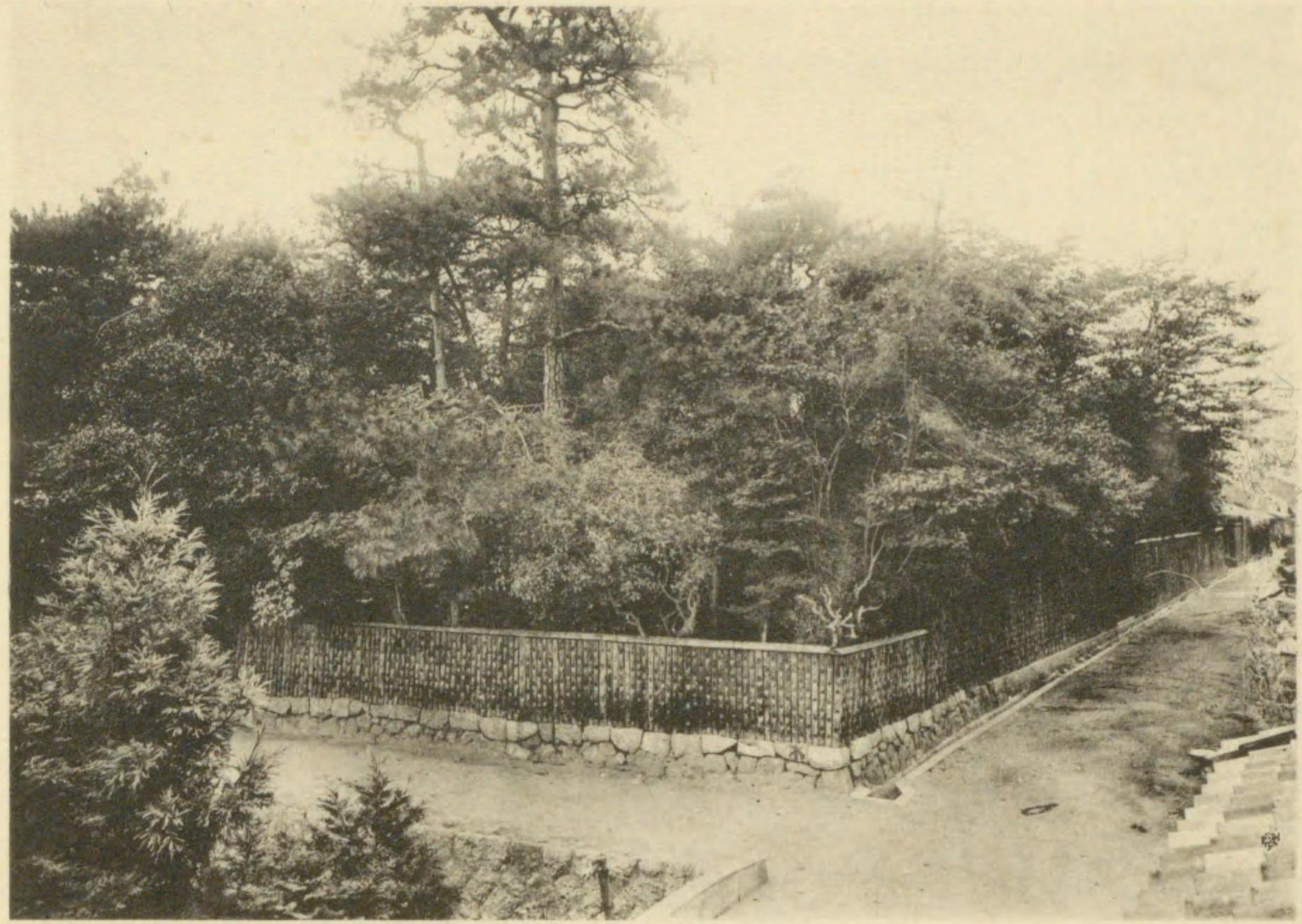
元祿年間伊賀上野城趾並芭蕉翁遺蹟其他



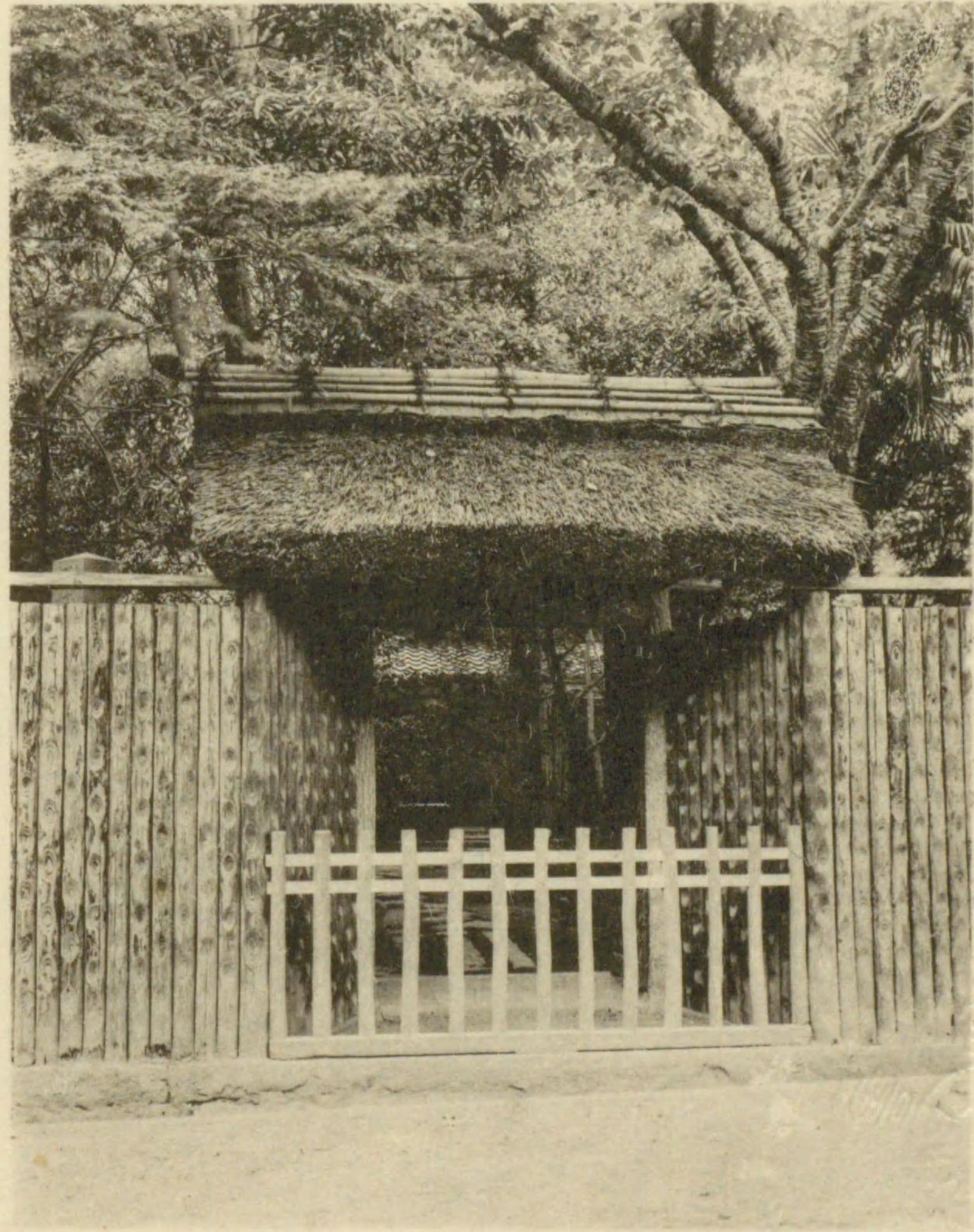


芭蕉翁の像

芭蕉庵安置末裔松運慶の作



蓑虫庵全景



蓑虫庵舊表門



蓑虫庵遺蹟碑

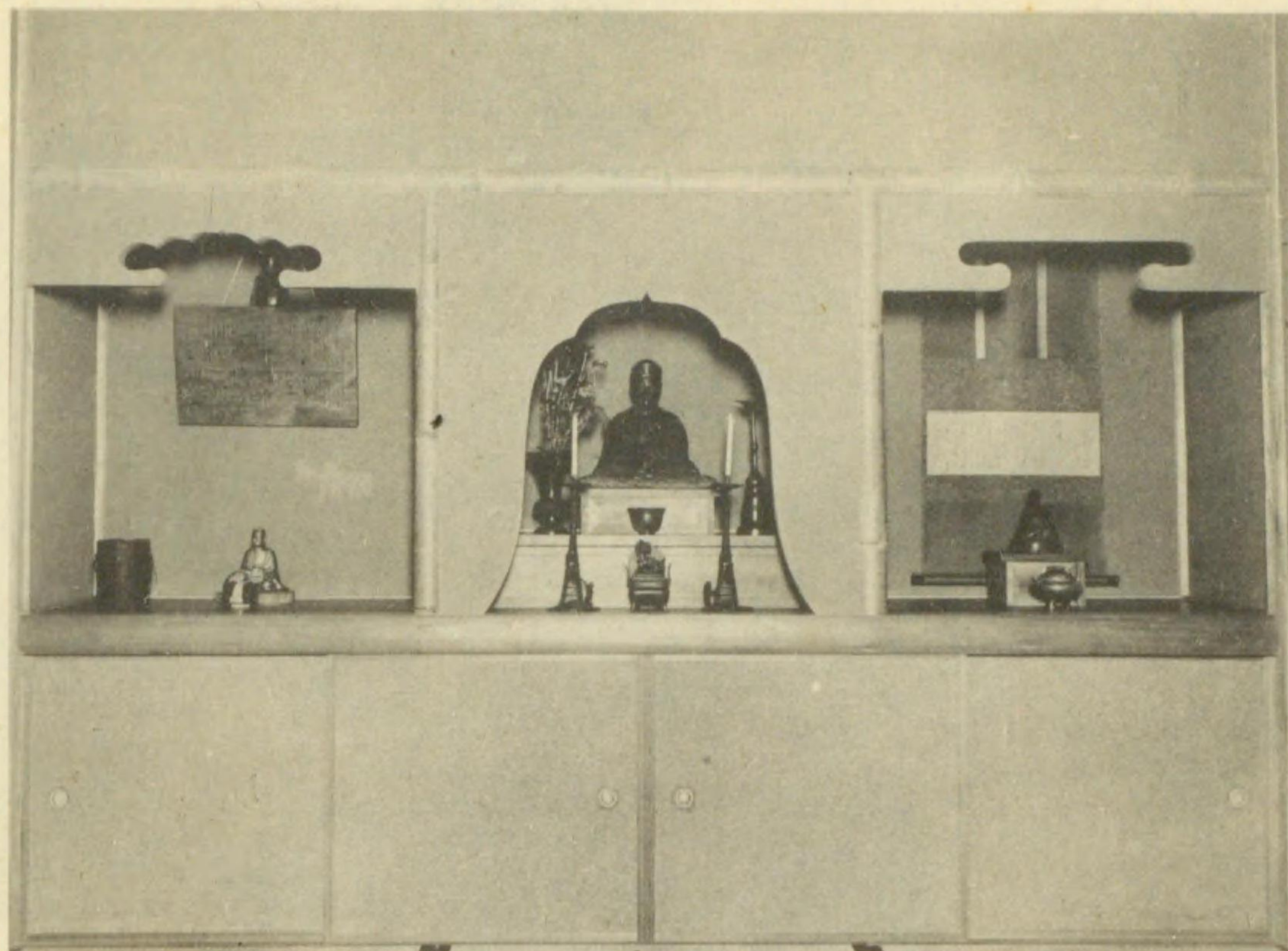
蓑虫庵の記

蓑虫庵は貞享四年の冬服部半左衛門保英の營む所に係り固と些中庵と稱す菴主保英は芭蕉翁に就き俳諧を學び土芳と號し兼ねて和漢の學に通し又内海流の槍術を能くせり元祿元年三月翁をやどせし時土芳面白う松笠燃えよ臘月の句あり翁深く此庵を愛し歸郷毎に滯杖するを例とせり或る日翁の示せる吟に

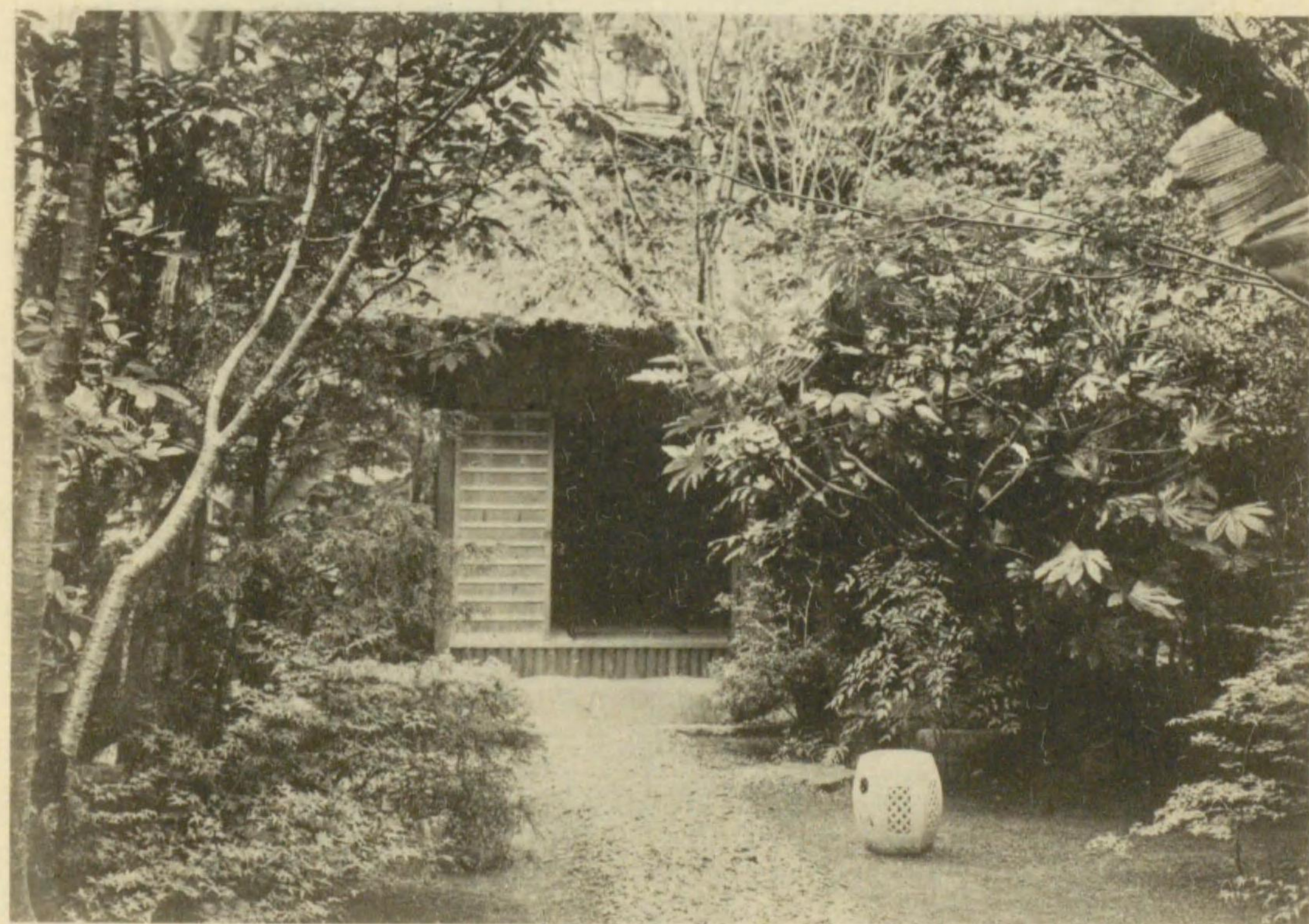
昭和五年庚午歲初冬

東都關口芭蕉庵主

伊藤松宇識



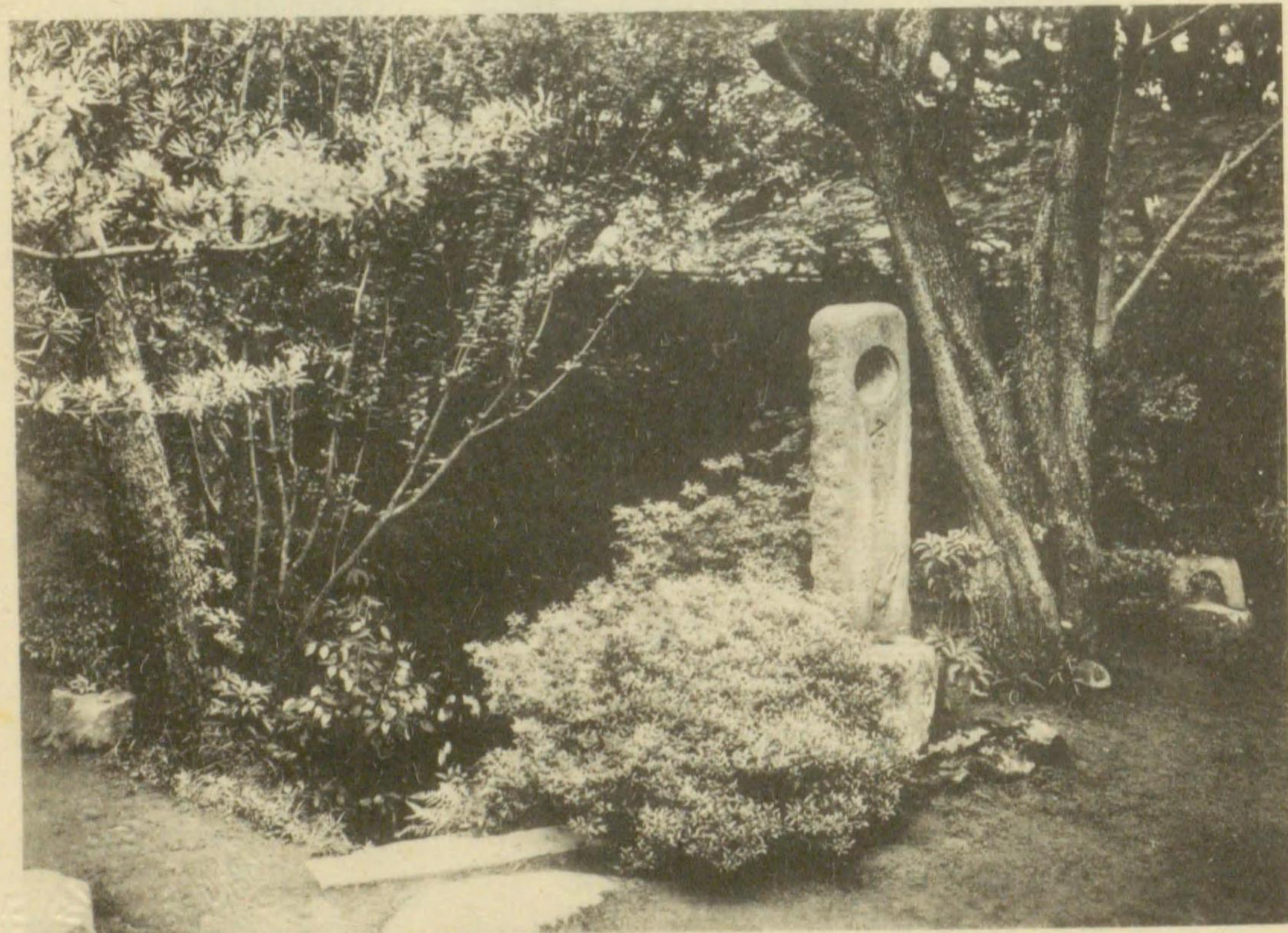
芭蕉堂の内部



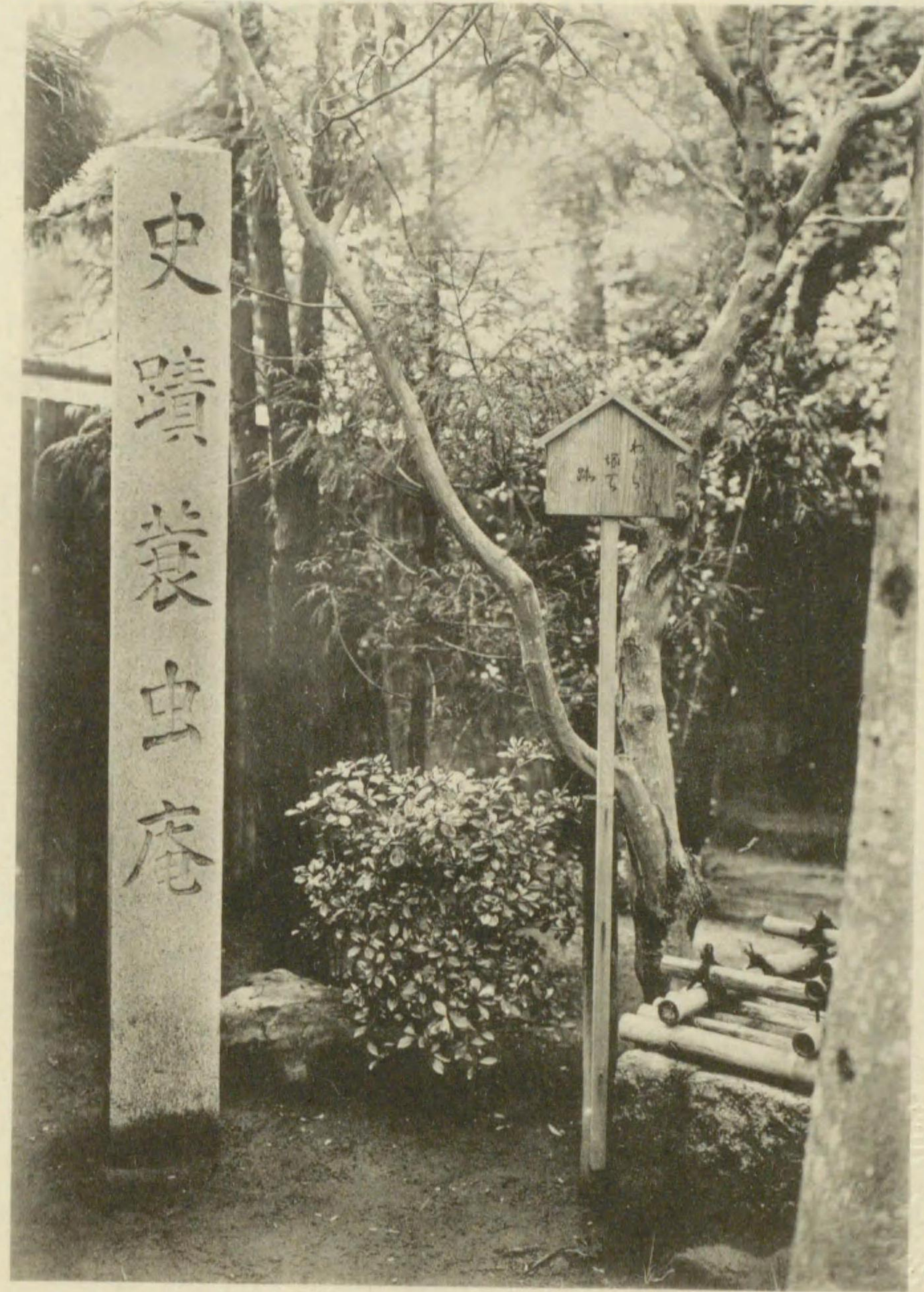
蓑虫庵内芭蕉堂



蓑虫庵内芭蕉翁の碑



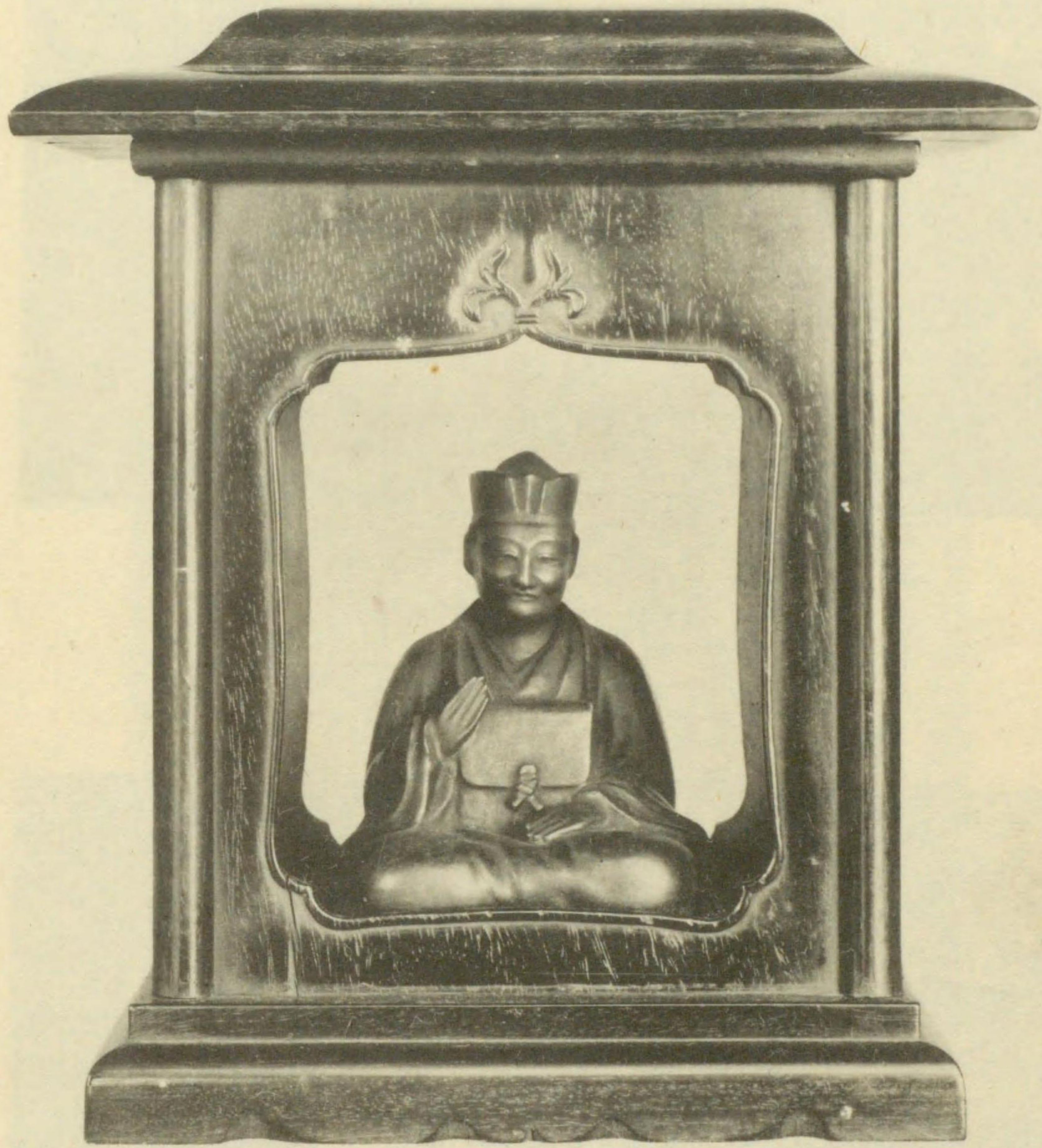
蓑虫庵内古池之一部



蓑虫庵内わらじ塚跡

此處は翁歸郷の際其
 高風を仰がんとて遠近
 より多くの人々馳せ參
 じて汚れたる草鞋を脱
 き捨て、面會をもとめ
 たる跡なりしと云ひ傳
 へり

芭蕉翁像 破笠作 八千坊傳來

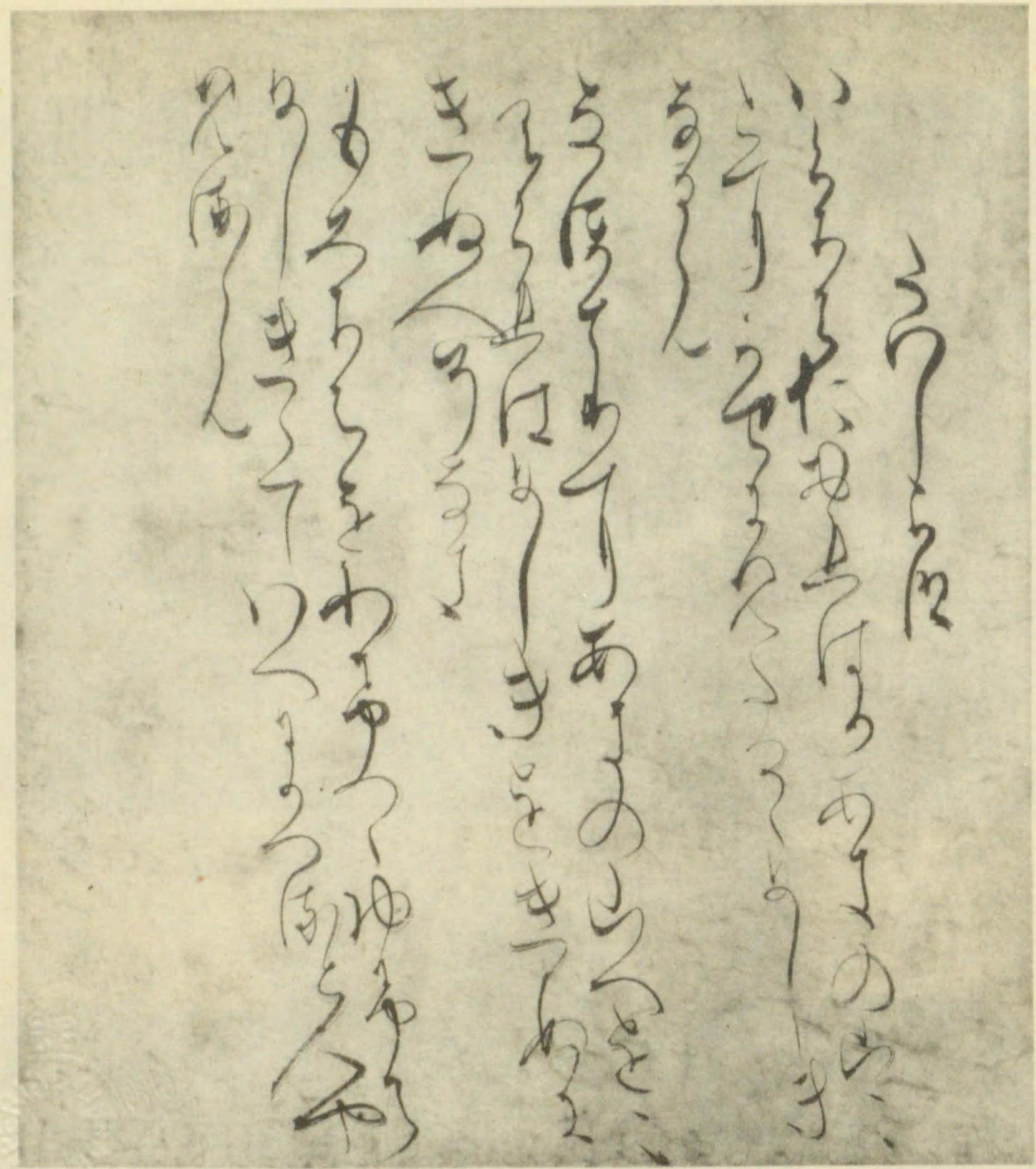
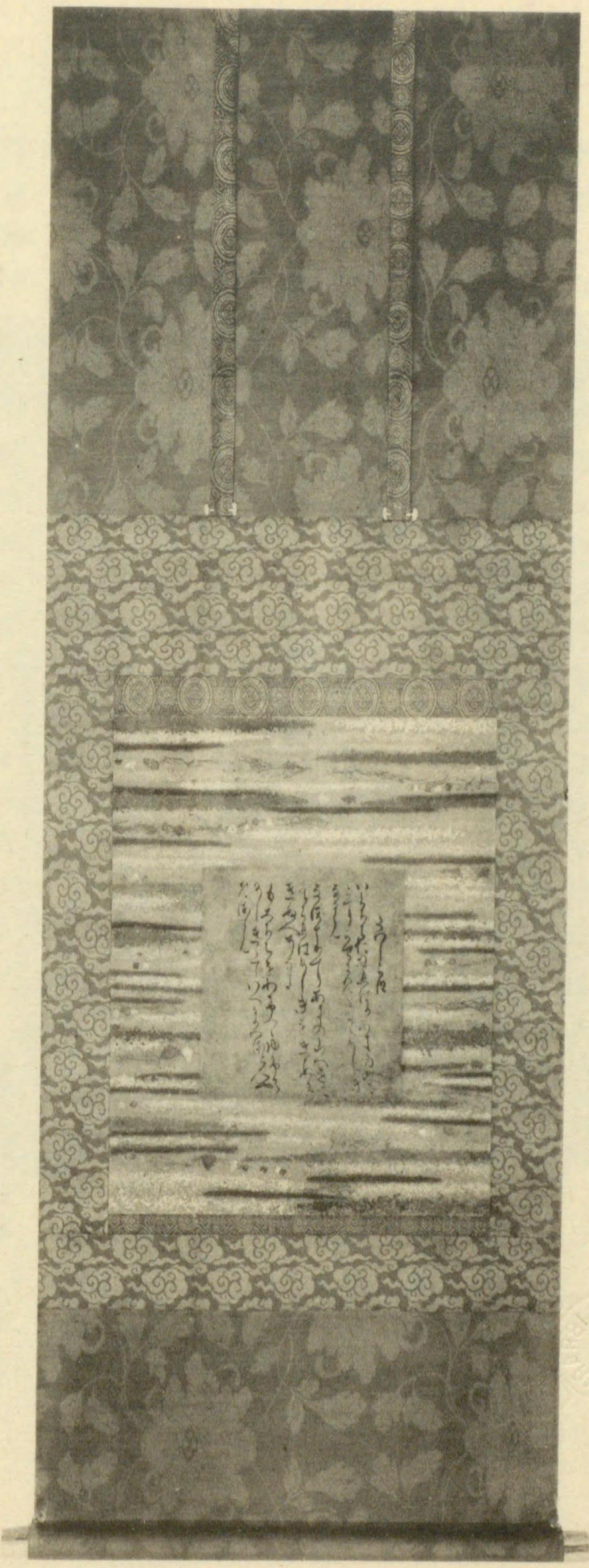


西行と芭蕉

芭蕉翁が常に西行法師を敬慕してゐたことは、翁の旅行記『卯辰紀行』中に平素尊重せる人々を列擧して、西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休の茶に於ける、其の道を貫くところ即ち一なりと言つてゐるのでも知られる。西行法師は文武兩道に達し和歌に堪能にして、墨蹟亦精妙、しかも操守堅固にして、寡欲恬淡、功名利達を物の數ともせず、心事玲瓏として、まことに高風清節の人であつたから、翁が之に傾倒して好んで『山家集』を愛誦してゐたのも尤もなことである。『白河切』に對して法師を偲ぶのは又翁の餘韻を味ふ所以である。



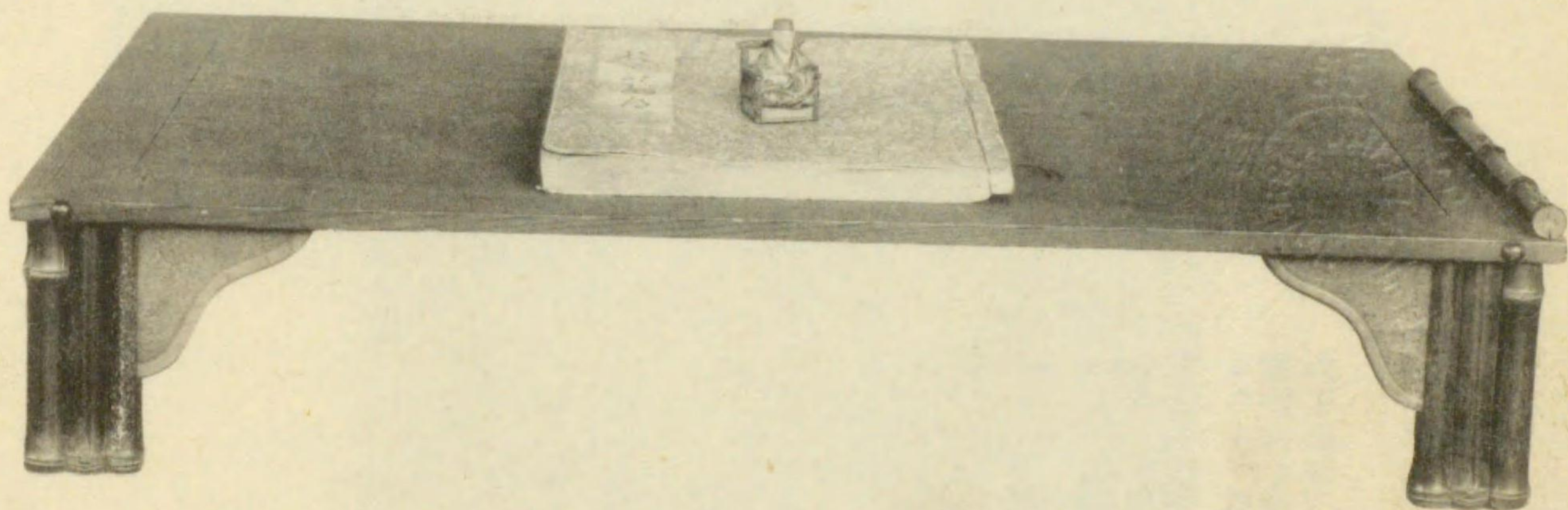
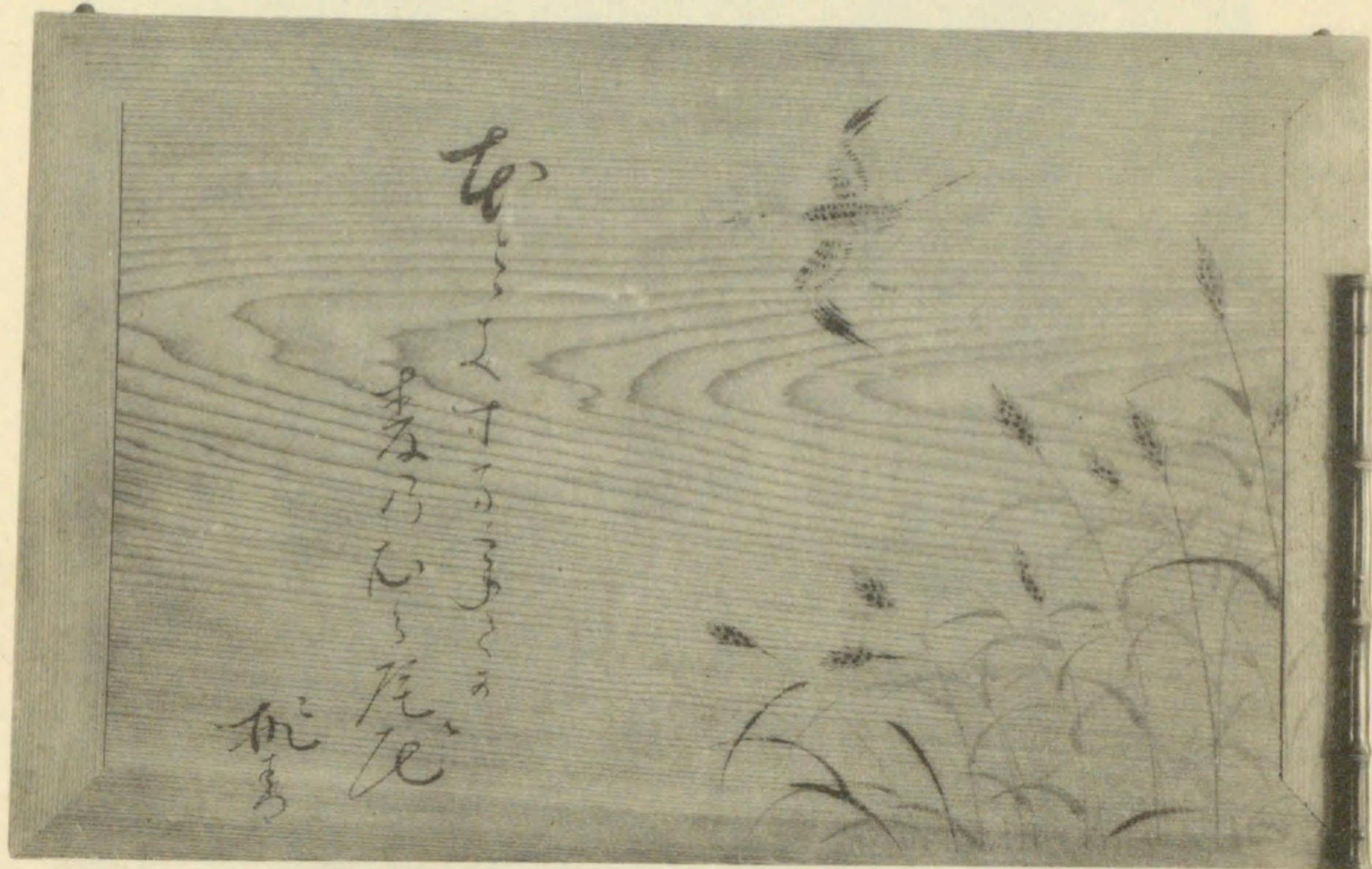
西行法師 白河切 重要美術品



たいしらす
 いくちはたおれはかあきの山こ
 とにかせにみたるよにしき
 なるらん
 なほさりにあきの山へをこ
 えくれはにしきをきぬに
 きぬ人そなき
 もみちはをわけつよゆけは
 にしきよていへにかへると人や
 みるらん

後撰和歌集卷第七 秋下に
 題しらす
 いくちはたおれはか秋の山ことに風にみたるよにしきなるらん
 なほさりに秋の山へをこえくれはおらぬにしきをきぬ人そなき
 もみちはをわけつよゆけは錦きて家にかへると人や見るらん
 とある。即ち西行法師の盛蹟中 落葉切 月輪切 白河切 出雲切
 巻物切と五種あるものゝ中、殊に白河切を以て優秀の名品とさ
 れてある。

無良尾花文臺



ほととぎすすまねくか麥のむら尾花 桃 青
右の詠は天和元年田羽の國尾花澤なる鈴木清風
か編めるおくれ双六に見ゆる所にして又天和二
年高島千春が武藏曲にも之を収めたれば當時芭
蕉翁著名の詠としてこれを文臺に造り自畫贊を
ものし自ら所持せられ後に石田朝叟の家に傳は
りし旨句選年考に見えたり之れ後世むら尾花の
文臺として専ら傳ふる處なり
今や轉々して菊本碧山主人の有に歸し之を養虫
庵の什物として永久に襲藏せらるゝ事洵に斯道
の爲にいみじき勳といふべし
昭和八年臘月一日

關口芭蕉庵主

七十五叟伊藤松字謙

文台上ニ在ルハ去來筆奥の細道

(後記)

芭蕉翁 書

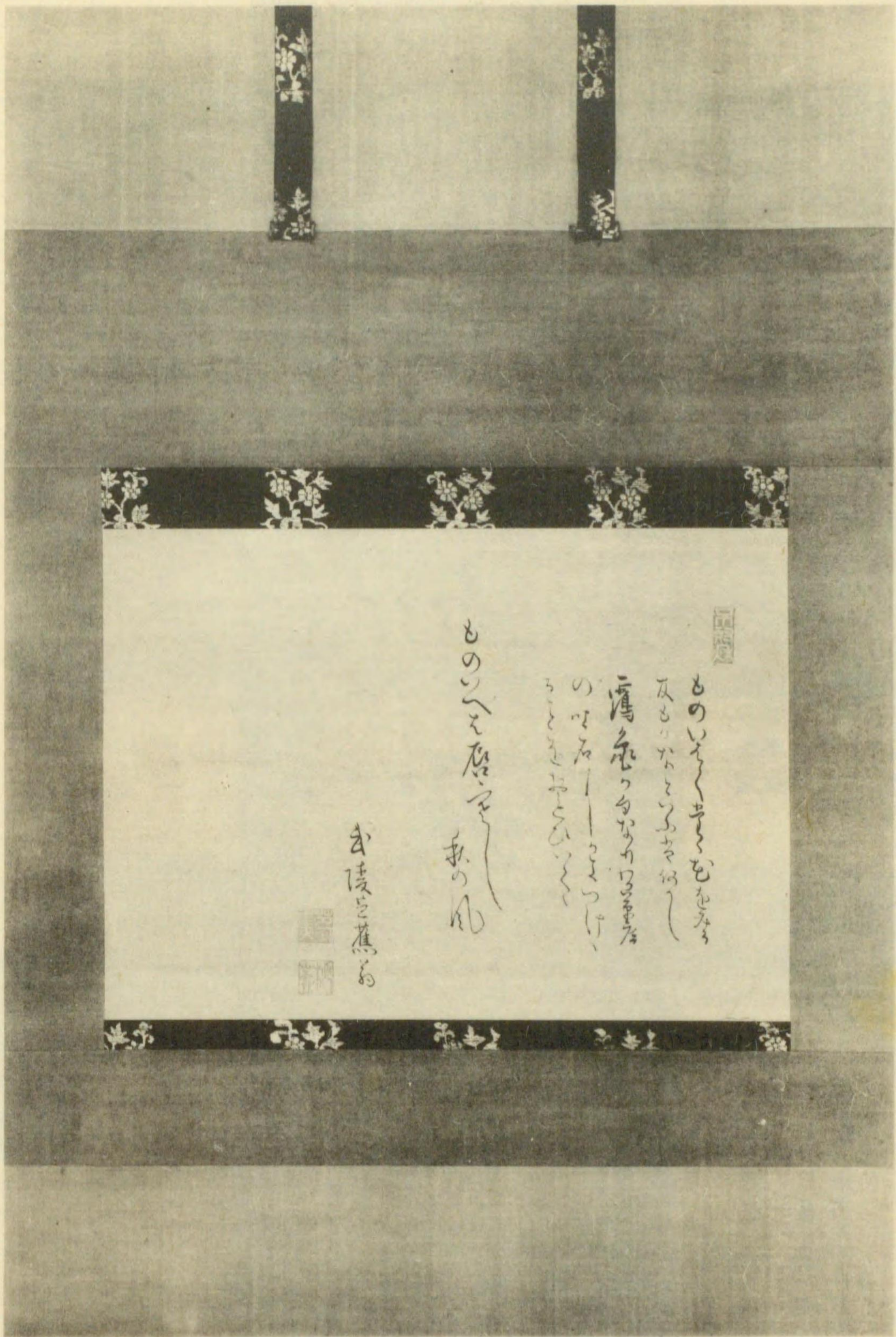


自然 注曰後天謂道 後道謂自然 矣

老子に人法地、地法天、天法道、道法自然ともある。芭蕉翁の俳諧に於ける正風を専らとしたるは、此自然より胚胎したるものならん歟

東野芭蕉桑門

芭蕉翁 秋風之詠

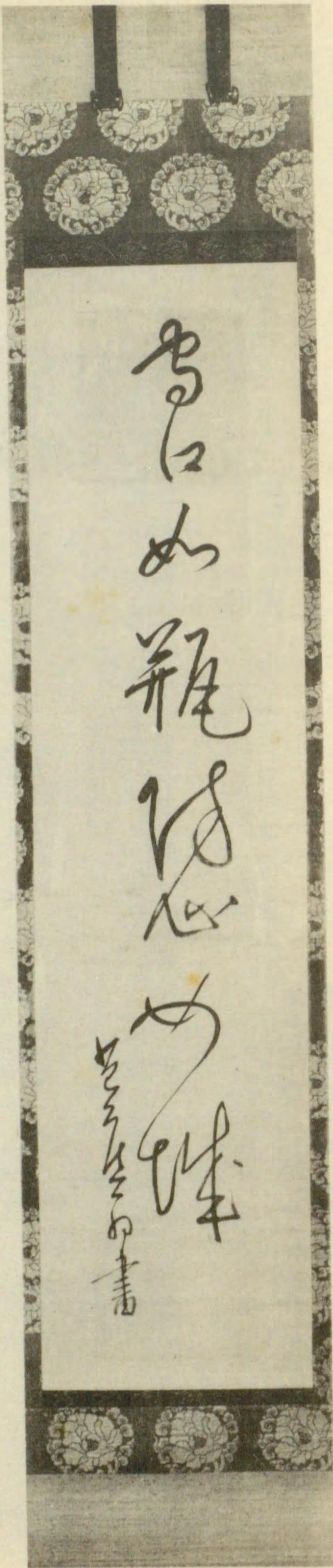


ものいはくたゝ花をみる
友もかなといふは何かし
鶴龜か句なりわか草庵
の座右にかきつけゝ
ることをおもひいてゝ

武陵芭蕉翁

明治三十八年伊勢山田に行幸の際
明治天皇の乙夜の覽に供す

芭蕉翁 一行書



守口如瓶防心如城

芭蕉翁書

書言故事大全卷之五 身體説類之部に
守口 謹言。曰守口。晦庵敬齋箴此篇發明守口如瓶。口以發言瓶以張水。口言易出瓶水易傾。故守吾之口。如守吾之瓶。
瓶水之傾。不可再收。口言之出。不再追。故曰守口如瓶。
防意如城 人心動謂之意。恐不能盡其誠。故常防之。意既誠。而后心正。意有不誠。則私欲妄行。若城之破也。夫敵人
攻城。守城者。焉得不防。人心將自正。恐懼哀樂引將去。又却邪了。亦如敵人攻城至於破。豈不防哉。とある、蓋し芭
蕉翁の筆蹟多かる中に、斯る大字一行書と云ふもの眞に稀品と云ふべきである。

破墨瀧之山水自書賛

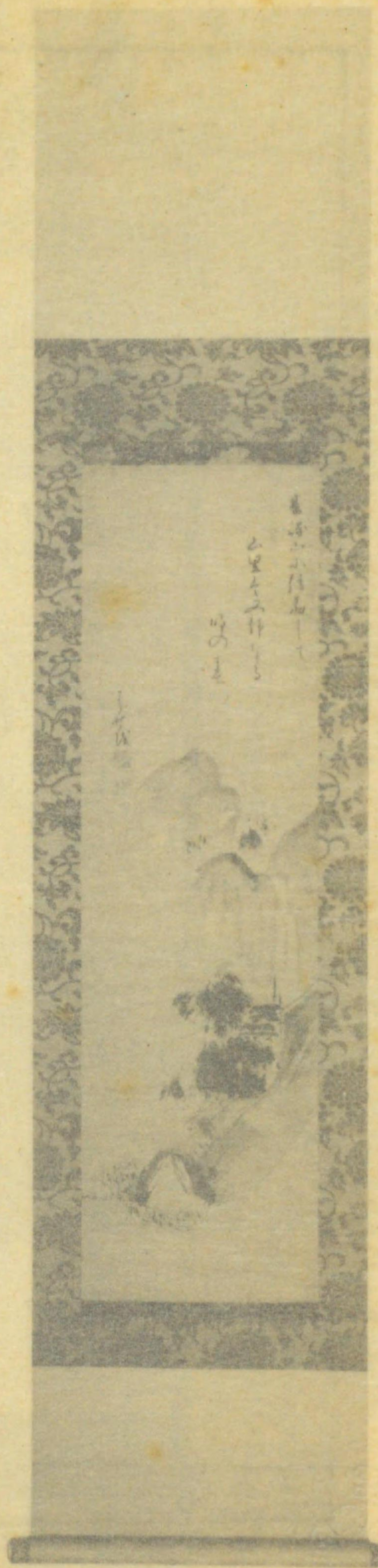


長崎山に信宿して
山里は又静なる
明の春
はせを

本品は元高野山金剛峰寺前官湛然大和尚より眞言宗管長
獅子岳快猛大僧正への傳來品



破墨瀧之山水自書賛



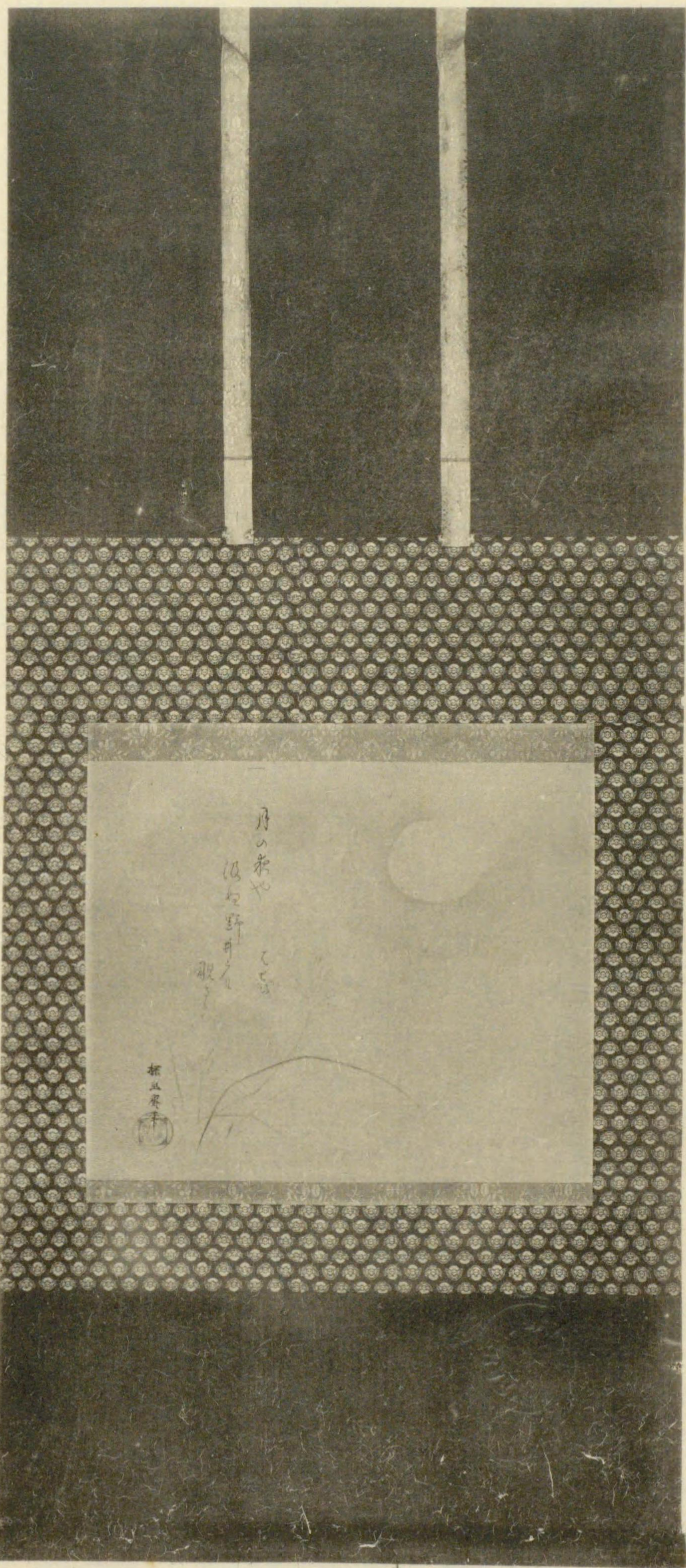
長崎山に信宿して
山里は又静なる
明の春
はせを

本品は元高野山金剛峰寺前管湛然大和尚より眞言宗管長
獅子岳快猛大僧正への傳來品



長崎山に信宿して
山里は又静なる
明の春
はせを

しんせい
[Red Seal]



月の夜や

波ぬ野井戸も

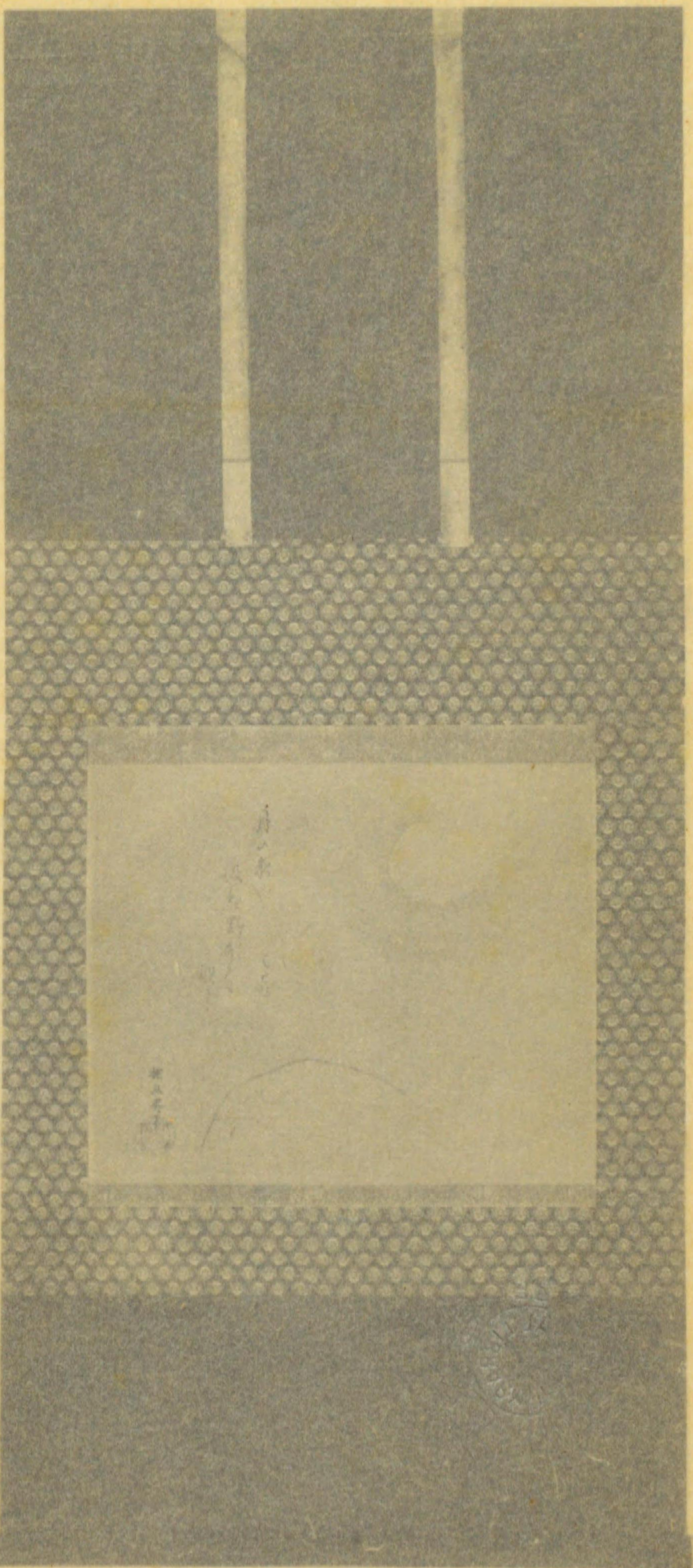
覗るゝ

はせを

此句掘筆の井を詠みしものなりとの説あれども確かならず。探幽齋は當時著名の巨匠にして幕府の御書師たる事は云ふまでもなく又芭蕉翁の筆蹟謹嚴なる所を以て想察するに敬意を表せる歟に窺はる、兩々相對して雙絶とすべきである。



芭蕉翁の賛 探幽筆 芒の書



月の夜や

汲ぬ野井戸も

眠るゝ

はせを

此句桐葉の井を詠みしものなりとの説あれども確かならず。探幽齋は當時著名の巨匠にして幕府の御書師たる事は云ふまでもなく又芭蕉翁の筆蹟謹嚴なる所を以て想察するに敬意を表せる歎に寤はる、兩々相對して雙絶とすべきである。



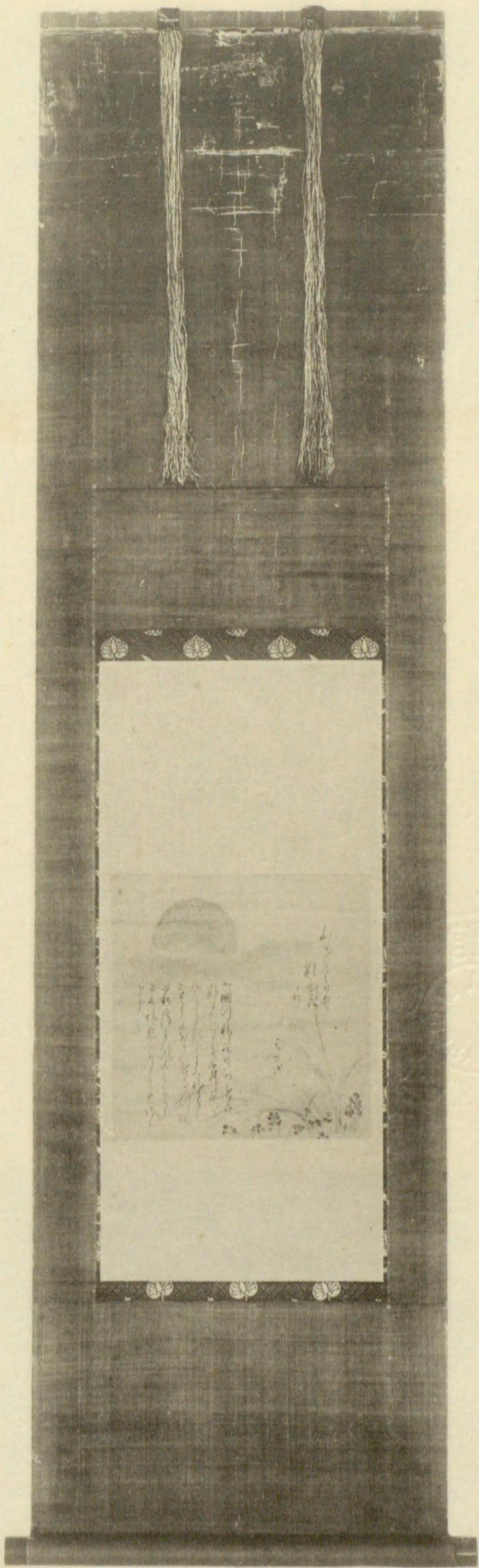
月の夜や

汲ぬ野井戸も

眠るゝ

探幽齋

秋風の咏自書賛

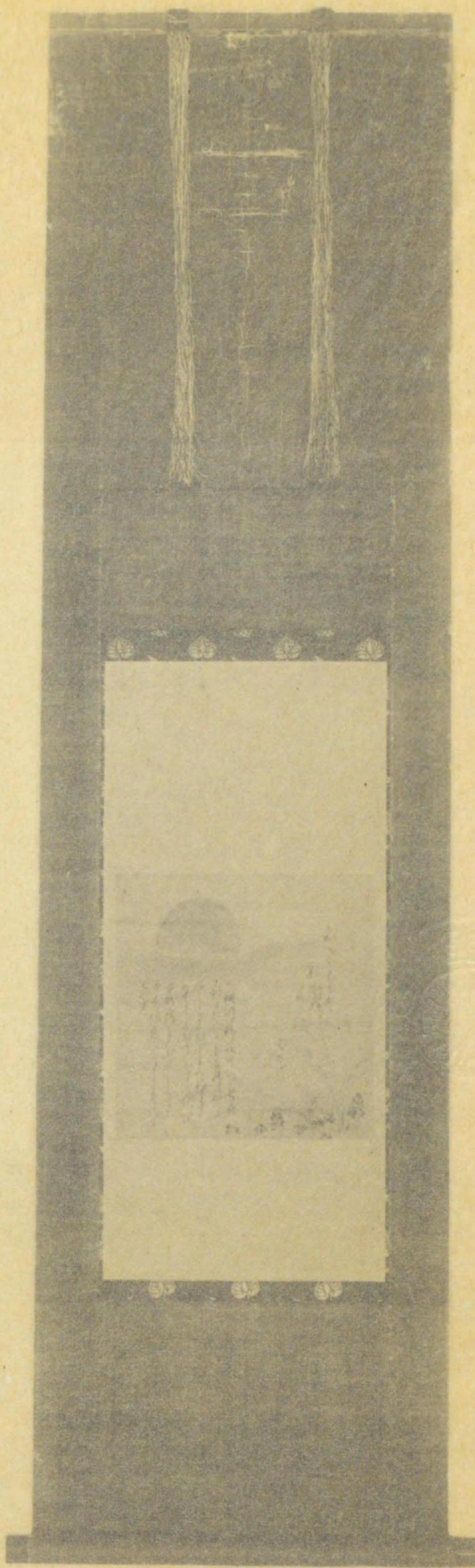


あかくと日は難面も秋の風 はせを
 北國行脚の時いつれの
 野にや侍りけんあつさ
 そまさるとよみ侍りし
 なてしこの花さへ盛過行此
 秋薄に風のわたりしを
 力に旅愁をなくさめ侍る
 とて

(元祿二年頃)



秋風の咏自書賛



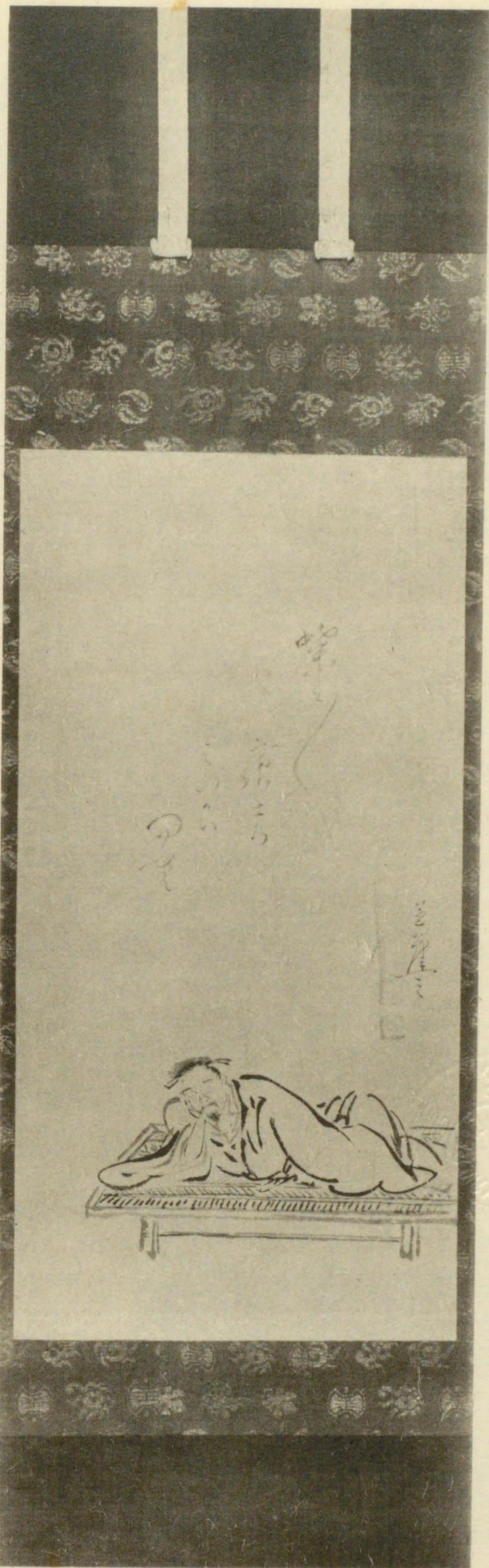
あか／＼と日は難面も秋の風 はせを
北國行脚の時いつれの
野にや侍りけんあつさ
そまさるとよみ侍りし
なてしこの花さへ盛過行此
萩薄に風のわたりしを
力に旅愁をなくさめ侍る
とて

(元祿二年頃)



あか／＼と日
北國行脚の時いつれの
野にや侍りけんあつさ
そまさるとよみ侍りし
なてしこの花さへ盛過行此
萩薄に風のわたりしを
力に旅愁をなくさめ侍る
とて

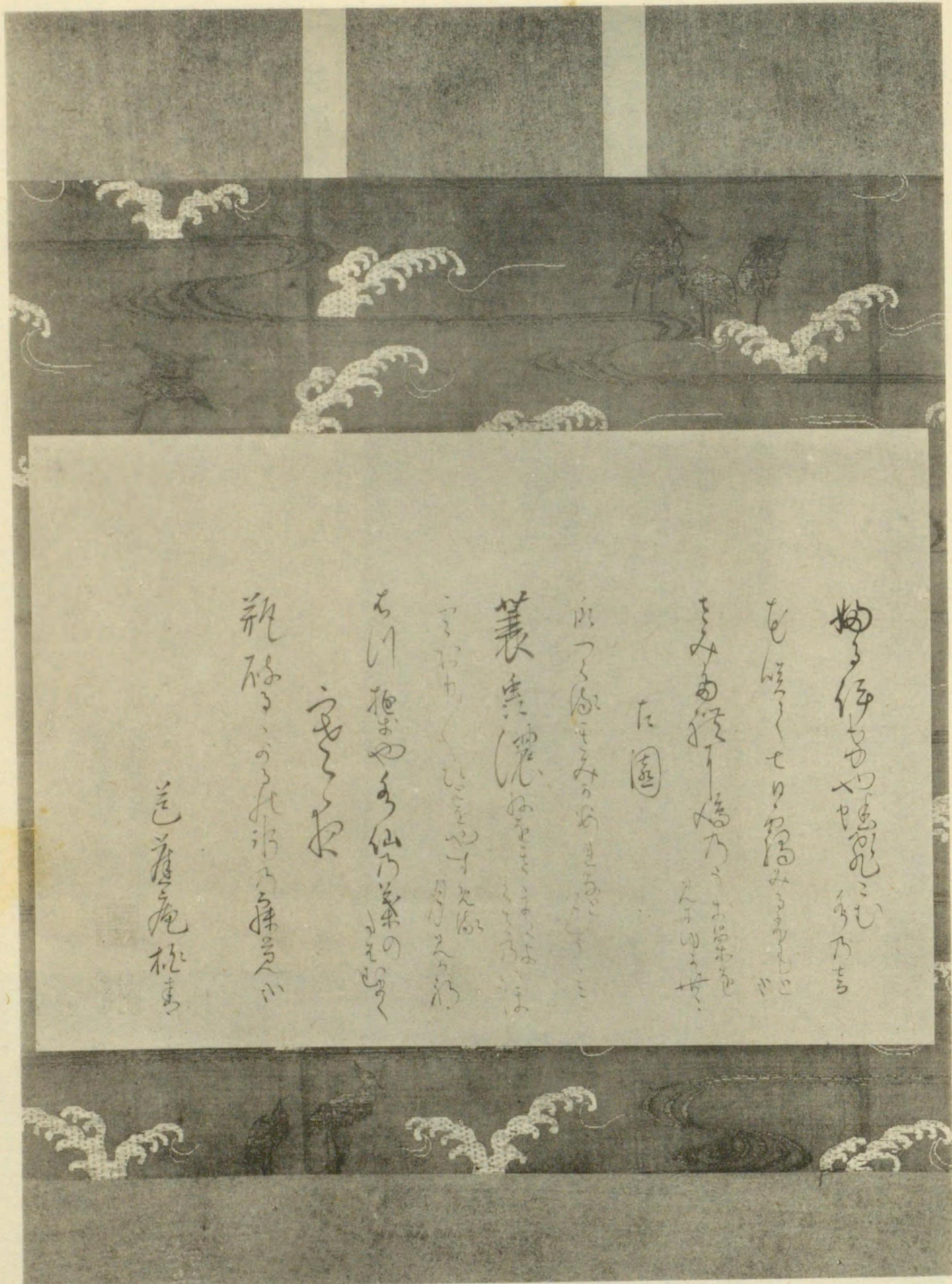
芭蕉 莊子自畫賛



蝶よく唐士のはいかい問ん

(虚栗時代)

四時の詠草



物よ伊や蛙飛こむ水の音
 花咲て七日鶴みるふもと哉
 さみたれに鴉のうき巢を
 見にゆかむ

瓜つくるきみかあれなと
 夕すよみ
 糞虫のねをきよにこよ
 くさのいほ
 雲おりひとをやすめる
 月見かな
 はつゆきや水仙の葉の
 たはむまで

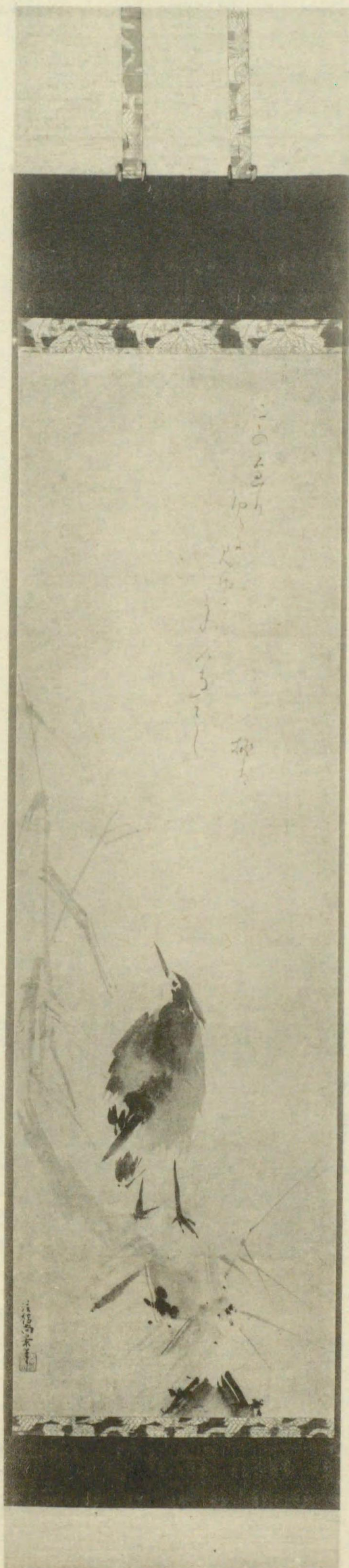
瓶破るよよるの水の寝覺哉
 芭蕉庵桃青

ふる伊けや蛙飛こむ水の音
 花咲て七日鶴みるふもと哉
 さみたれに鴉のうき巢を
 見にゆかむ

古 園
 瓜つくるきみかあれなと
 夕すよみ
 糞虫のねをきよにこよ
 くさのいほ
 雲おりひとをやすめる
 月見かな
 はつゆきや水仙の葉の
 たはむまで

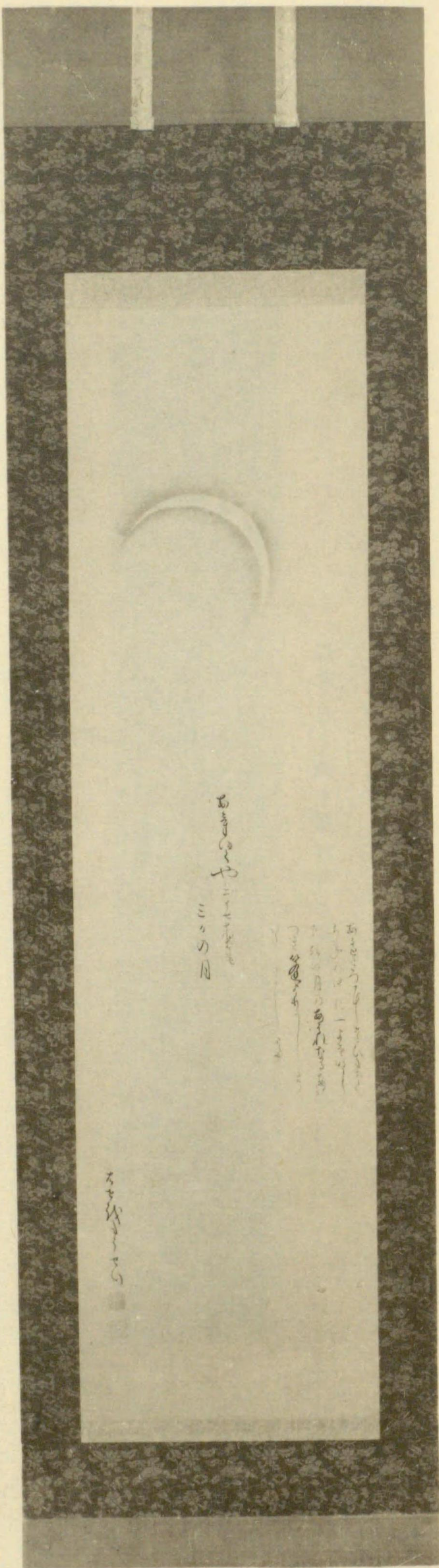
寒 夜
 瓶破るよよるの水の寝覺哉
 芭蕉庵桃青

芭蕉翁賛尙景筆五位鷺



この邊りめに見ゆるものみなすゝし
(元禄元年頃)

三日月の自畫賛



あるところにたひたちて
ふねの中に一よを明し
下弦の月のあはれなるあか
つき逢よりかしら
いたして
あ氣ゆくや二十七夜も
三日の月

はせをたらせい

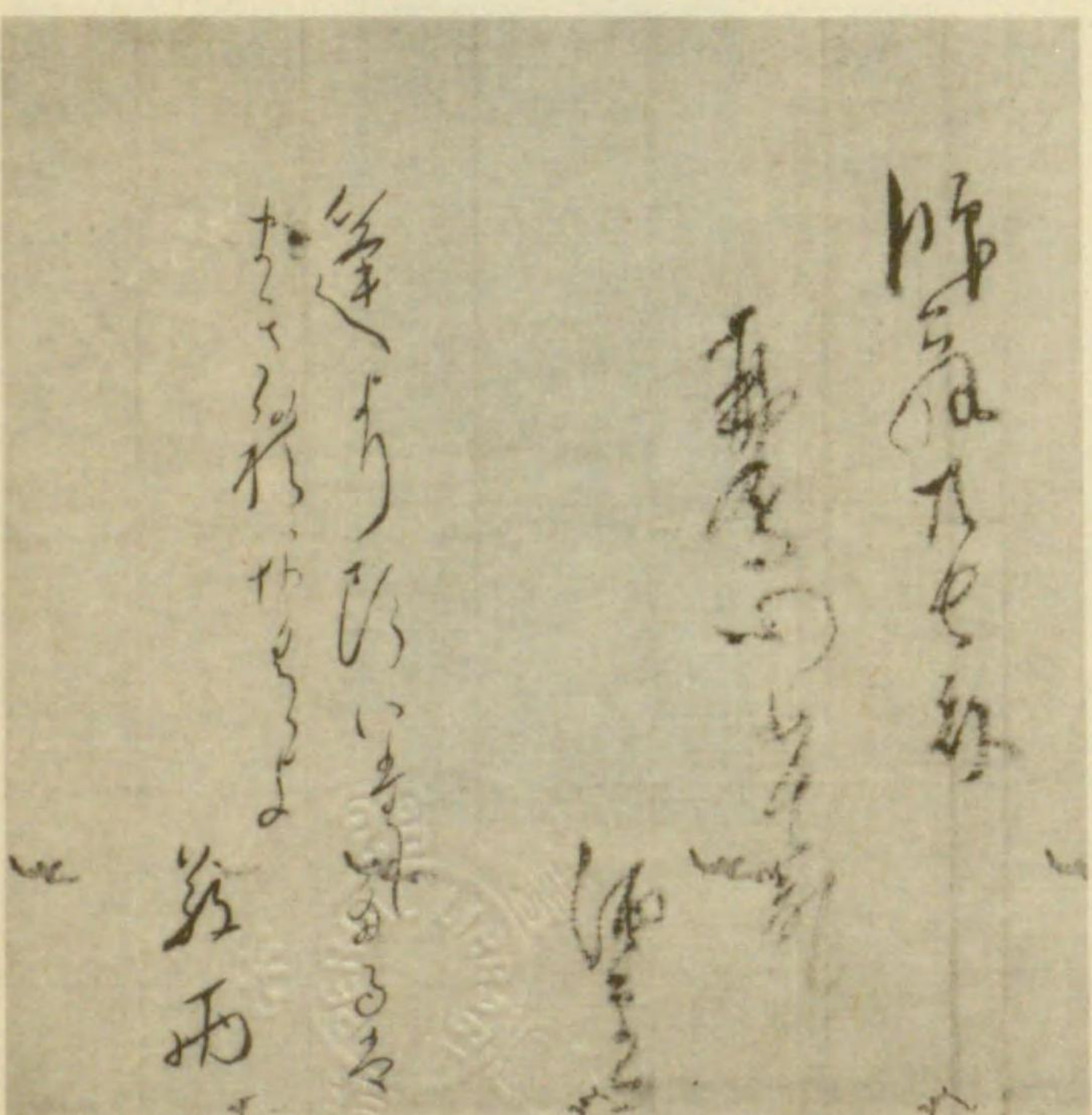
師翁廿七夜

再會心めてたし

酒 堂

逢より頭いたしたるは
まきれなく候よ

敬 雨



芭蕉翁 四詠短冊帖

鶯を魂にねふるかたはやなき桃
批

鶯を魂にねふるかたはやなき桃 青

馬ほくく我を繪にみん夏野哉桃
批

馬ほくく我を繪にみん夏野哉桃 青

夕顔に米つき休む哀かな桃
批

夕顔に米つき休む哀かな桃 青

三日月や朝顔の夕つほむらん桃
批

三日月や朝顔の夕つほむらん桃 青

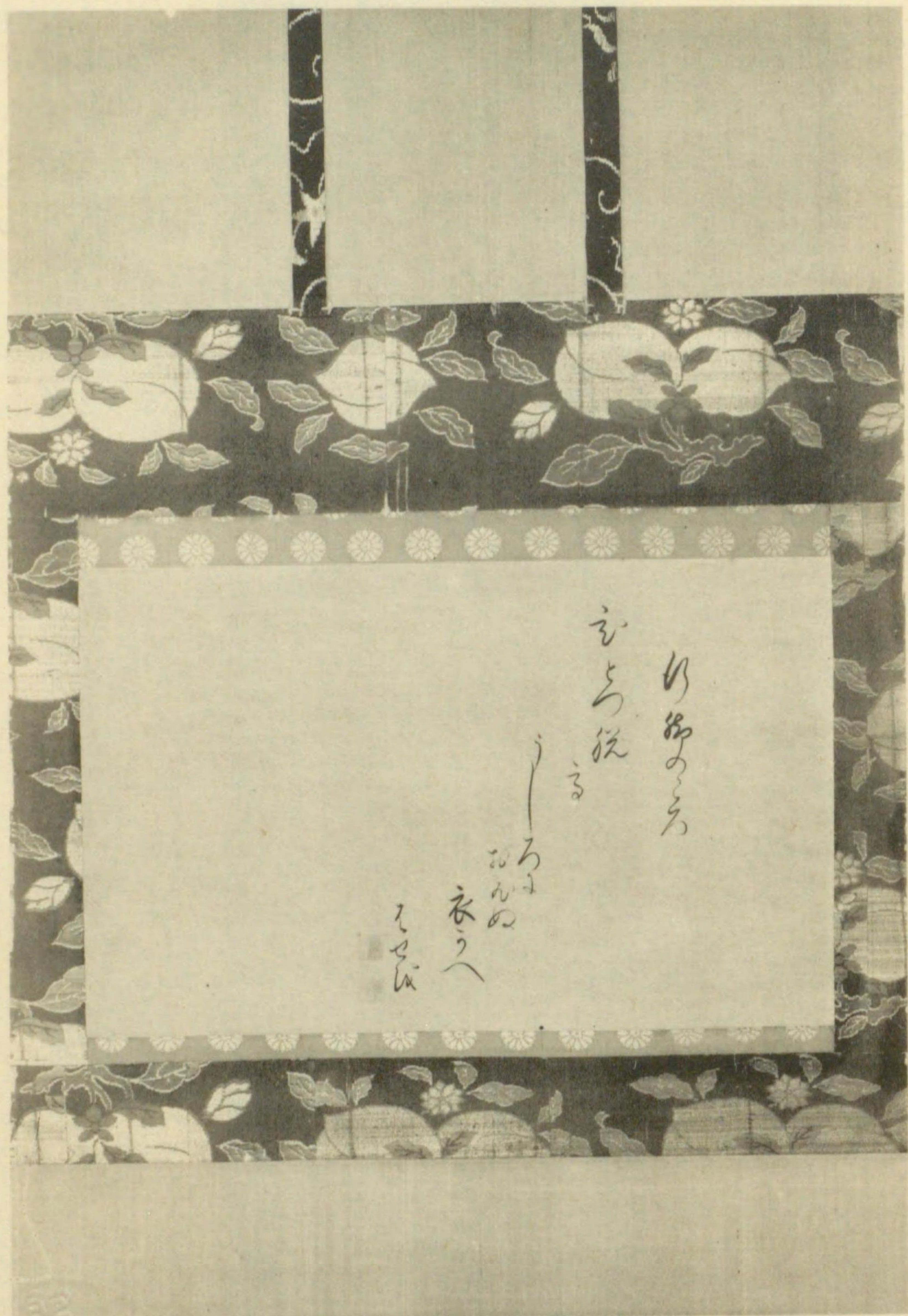
右芭蕉翁門人上州館林藩高山傳右衛門
併號樂時舊藏

はせを
馬上人物自書賛

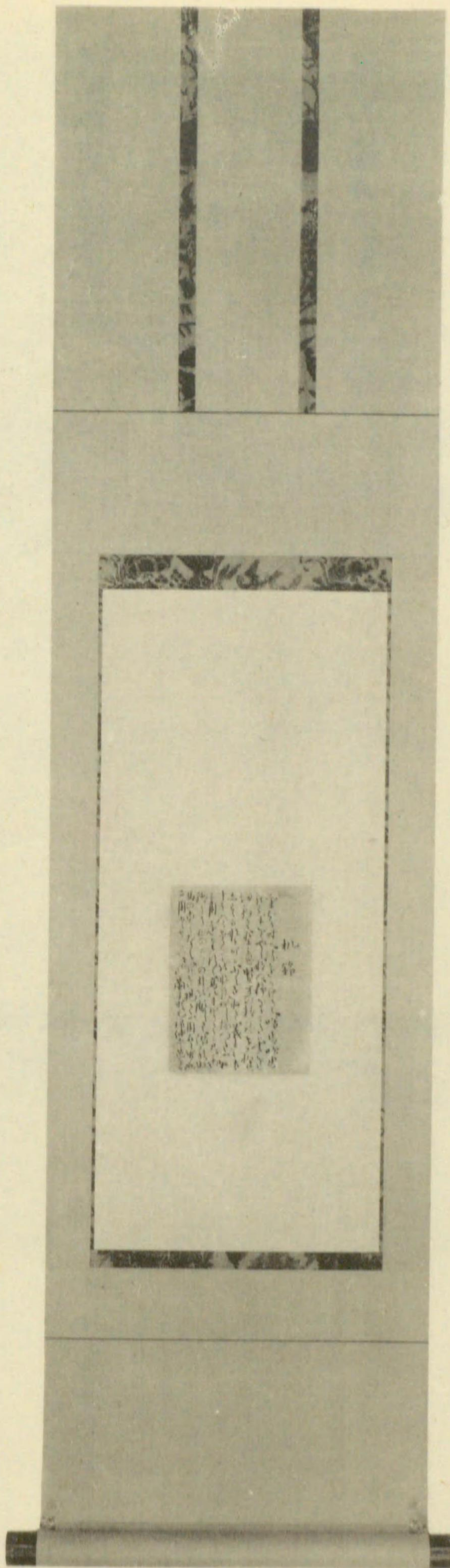


道ほそし相撲取草のはなの露 はせを畫賛

行脚のころ



行脚のころ
ひとつ脱
て
うしろに
おひぬ
衣かへ
はせを



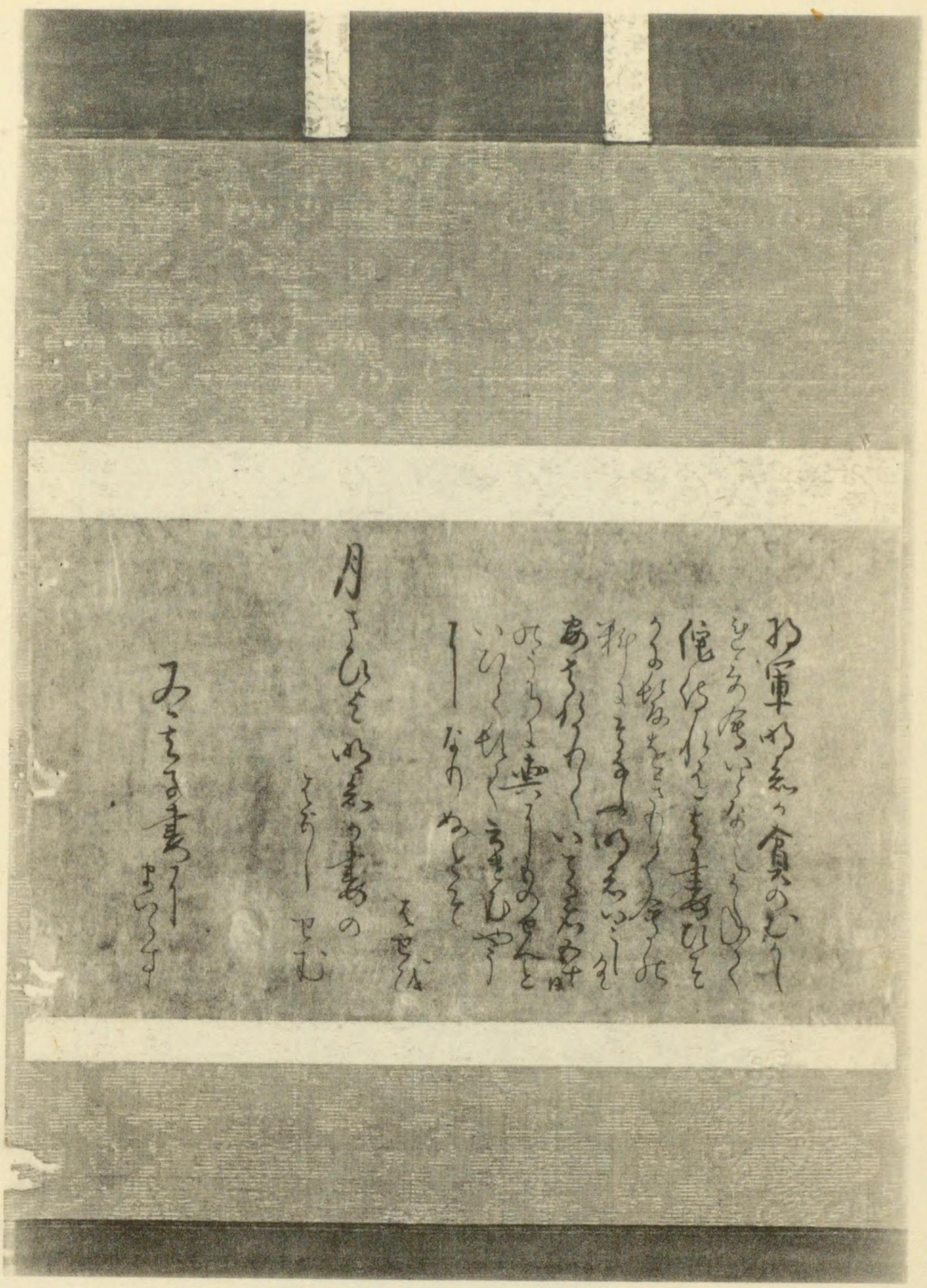
机 銘

閑なる時は腕をかけて暗馬吹慮
の氣をやしなむ静なるときは書を
紐解て聖賢才の精神を探り
しすかなる時はふてを取て義素の方
寸に入るたくみをなすおしまつき一物
三用をたすく高八寸おりて二尺兩
脚に天地の二つの卦を彫にして潜然
牧馬の貞に習ふ是を揚て一用とせんや
二用とせんや

机 銘

閑なる時は腕をかけて暗馬吹慮
の氣をやしなむ静なるときは書を
紐解て聖賢才の精神を探り
しすかなる時はふてを取て義素の方
寸に入るたくみをなすおしまつき一物
三用をたすく高八寸おりて二尺兩
脚に天地の二つの卦を彫にして潜然
牧馬の貞に習ふ是を揚て一用とせんや
二用とせんや 應蘭子求元祿仲冬芭蕉書

又玄子妻にまいらす



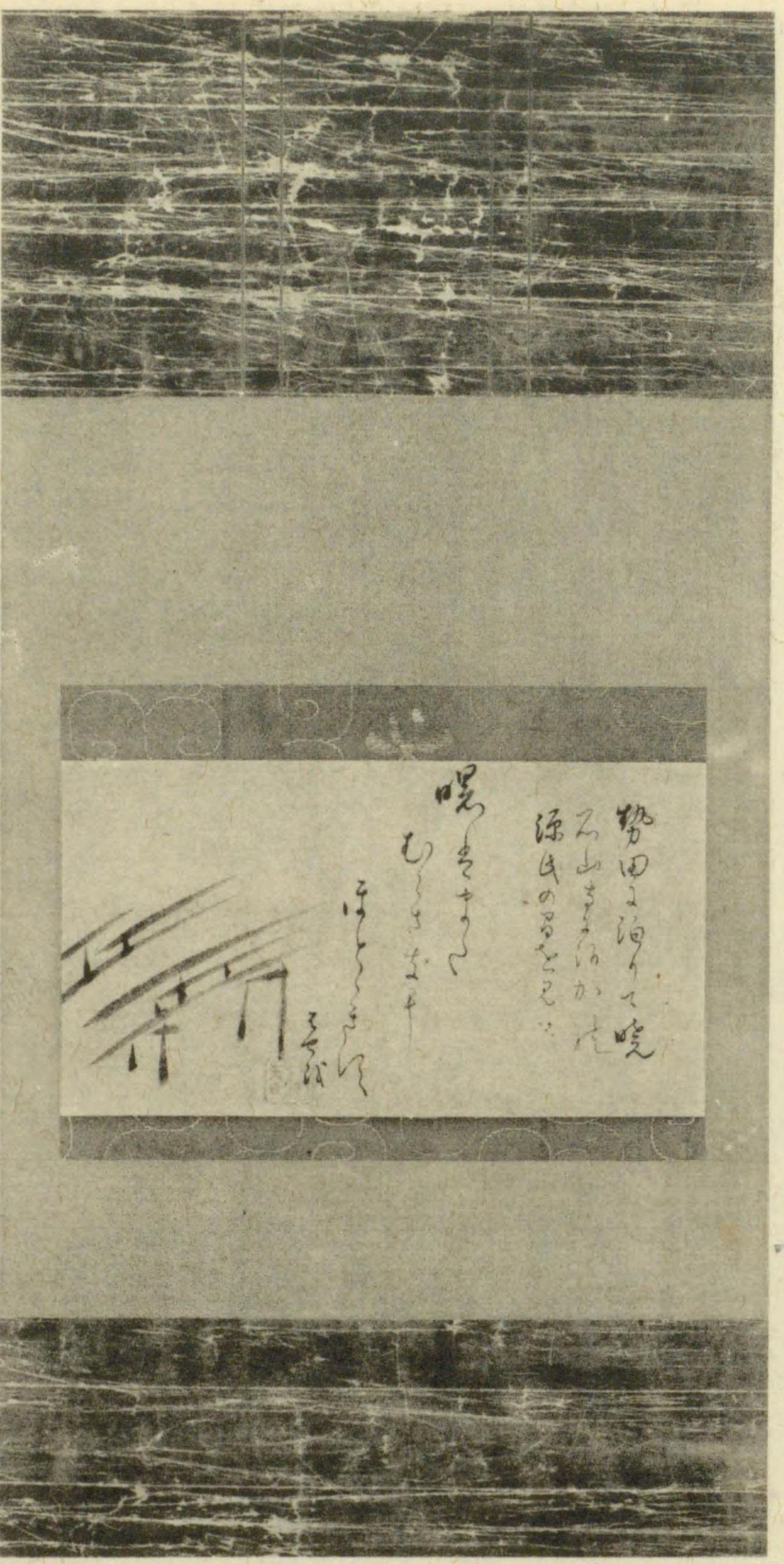
將軍の會ひ貧のむかし
連哥の會いとなみかねて
佗侍れは其妻ひそ
かに髪をきりて會の
料にそなふ明知いみしく
あはれかりていて君五十日
のうちに與にものせんと
いひて頓て云けんやう
になりぬとそ

月さひよ明知の妻のはなしせむ

又玄子妻にまいらす

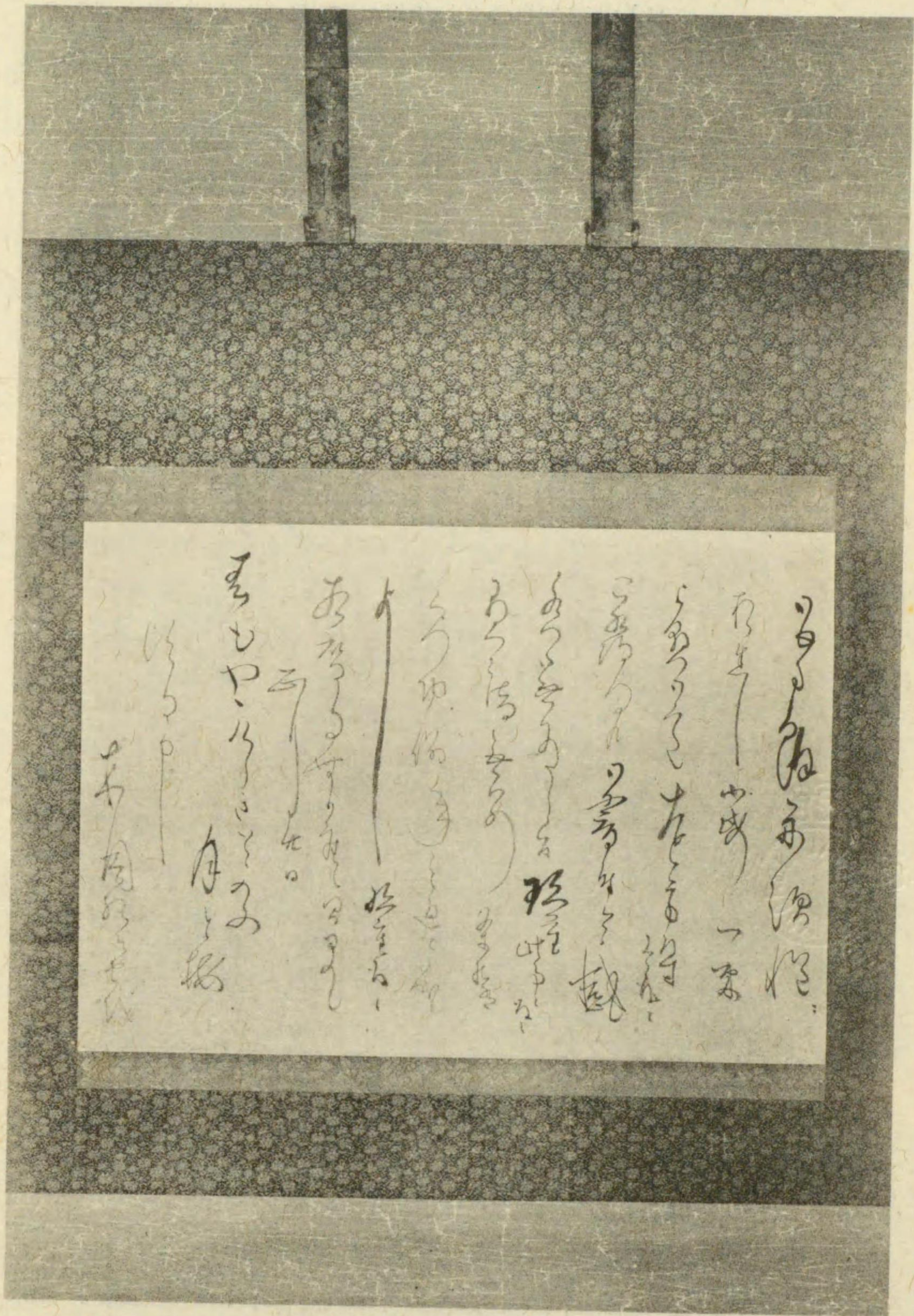
將軍明知か貧のむかし
連哥の會いとなみかねて
佗侍れは其妻ひそ
かに髪をきりて會の
料にそなふ明知いみしく
あはれかりていて君五十日
のうちに與にものせんと
いひて頓て云けんやう
になりぬとそ
月さひよ明知の妻のはなしせむ
又玄子妻にまいらす
(元祿二年)共箱

勢田に泊りて



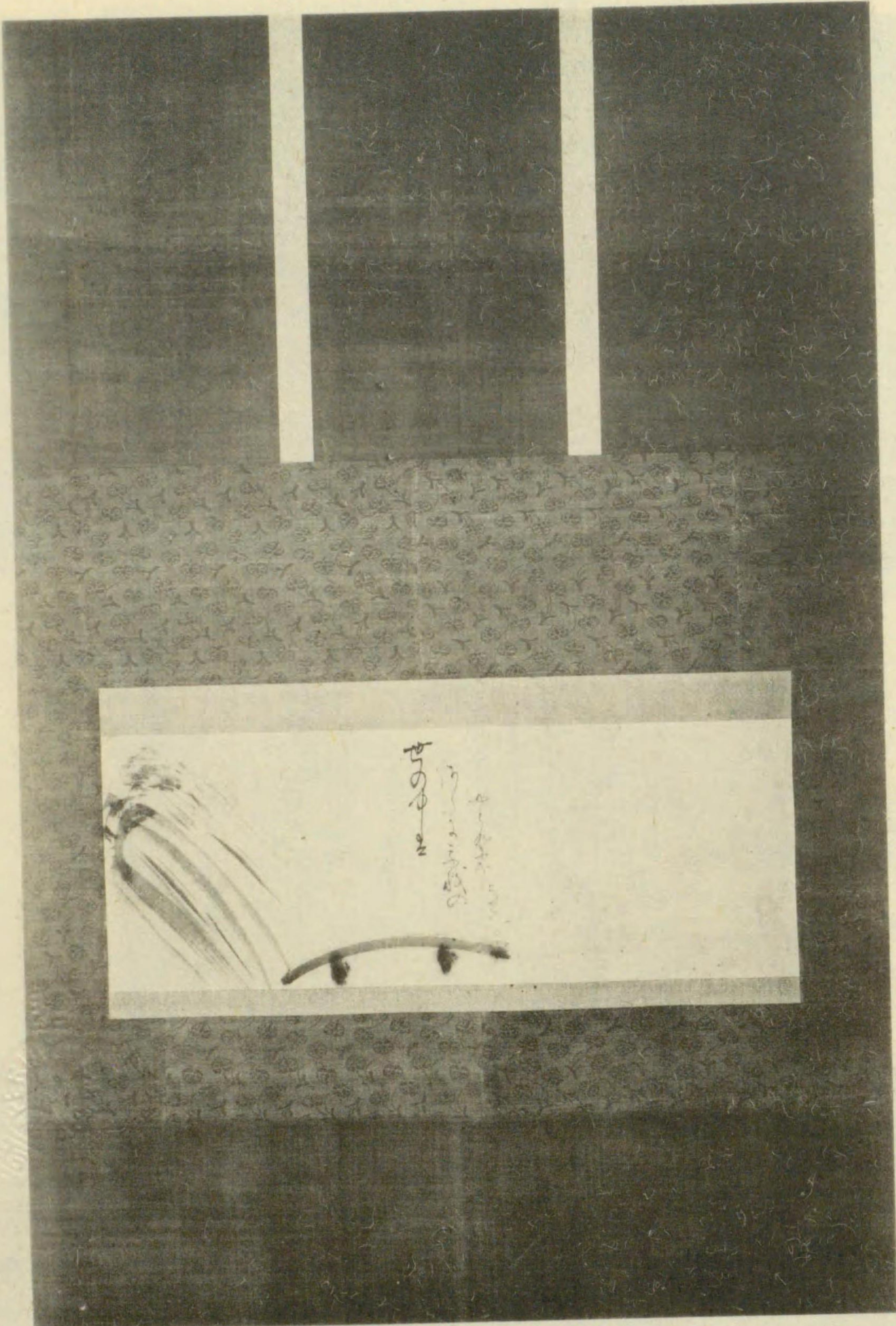
勢田に泊りて曉
石山寺に詣かの
源氏の間を見て
曙はまた
むらさきに
ほととぎす

勢田に泊りて曉
石山寺に詣かの
源氏の間を見て
曙はまた
むらさきに
ほととぎす
はせを
(元祿六年頃)



御芳翰舟便體に
相達し小紙一束
被懸御意遠方辱奉存候
御發句共御書付令感候
各御無爲之旨珍重此事に存候
愚庵無別條罷在候
三つ物例年之通可被成候
よし珍重存候
相變事無御座候間早々
正月廿日
春もやけしきとよのふ
月と梅

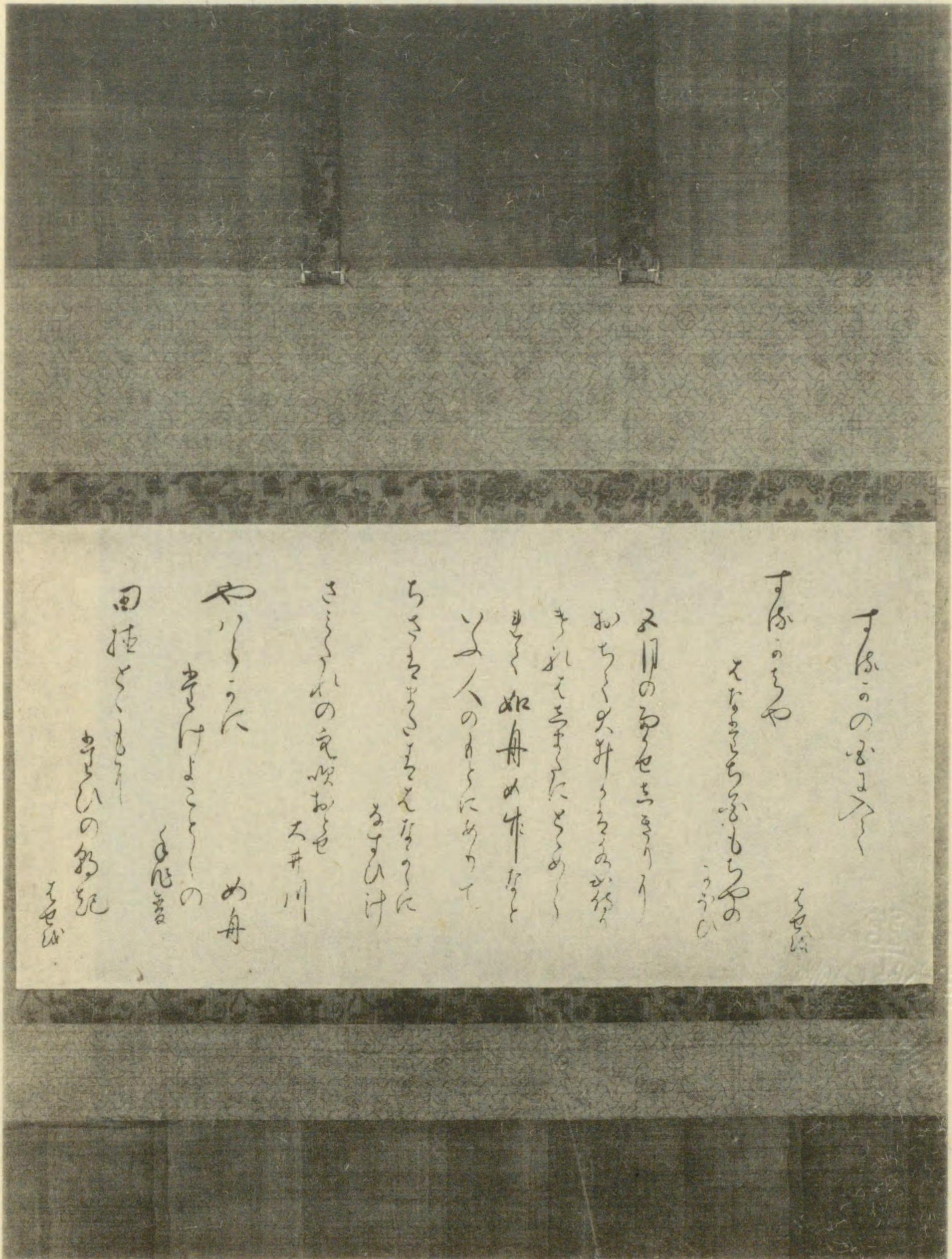
頃日中
木因様
はせを



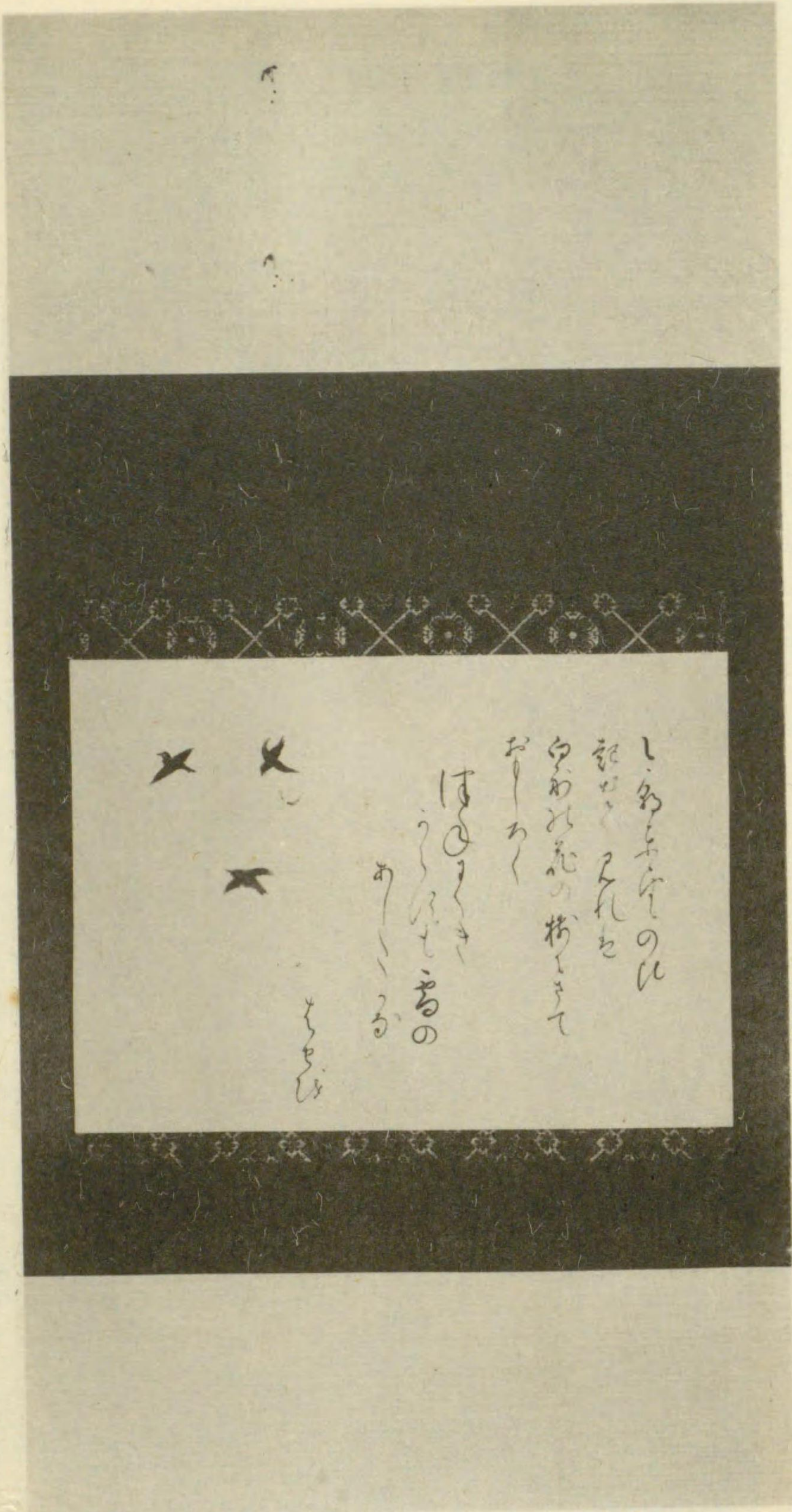
世の中は
やとり哉
さらに宗祇の
はせを
(天和二年頃)

此の句天和二年前虚栗に見え、宗祇の「世の中はさらに時雨の宿り哉」と紛らはしき旨問題となつて居るが、此眞筆ある上は如上の句は體に芭蕉翁の作として是認すべきであり、又宮川夜話草に伊勢にては外宮と内宮の間にある橋を俗にかりや橋と云ひ、岩淵町に屬し、橋の東橋村何某と並び爰に影踏む柳と云ふ古木有り即ち駒とめて影踏む橋の柳かな

此句宗祇法師の詠として、古跡として柳と共に享保頃迄ありしと云ふ、依て此圖は影踏む柳とかりや橋とを圖し、宗祇其人を詠み入れたものである。

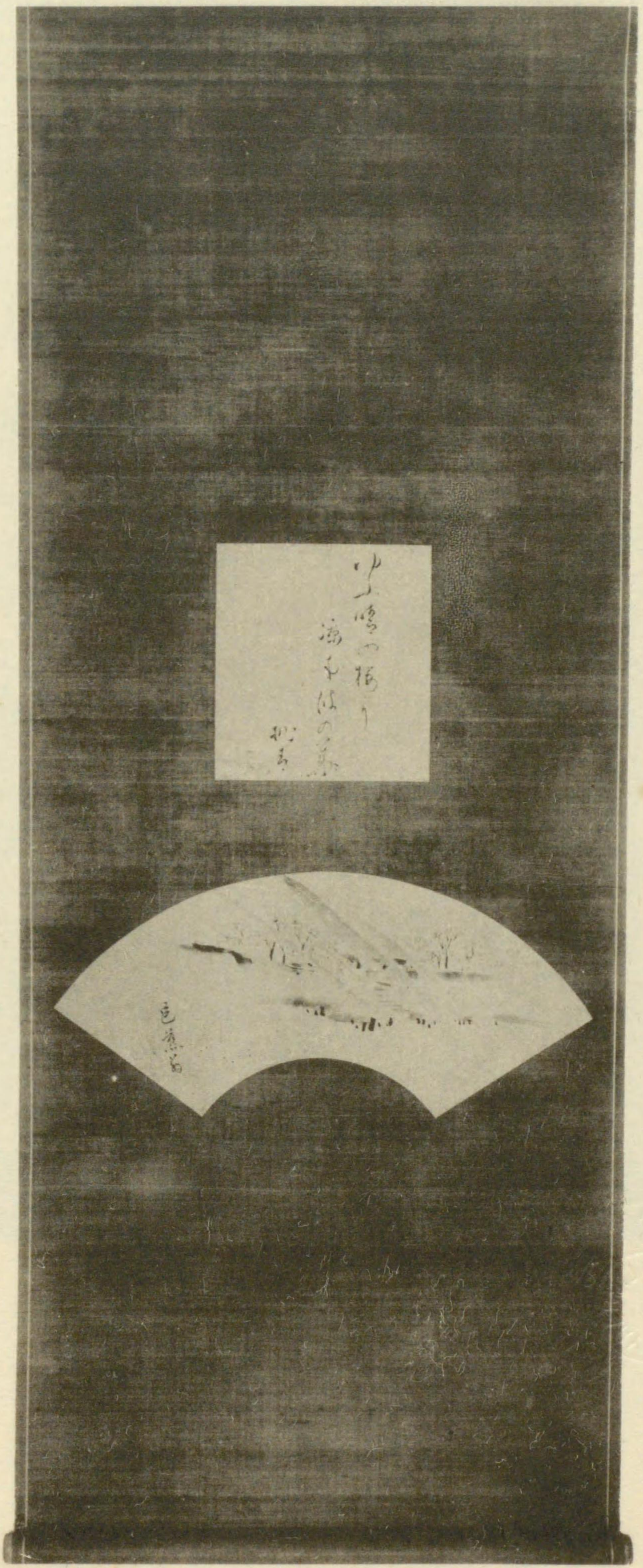


するかの國に入て
はせを
するかちや
はなたち花もちやの
にほひ
五月の雨かせしきりに
おちて大井かは水田侍り
けれはしまたとよめら
れて如舟如竹など
いふ人のもとにありて
ちさはまた昔はなからに
なすひ汁
さみたれの空吹おとせ
大井川
やはらかに
たけよことしの
手作麥
田植とよもに
たひの朝起
はせを
如舟



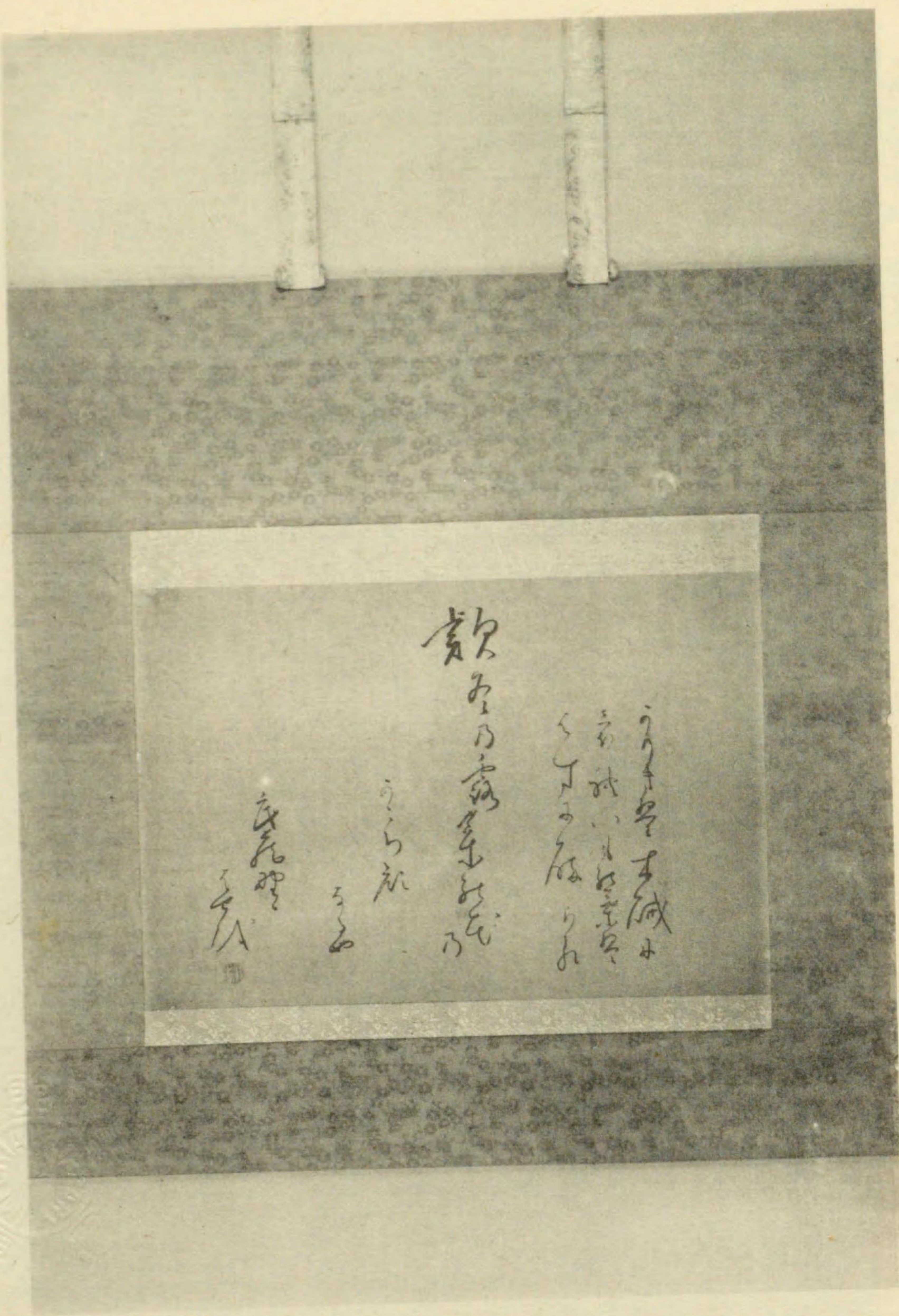
今朝東雲の頃
起出て見れば
白妙の花の樹にさて
おもしろく
つねにくき
からすも雪の
あしたかな
はせを

色紙扇面交せ張



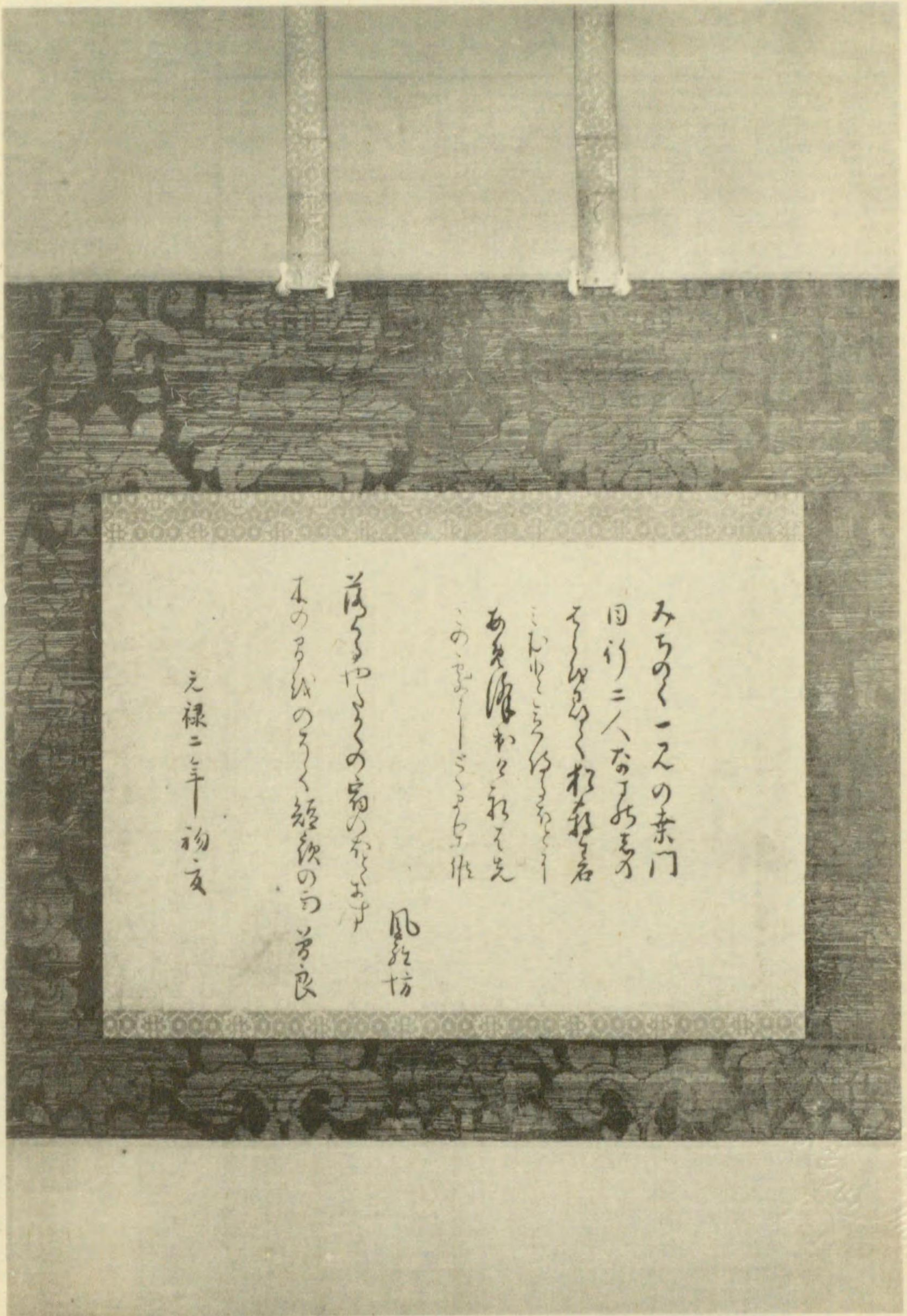
ゆふ晴や櫻に
涼む波の華
桃
青

款冬の露の詠



かりきは木賊に
しほれいもの葉は
はすに破らる
款冬の露
菜の花の
かこち顔
なるや
武蔵野の
はせを
(天和元年頃)

奥の細道の一節殺生石



みちのく一見の桑門
同行二人なすのしの
はらを尋て輪殺生石
みむと急侍るほとに
あめ降出ければ先
この處にとまり候

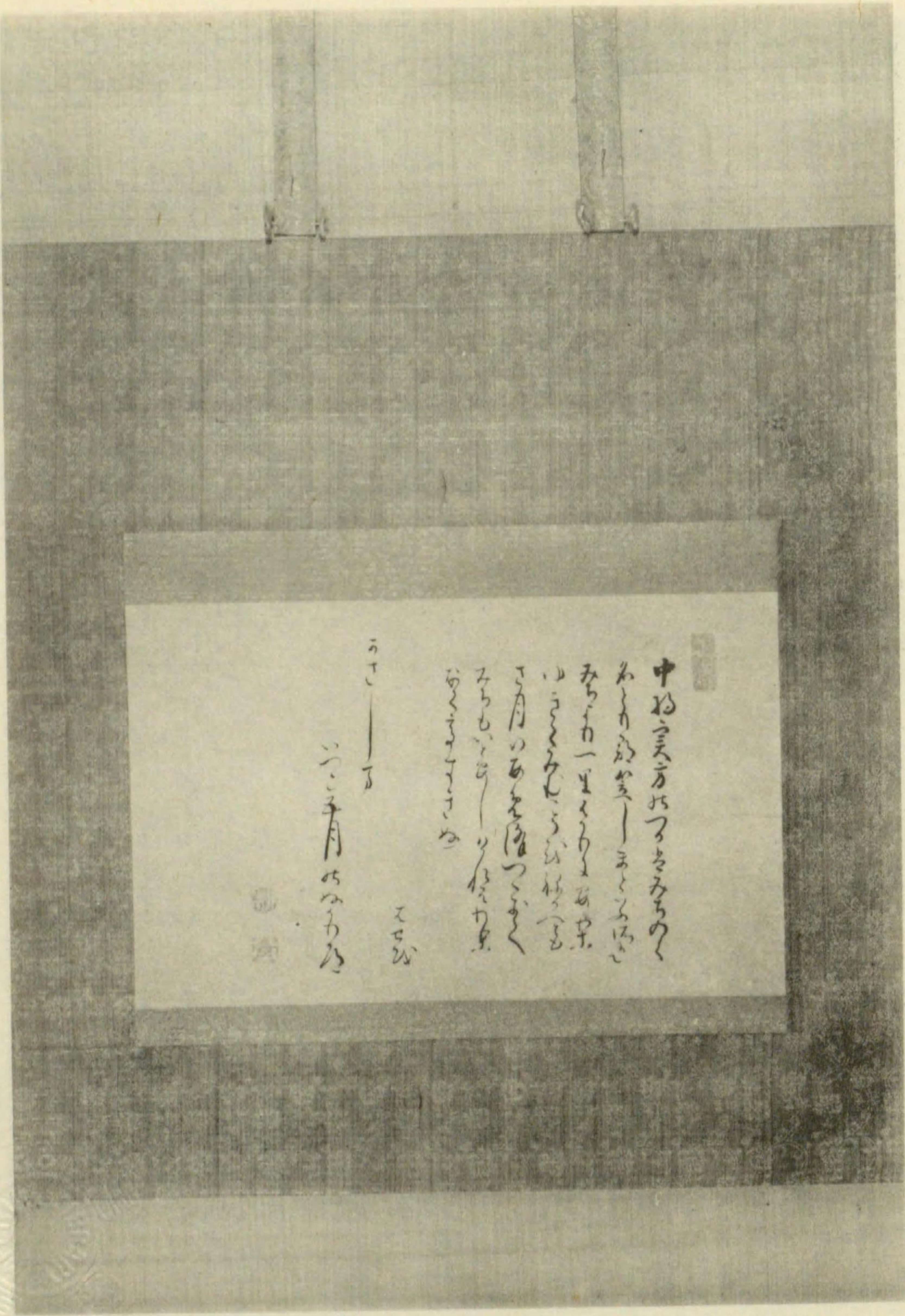
風羅坊

落くるやたかくの宿のほととぎす
木の間をのそく短夜の雨
曾良

元禄二年初夏

みちのく一見の桑門
同行二人なすのしの
はらを尋て輪殺生石
みむと急侍るほとに
あめ降出ければ先
この處にとまり候
風羅坊
落くるやたかくの宿のほととぎす
木の間をのそく短夜の雨
曾良
元禄二年初夏

奥の細道の一節實方中將の古蹟

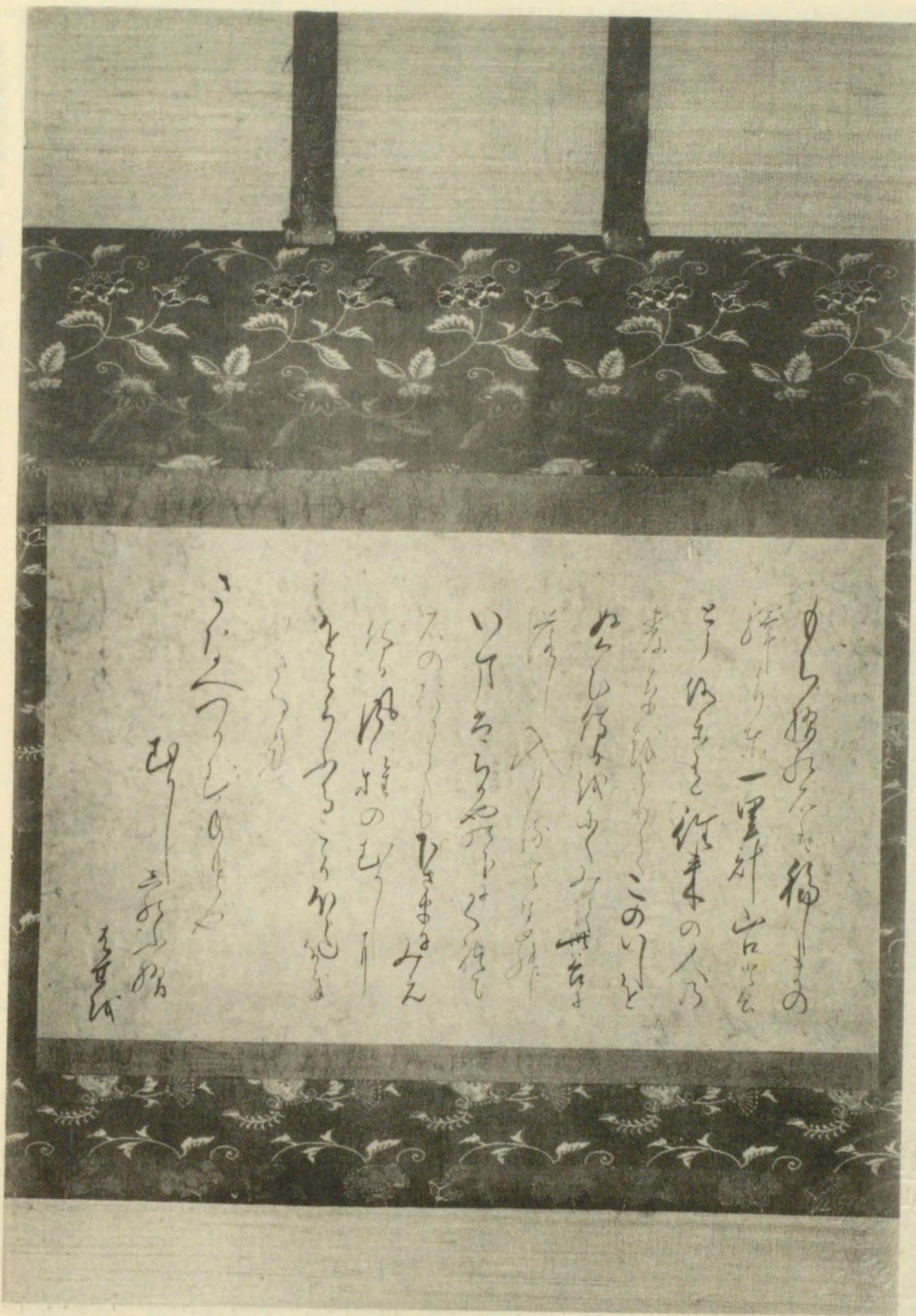


中將實方つかはみちのく
名とり郡笠しまといふ所にて
みちより一里はかりにあり
ゆきてみむことをねかへとも
さ月のあめ降つゝきて
みちもいとあしければわり
なくてすきぬ

かさしまは
いつこ五月のぬかり道

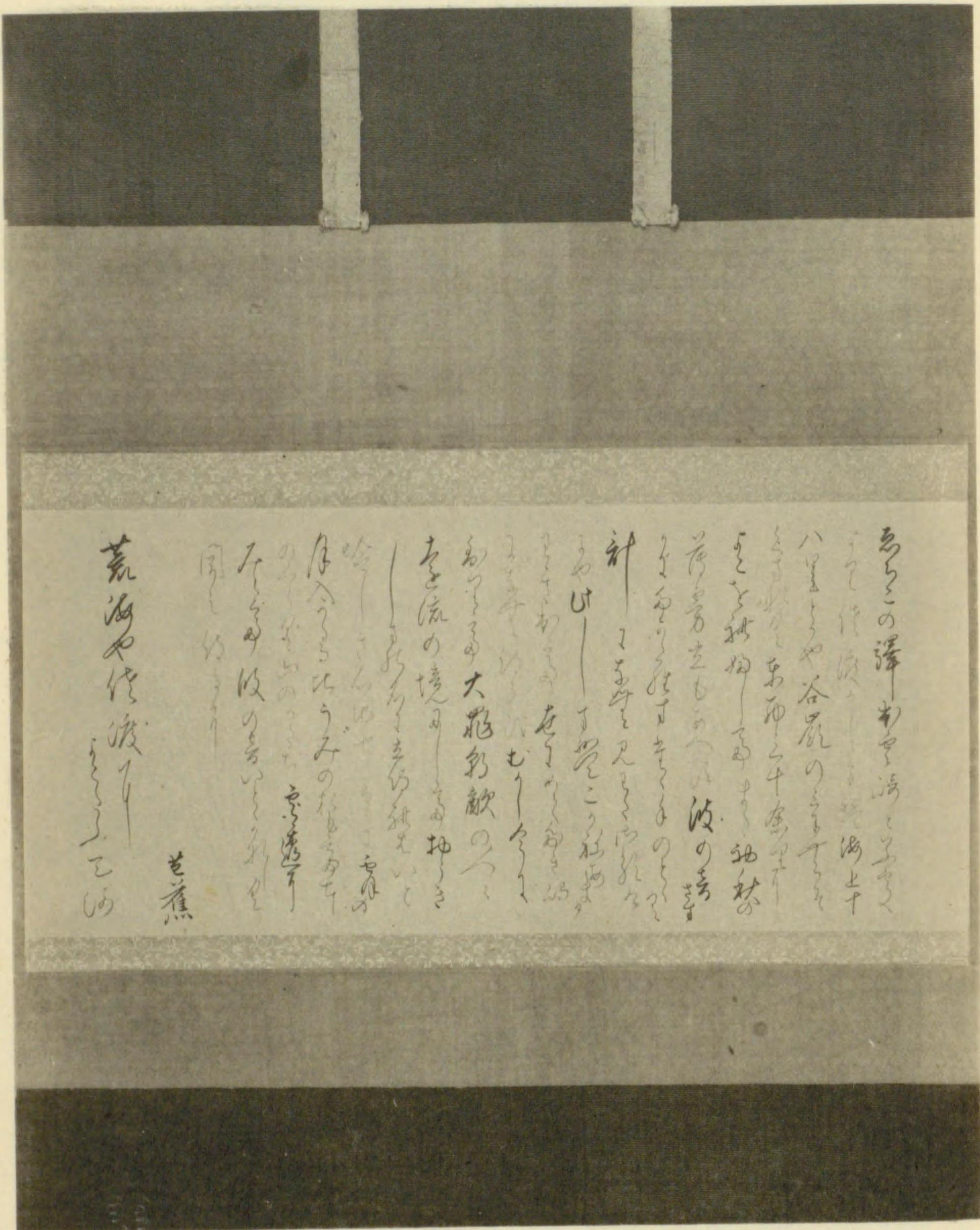
中將實方のつかはみちのく
名とり郡笠しまといふ所にて
みちより一里はかりにあり
ゆきてみむことをねかへとも
さ月のあめ降つゝきて
みちもいとあしければわり
なくてすきぬ
はせを
かさしまは
いつこ五月のぬかり道

文字摺石反故之文



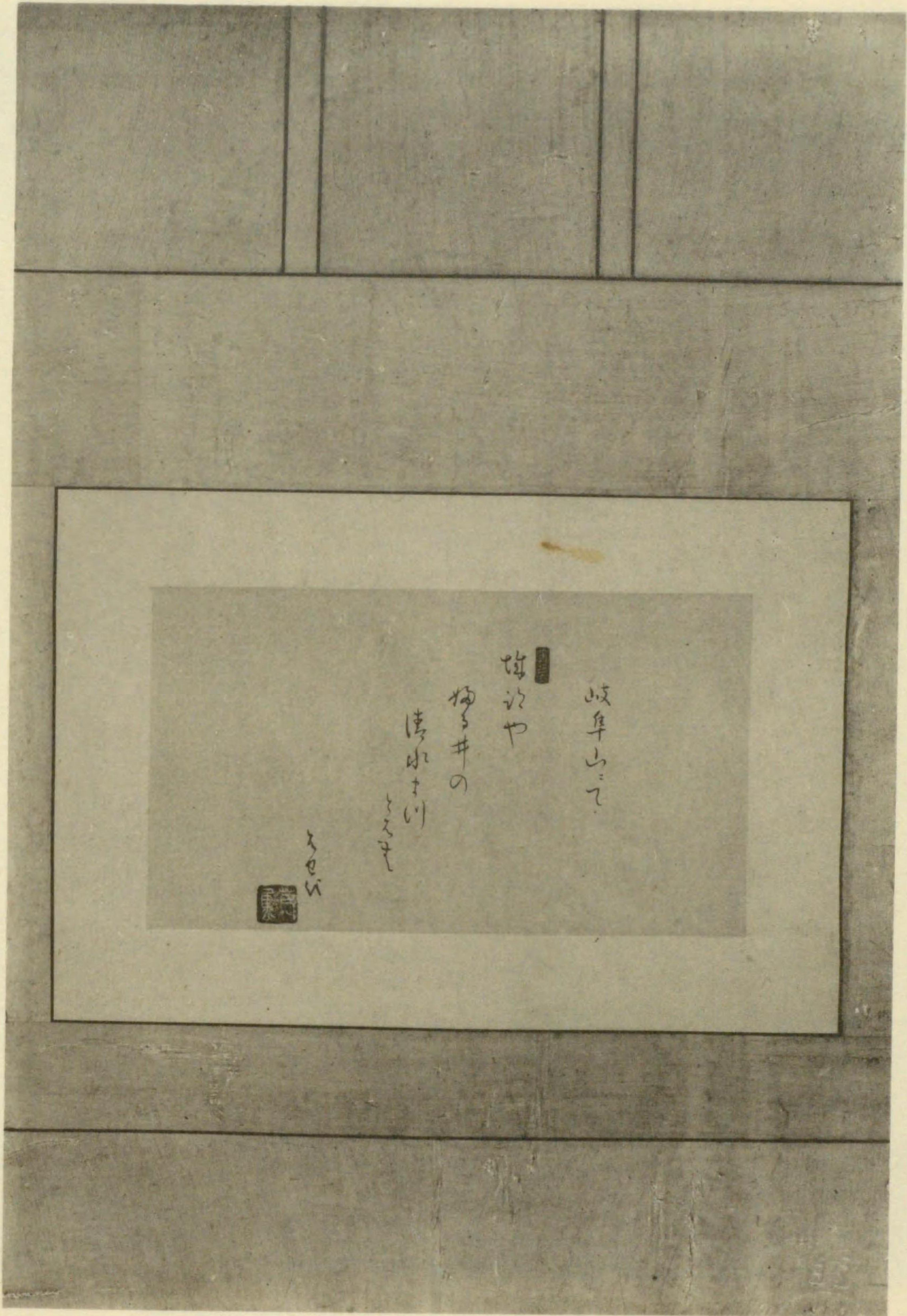
もち摺の石は福しまの
驛より東一里計山口と云
ところに有往來の人の
麥草をとりてこのいしを
ぬくひ侍るをにくみて此谷に
落し入けるとなん
いまはちかやの下にかくれて
石のおもても下さまにみえ
侍る風雅のむかしに
をとろふこそほ意なき
わさなれ
さなへつかむ手もとや
むかししのふ摺
はせを

天河之文章並句



ちこの澤柳や海とよそく
八里とよや谷嶺の氣無そ
く万なく東西三十餘里に
よこをれふしてまた初秋の
薄霧立もあへず波の音さす
かにたかゝらすたゝ手のとゝく
計になむ見わたさるけ
にや此し方はかねあま多
わき出て世にめてたき局
になむ侍るをむかし今に
到りて大罪朝敵の人々
遠流の境にして物うき
しまの名に立侍れはいと
冷しき心地せらるゝに宵の
月入かゝる頃うみのおもてほ
のくらく山のかたち雲透に
みえて波の音いとゝかなしく
聞え侍るに
荒海や佐渡に
よこたふ天河
芭
蕉

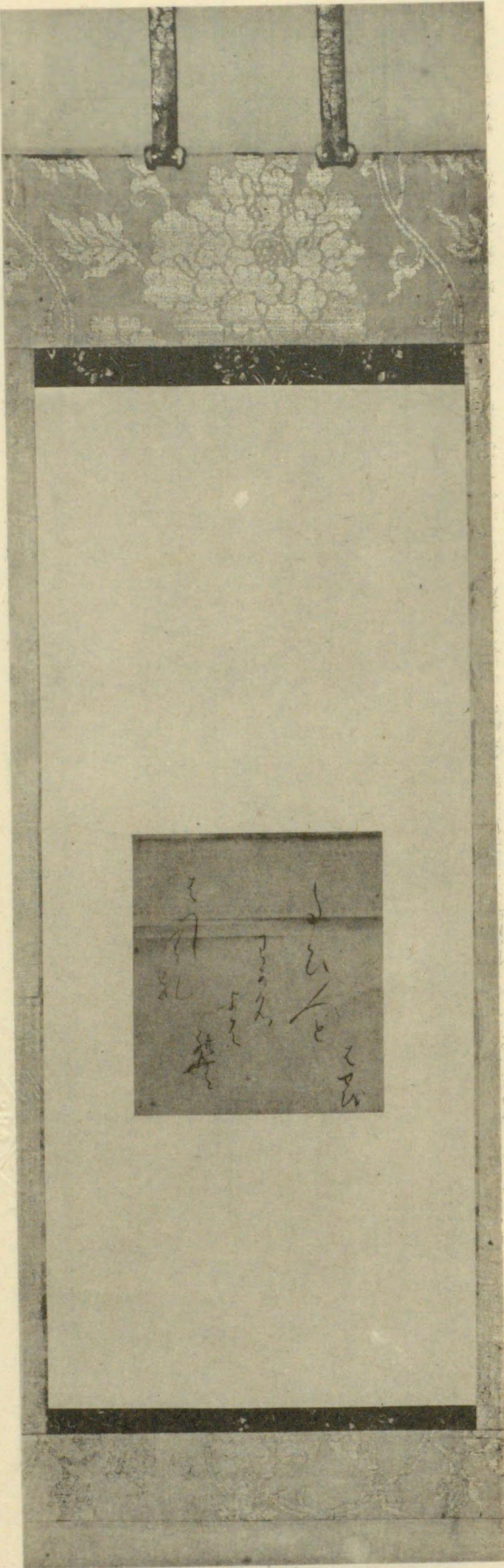
岐阜山にて



岐阜山にて
城跡や
ふる井の
清水まつ
とはむ
はせを

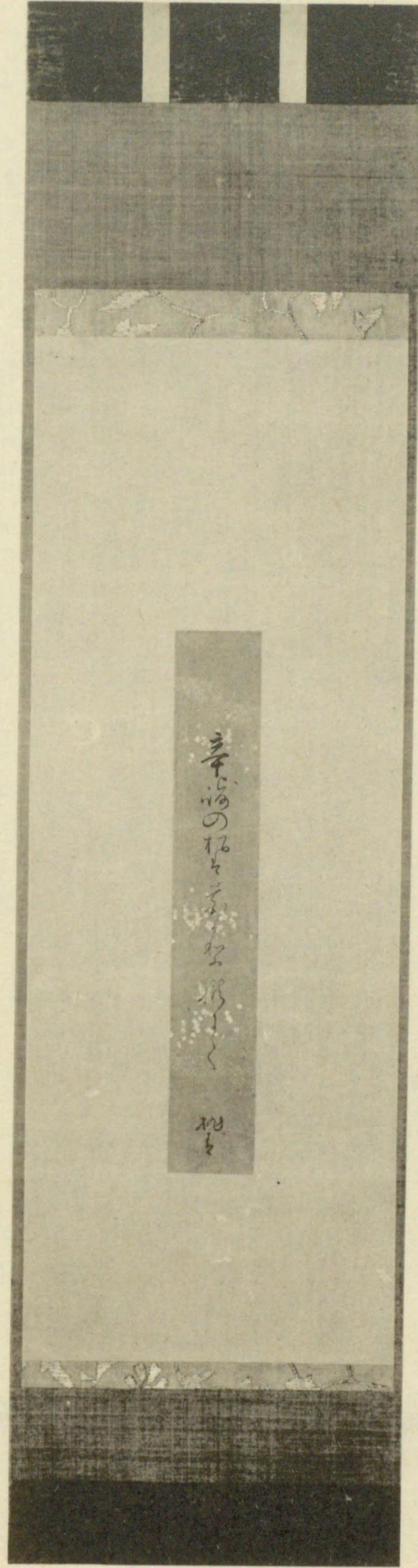
本書横物の裏書に
翁岐阜山の句予所藏也。
其許任所望讓可進候。
壬辰仲春 蓮二坊。

はせを
初時雨の色紙



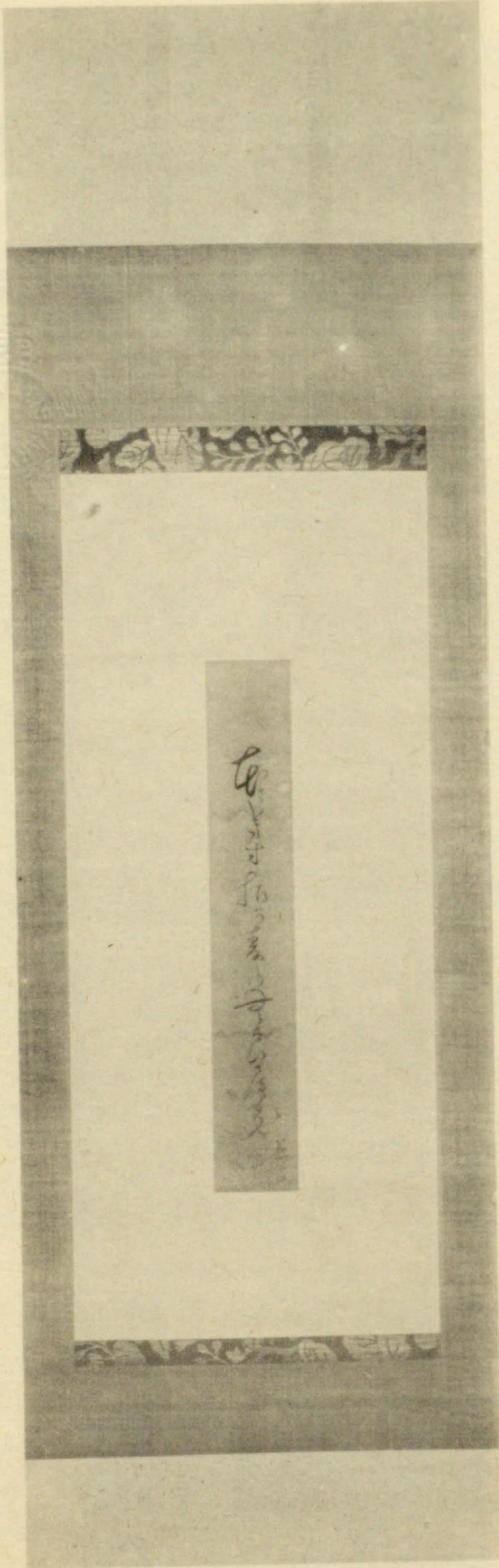
多ひ人とわか名よはれんはつしくれ
はせを
(貞享四年)

桃
青
辛崎の松短冊



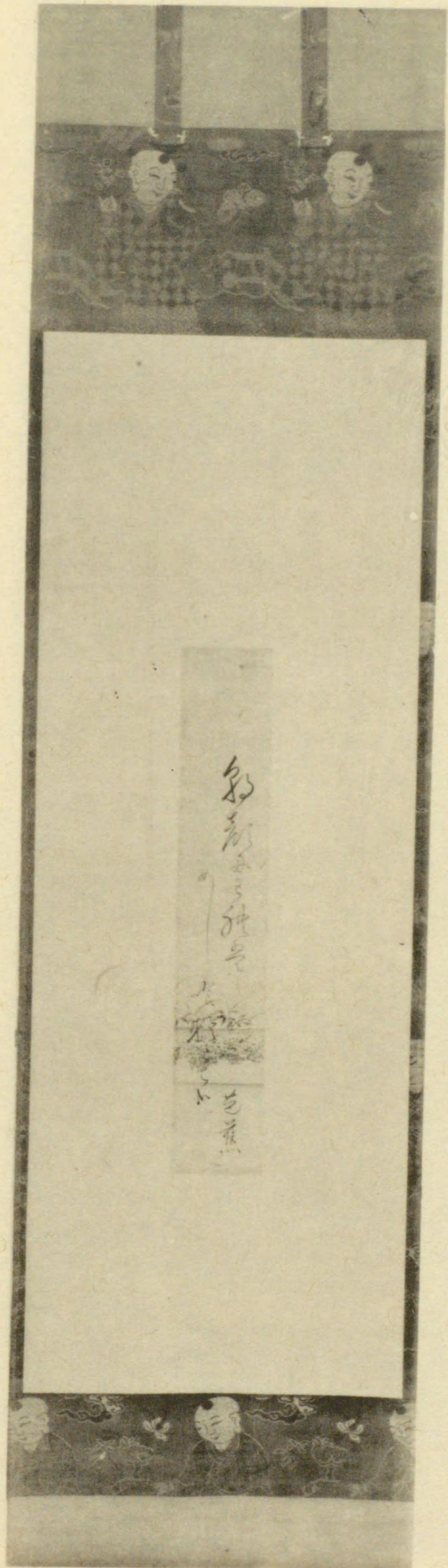
辛崎の松は花より臍にて 桃
青
(貞享二年)

芭
蕉
むら尾花の短冊



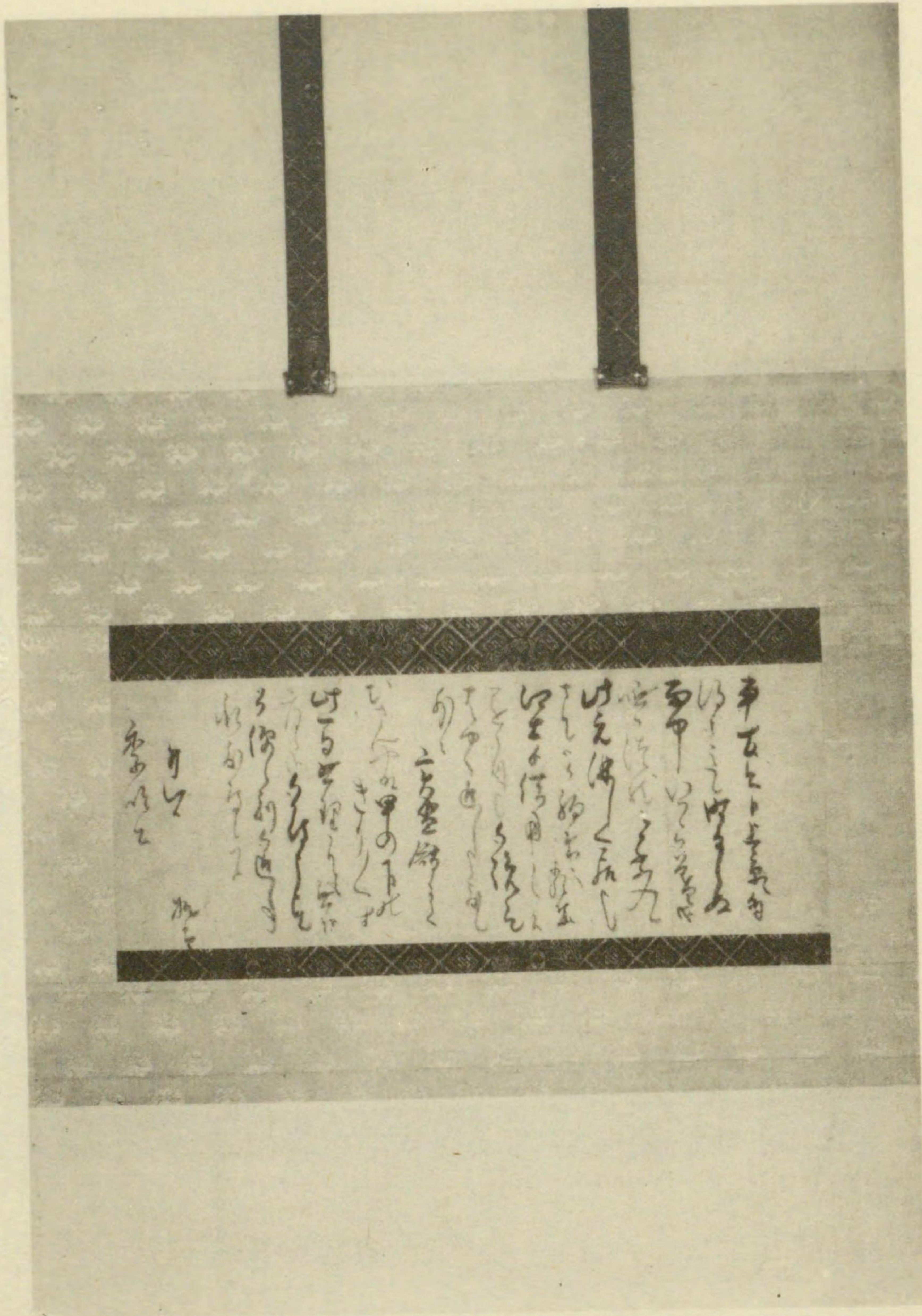
ほととぎす招くか麥のむら尾花 芭
蕉
(天和元年)

朝顔の短冊



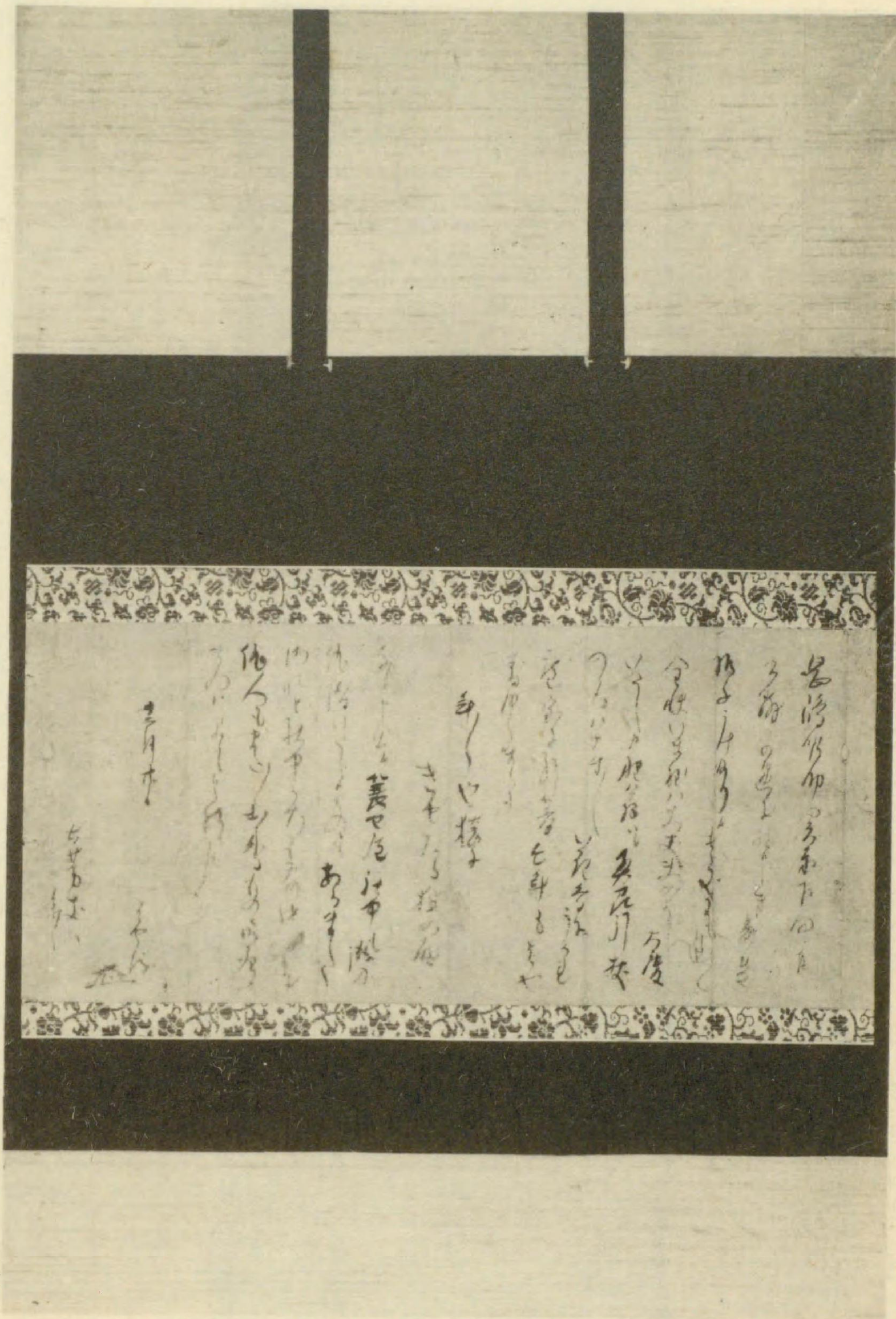
朝顔にわれは
めし喚おとこ哉
芭蕉

季吟宛句入之文



車友今日上京に付
得御意候時ならぬ
雨中いかゞ御暮候哉
無御徒然と察入候
此元淋しく居申候
さては御約束之類集
江土より借用し候間
懸御目申候御覽候はゞ
はやく返し申度候
外に
實盛館にて
むさんやな甲の下の
きりくす
此一句無理にても無御
座候哉御尋申度候
御便之刻御返事
承度候以上
廿八日 桃青
季吟公

土芳宛句入之文



岡嶋順助關東下向ニ付
書翰早速に相ひらき委敷
様子うけ賜り候貴丈にも追々
全快いま程ハ丈夫のよし大慶
いたし候野翁も奥州引杖
のちハますく花鳥にうかれ
庵室に引籠今年もはや
暮ゆくまゝに

年くや猿に

きせたる猿の面

など申出候養虫庵社中も誠の
俳偈いたし候ものもあるましく

されと社中うち多の中には

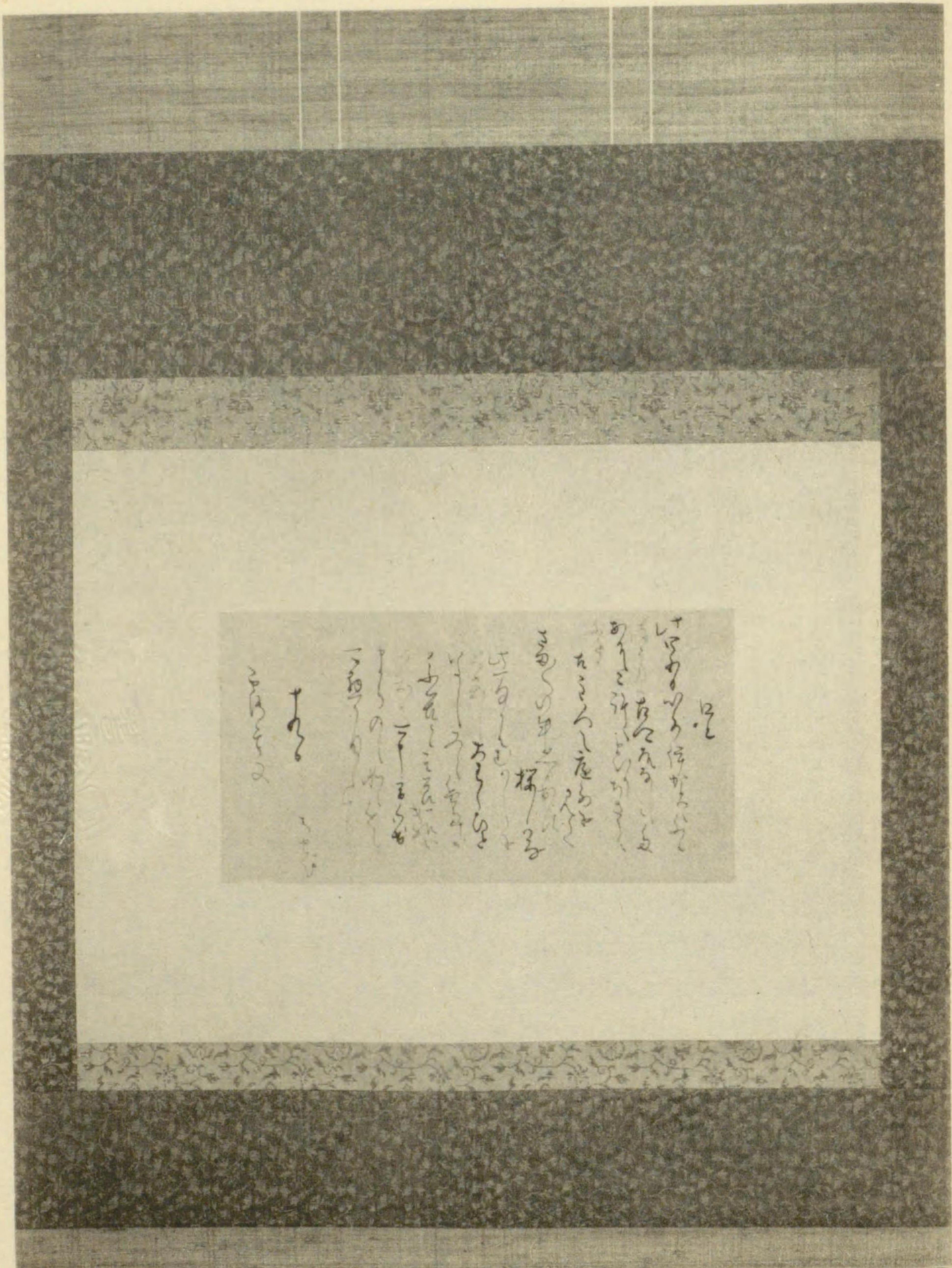
俳人もまだく出来るものに御座候
まつハ早々申殘候 以上

十二月廿日

はせを

土芳丈へ
参る

露言宛之文



口上

此四五日以前伊賀へ参候

彼方は古郷故なしミ多

あそこ許へまいりちさうに

逢申候

古主人の庭前を見て

さまの事思日出す

櫻かな

此一句にてむかしを

思日出し大わらひを

いたし候又々益過候而

参管に候其節は貴様へも

爲御知せ可申候間御出

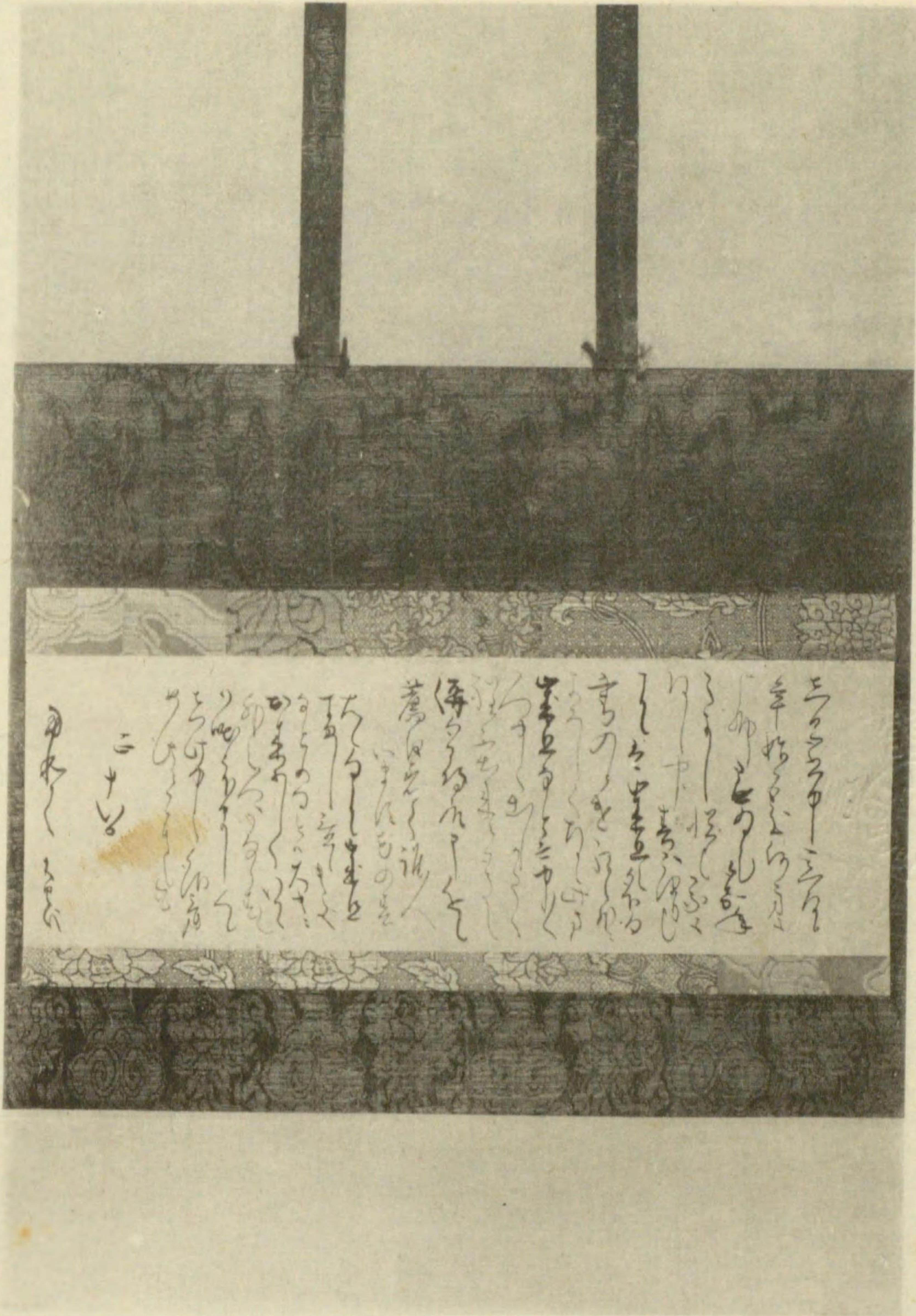
まち入候猶近く可懸御

目候以上

十九日 是を

露言丈

用和宛句入之文

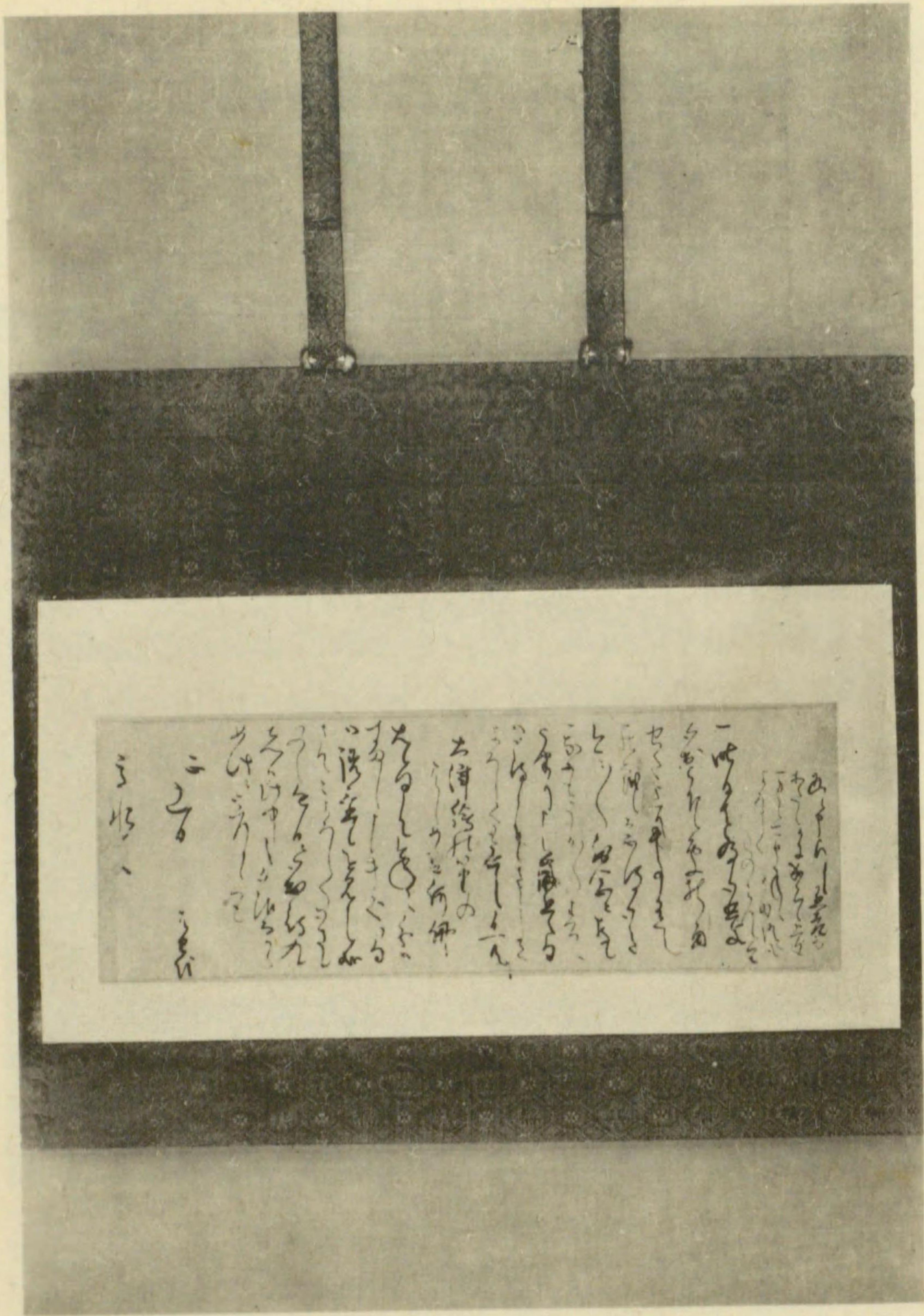


先日御書中添存候
年始御慶何方も
申納候御無爲にて御嘉年
之よし悦申候我も
同しやうに春へうつり申候
さては歳且之御ほ句
書入被遺殊之外に
よろしく存候此方
歳且なとは中
人中へ出しかた
併御尋故申進候
薦を着て誰人
います花の春
右之句にて歳且
すまし置候貴丈
なとの句とは大きに
出来あしくいか
外之人へかならず
御咄し被下ましく候
先此中之御報旁々
如此に御座候以上

正十八日
用和丈

はせを
(元禄三年頃)

意水宛句入之文

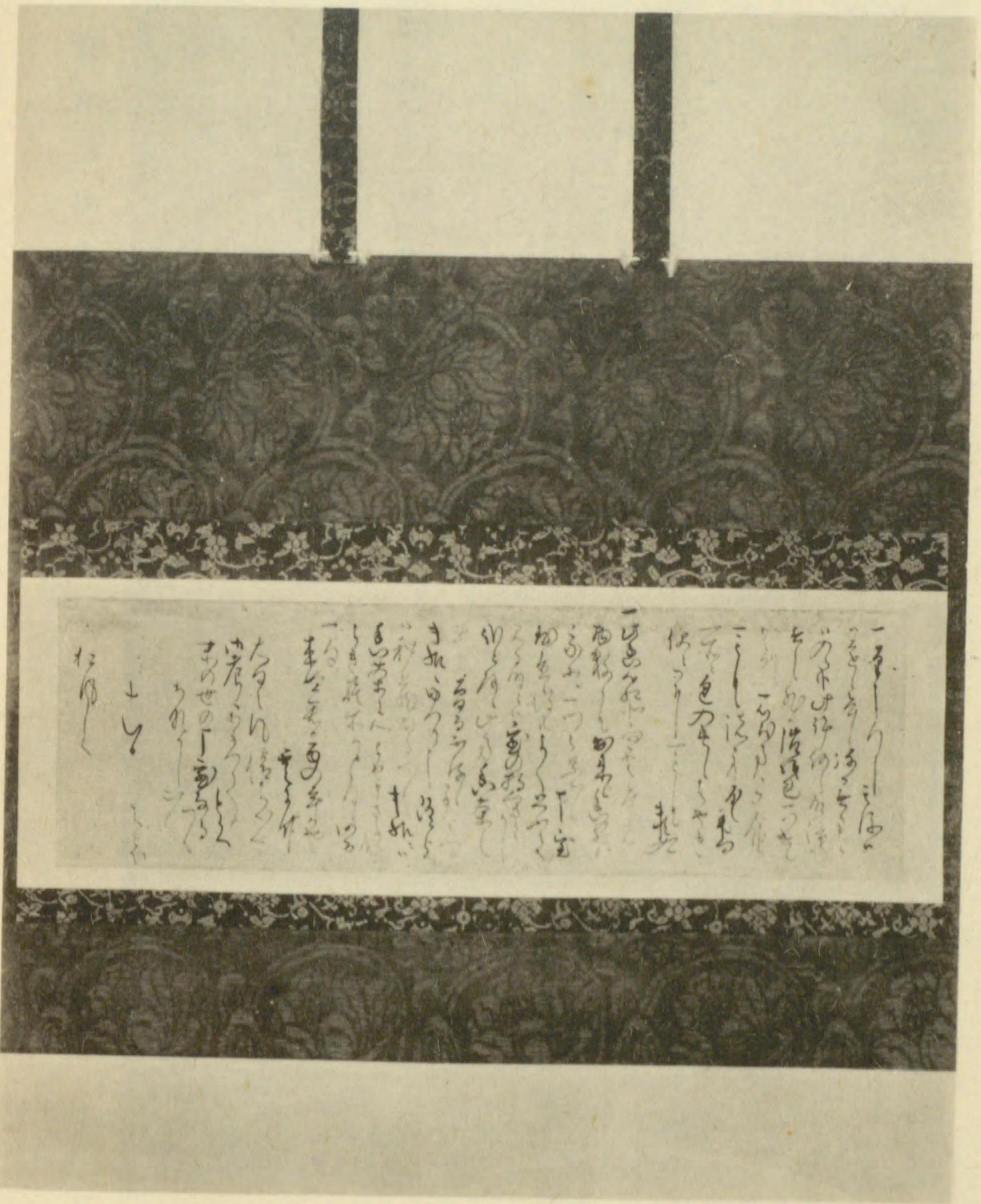


返々申まゐらせ候愚老も
あたゝかに成候は上り
万々可申承候御内證へも
よろしくたのみ入候以上
一昨日は爲御慶
御出被下候處折角
せた迄用事有之
罷越候而不得御意
今に殘念に存候
我にもうか春へ
うつり申候歳且之句
御尋被下候さして
よろしくも無之候へ共
大津繪の筆の
はしめは何佛
右之句にて今年分は
すまし申候貴丈ノ句
御認置候を見申候處
さてよろしく御座候
又々近日に御出待入候
先は此中之御報ながら
如此に御座候以上

正十一日
意水丈

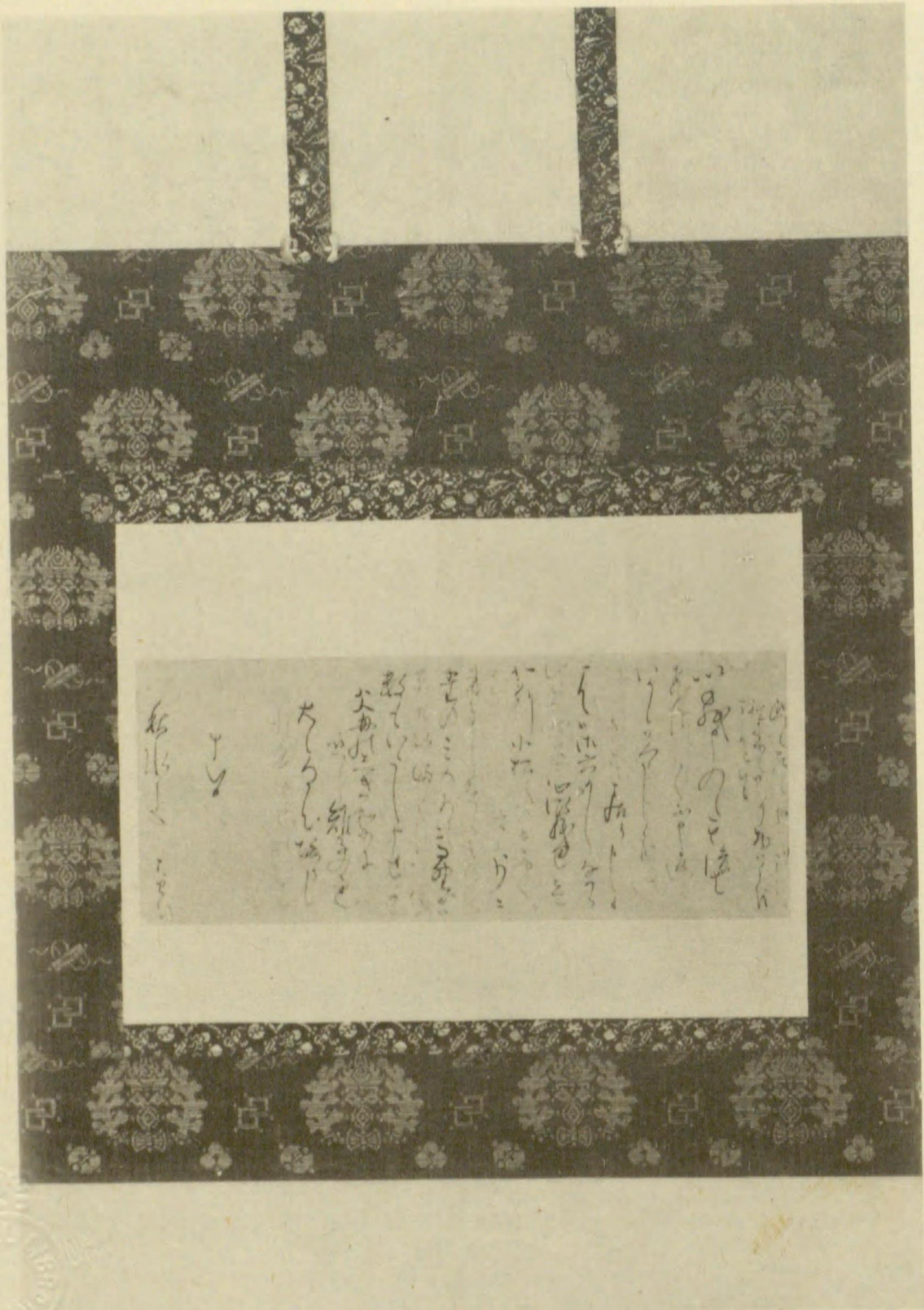
はせを

松風宛句入之文



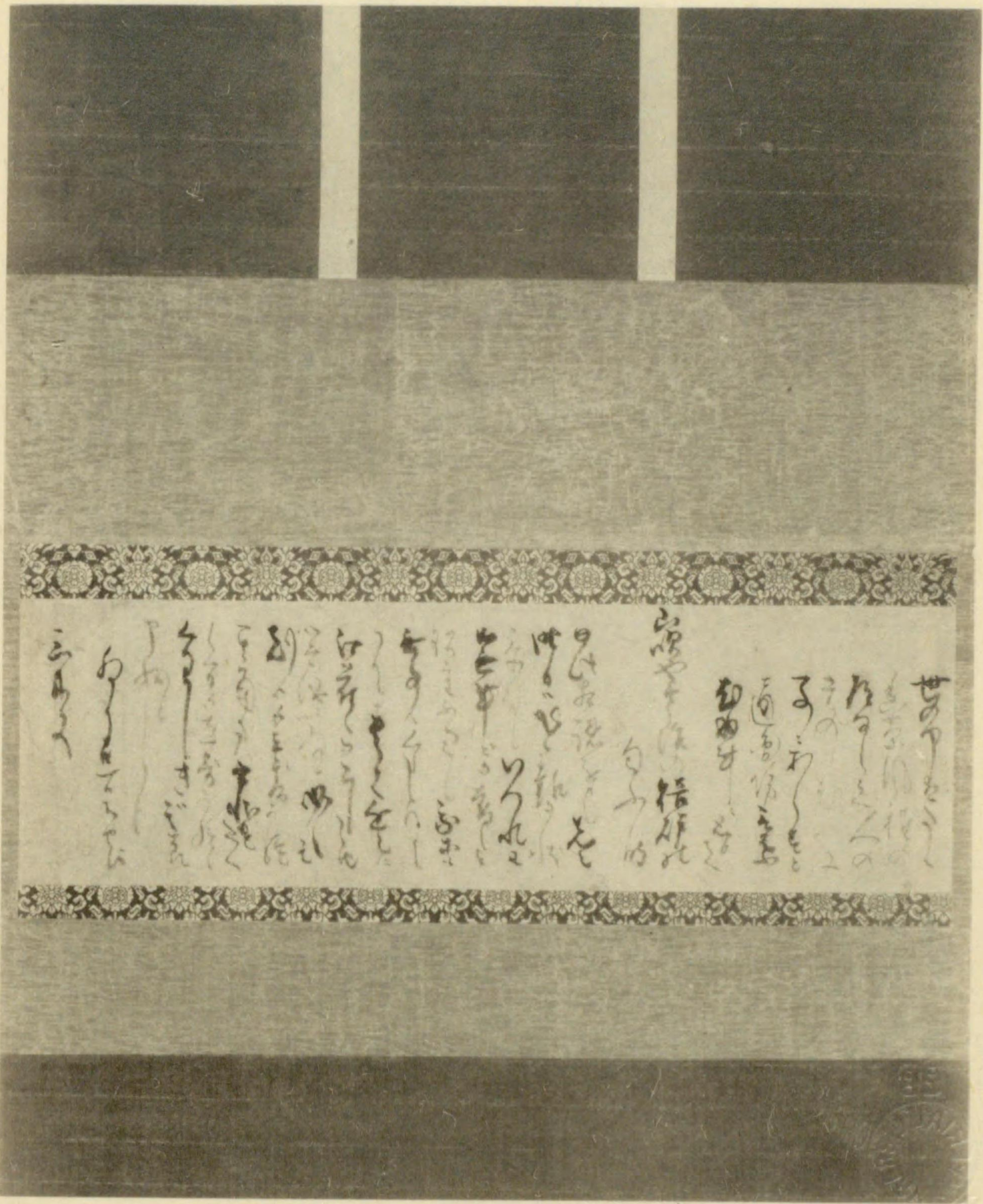
一筆申まらせ候其後は
御遠々敷候彌御無事に
御入候哉此許何之故障も
無之候然ハ謚紙包一つ遣候
加州一笑方へ御届
可被下候諸方よりの用向
一所に包入遣候はやく
便に御下し可被下願入候
此香箱北向雲竹老
物數寄にて出来候香箱に候
我等へ一つ被災候丁寶
致置候得共よく思ふて
見ると存候此方香茶之
哉と存候不存候事に候へは
貴様へゆつり申候随分
御秘藏あるへく候貴様には
香茶に心よせ申さるゝ故
よき捨所かと存候仍而
一句
來ぬ君か酉の年かや
雲に竹
右句之風情よく候とかく
御考へあるへく候とかく
末の世の丁寶なるへく
あなかしこく
十八日
松風丈
はせを

秋水宛雉子の句入之文



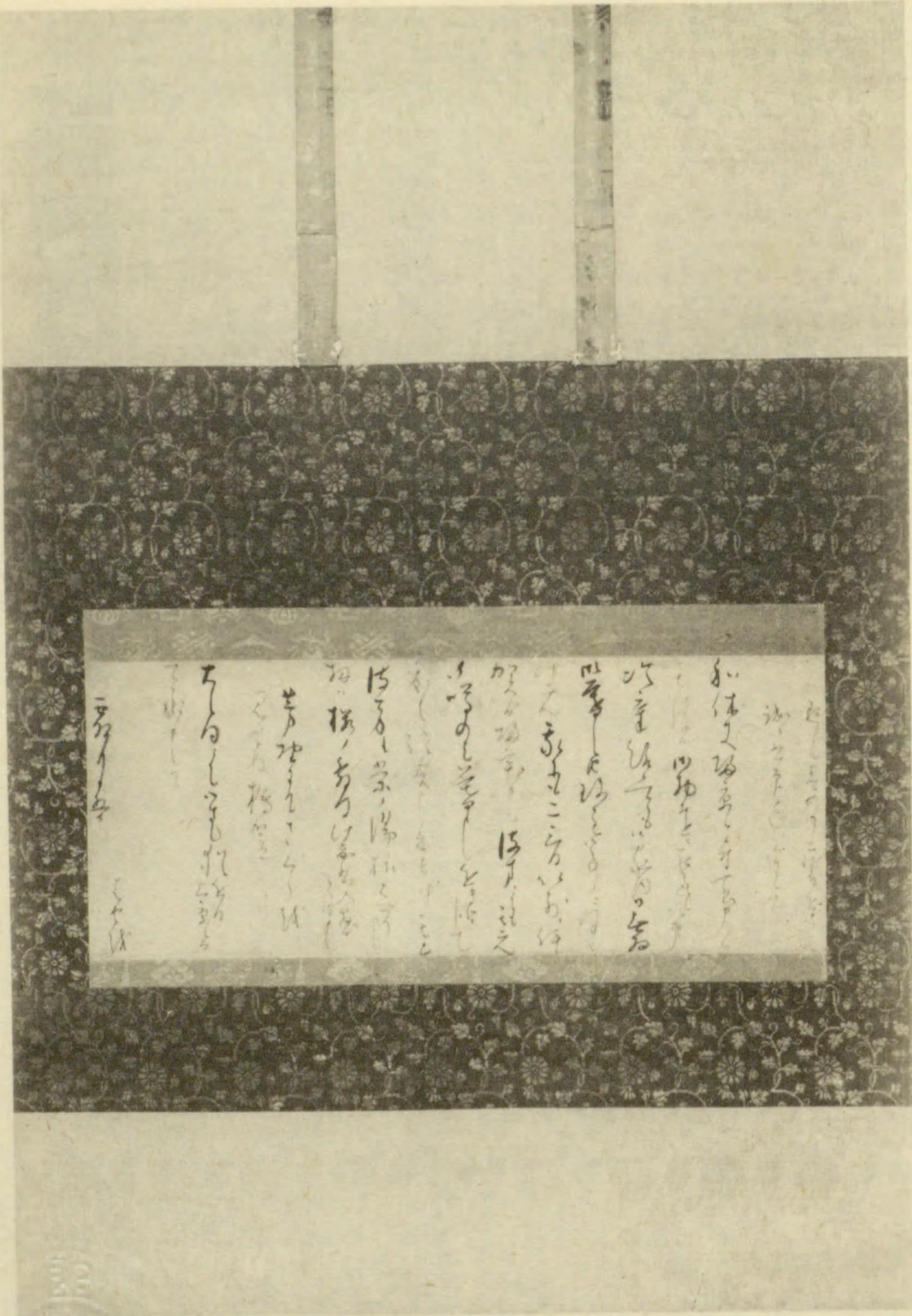
返々左之通
往來候かゝり物御申越
可被下以上
以手紙申入候其後者
飛さしく不申通候
いかゞ御くらし候哉此
許不替居り申候
さては御六かしながら
此書狀並謚紙包一ツ
加州小松へひきやくに
御とゞけ可給候少々
用事申遣候はやく
たのみ入存候高野よりは
去ル頃歸申候 何句は
敷もいたし申さす候
父母のしきりに
戀し雉子の聲
右之句にて歸り申候
猶委く追々可申述候
十八日
秋水丈
はせを

三木宛句入之文

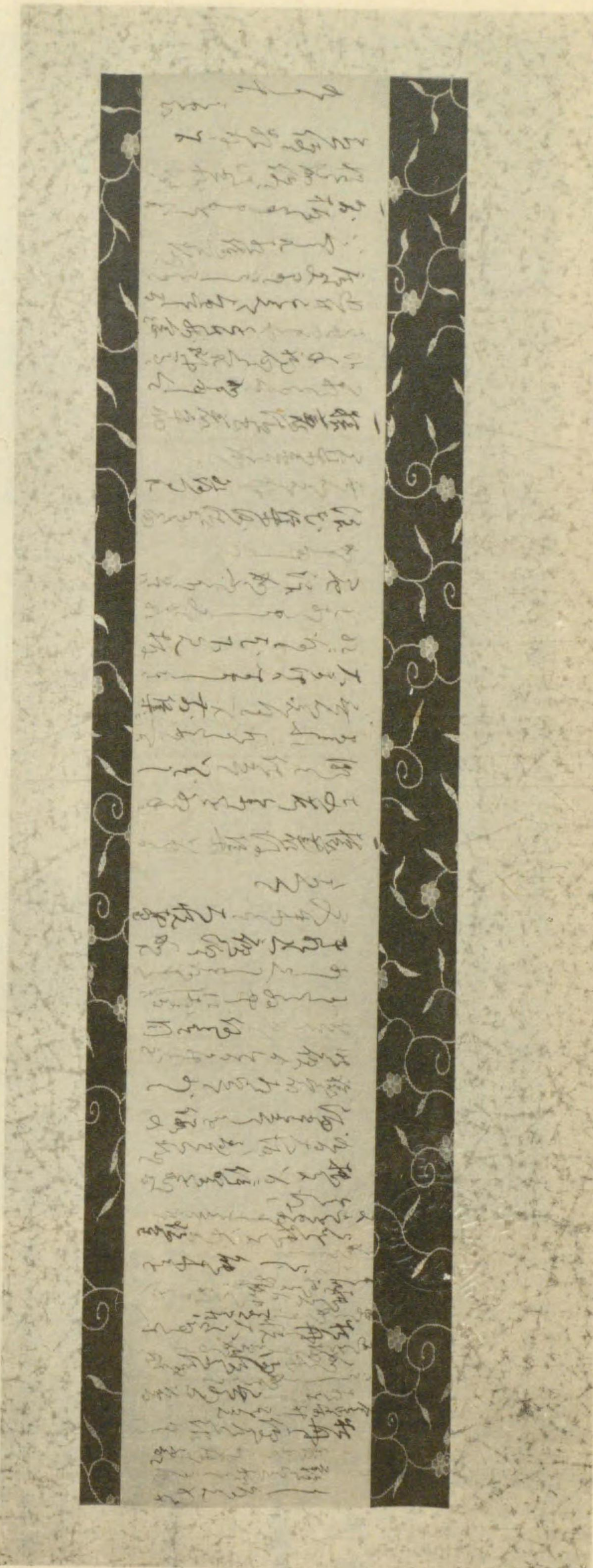


世の中はたゞ
香茶風雅の
道ならて人の
たのしむへき
事にあらすと
通圓坊言葉
尤成事に思ひて
山吹や宇治の焙爐の
句ふ時
如此相認進申候先々
昨日は乍御報御狀
忝存候いづれも
御無事に御暮しと
珍重不過之我等も
無事にくらし居候
さて貴丈近々に
江府へ御ししの由
御方儀存候必々其
刻は御立寄可給
其角方へ書狀遣たく
候間御立寄可給候
くわしきは其節
申殘候かしく
卯月廿一日
三木丈
はせを
(元祿四年頃)

宛名不明之文



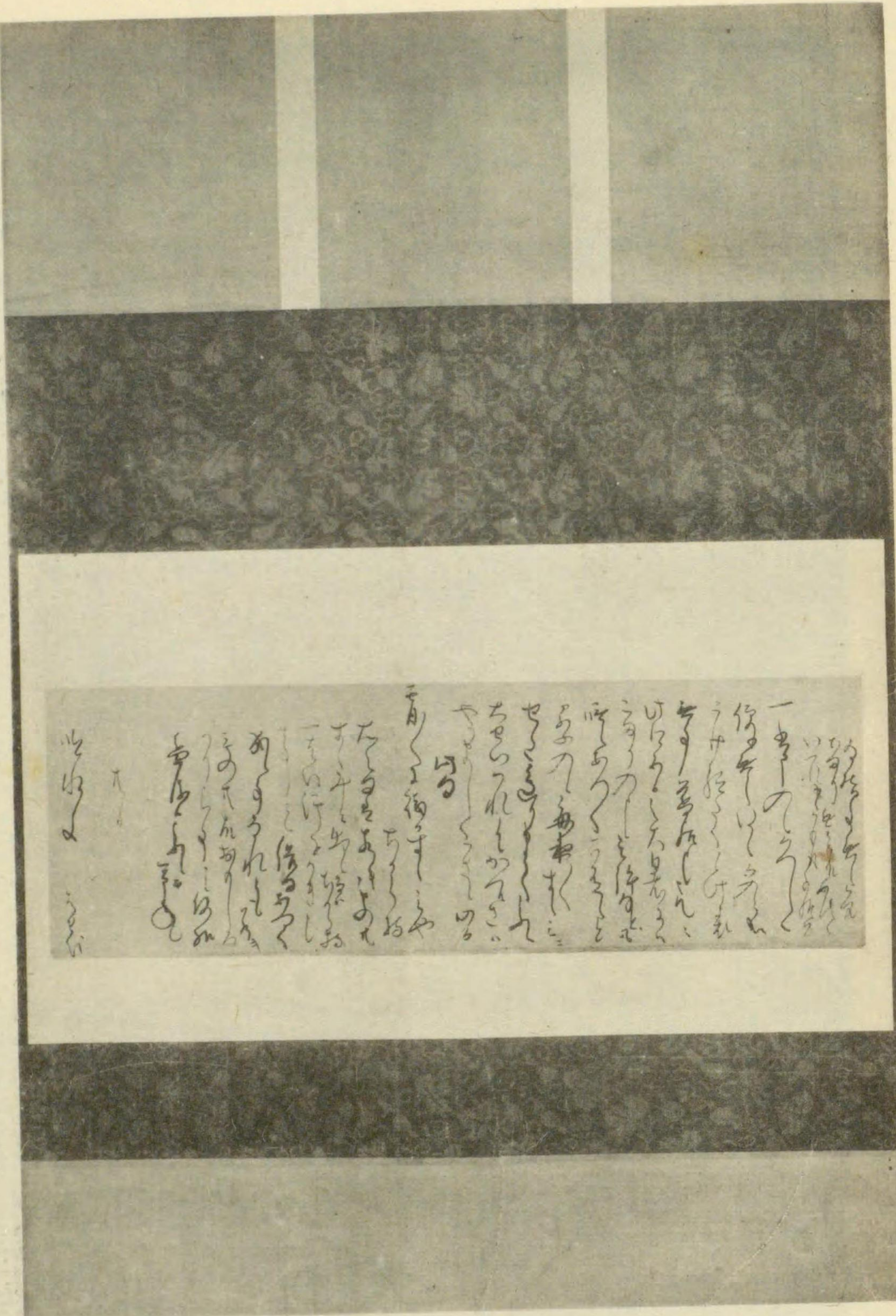
返り青のり二袋進上申候
誠に御印迄に御さ候以上
和休丈歸京候に付一書申入候
其後は御物遣に罷過候次第
冷氣趣候へとも御家内御無爲
御暮し之由珍重御事に存し候
此元我等も二三日以前に伊
賀より歸宅申候彼方にも其元
御噂のみ暮申候近き所にして
度々語合申度者計其上
彼方も茶の湯杯はやり申候
扱は櫻ノ發句此度書入懸御目申候
芳野にてさくらを
見せぬ繪笠
右之句にて御さ候猶近日上京候而
可承申候
霜月五日
はせを



向々爰元様子
難定射に候與風
發足之便手御報真に不知候
牡丹之便手御報真に不知候
金貳歩計御才覺無爲御暮
御わたし可被成下候爲御暮
返通致し候事急成事もならず
延々成事も可有御座候
其段拙者勝手に被申能木を
被成可被下候
又返通せぬ事も可有御座候
合存候
拙者八日に伊賀を出候而
九日大坂へ到着致候
酒堂亭を假の
旅宿相定候少々
昨夜より今日かけて近
付可被成何とぞ目
にたぬやうにおとなしき
あしと存候事に候
貴様も一夜泊りに成共
御入來候は六惚本望
たる候
猿蓑後集いせより
支考參候を相手に
漸々仕立候いそかし
まきれに取かため候へは
無心元存候へ共御集に
大まけはすまじき
様に存候尤下見板
之あらまし又々貴様
へ御世話成不被下候はては
成申ましく候
浪花集沙汰なき由
無心元存候候候も
御集置被成候
猿蓑清書若平助
一様被下候は成申ましく候

哉手初心に候へ共夙高に候
させ可申候や近頃殘念に候
退付其元へ上せ可申候間
序文早々御とし可被下候
いかやろ共相識可致候
一則板之事申遣し候間
體成便に此書狀江戸へ
急便に類度候以上
はせを
九月十日
宛名へ来たるとし

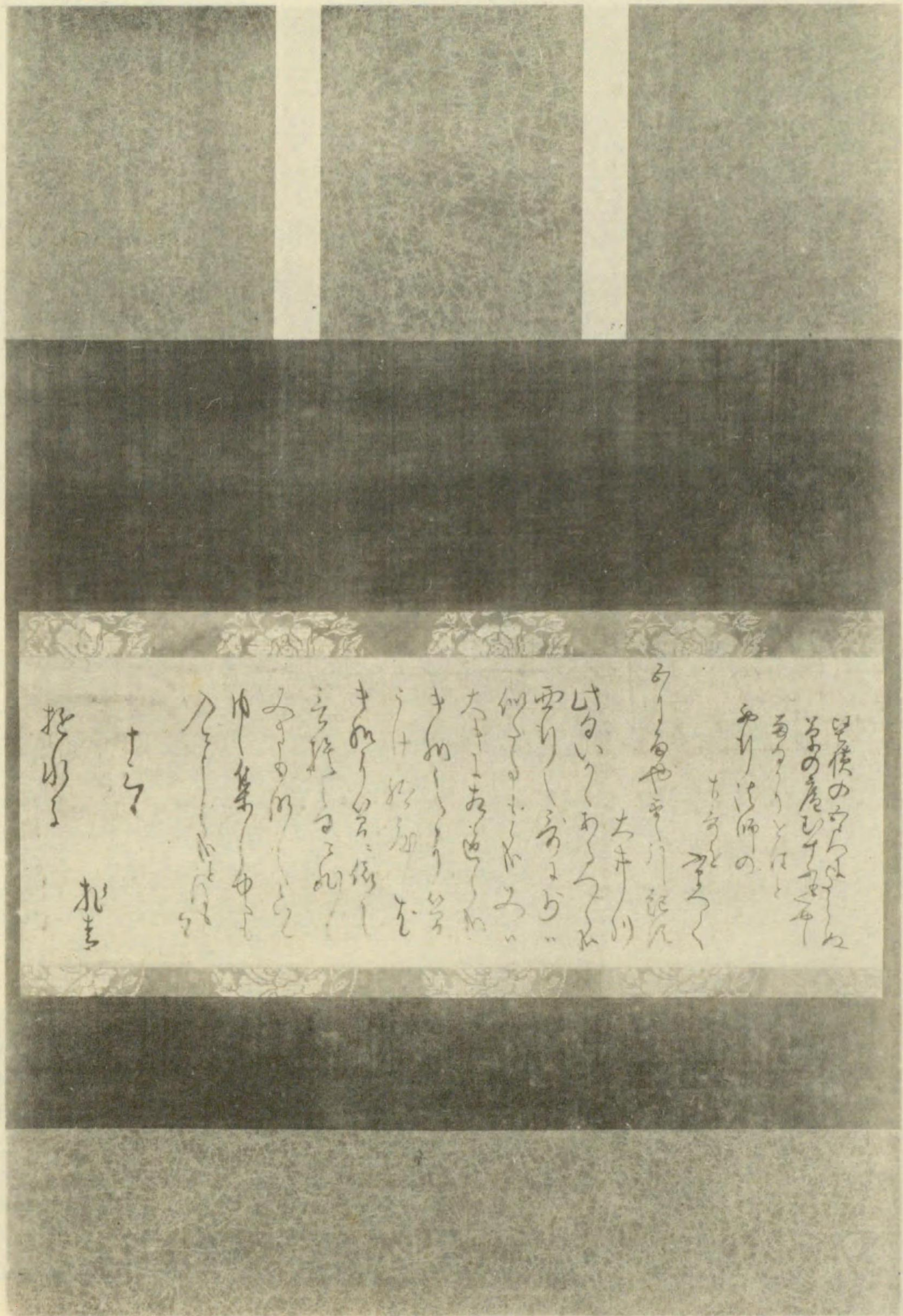
吟水宛句入之文



爲指事無之候へ共
あまり無音故如此候
いつれもかもて可給候
一書申入候久しく御入候哉
便も無之候御入候哉
うけ給たく候此表
無事暮居申候さて々々
此四五日之大署には
こまり入申候其許なども
無々あつく可有候
察入候毎夜へすまみに
せた邊りまで參候
大せいづれにてかへるさは
やかましく御さ候 仍而
此句
宵へに賤かすみや
ちから持
右之句は若きもの共
すまみに出候而はちから持
一はい汗をかき申候
事に候結句あつく
成候事なれとも若き
もの共故おもしろ
かり申候事に候何様
盆後は參候而可申承候
吟水丈 はせを
廿日

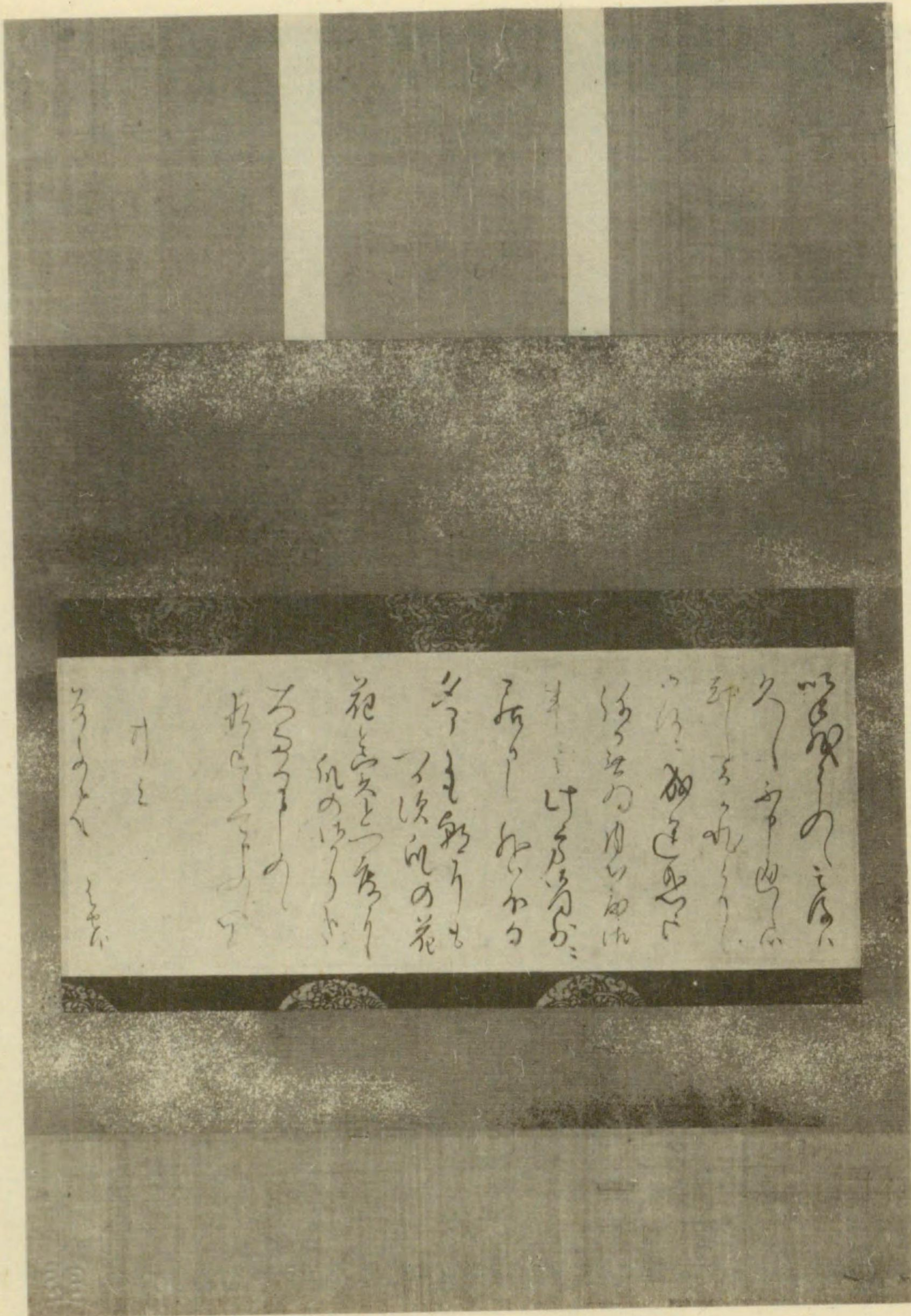


遊水宛句入之文



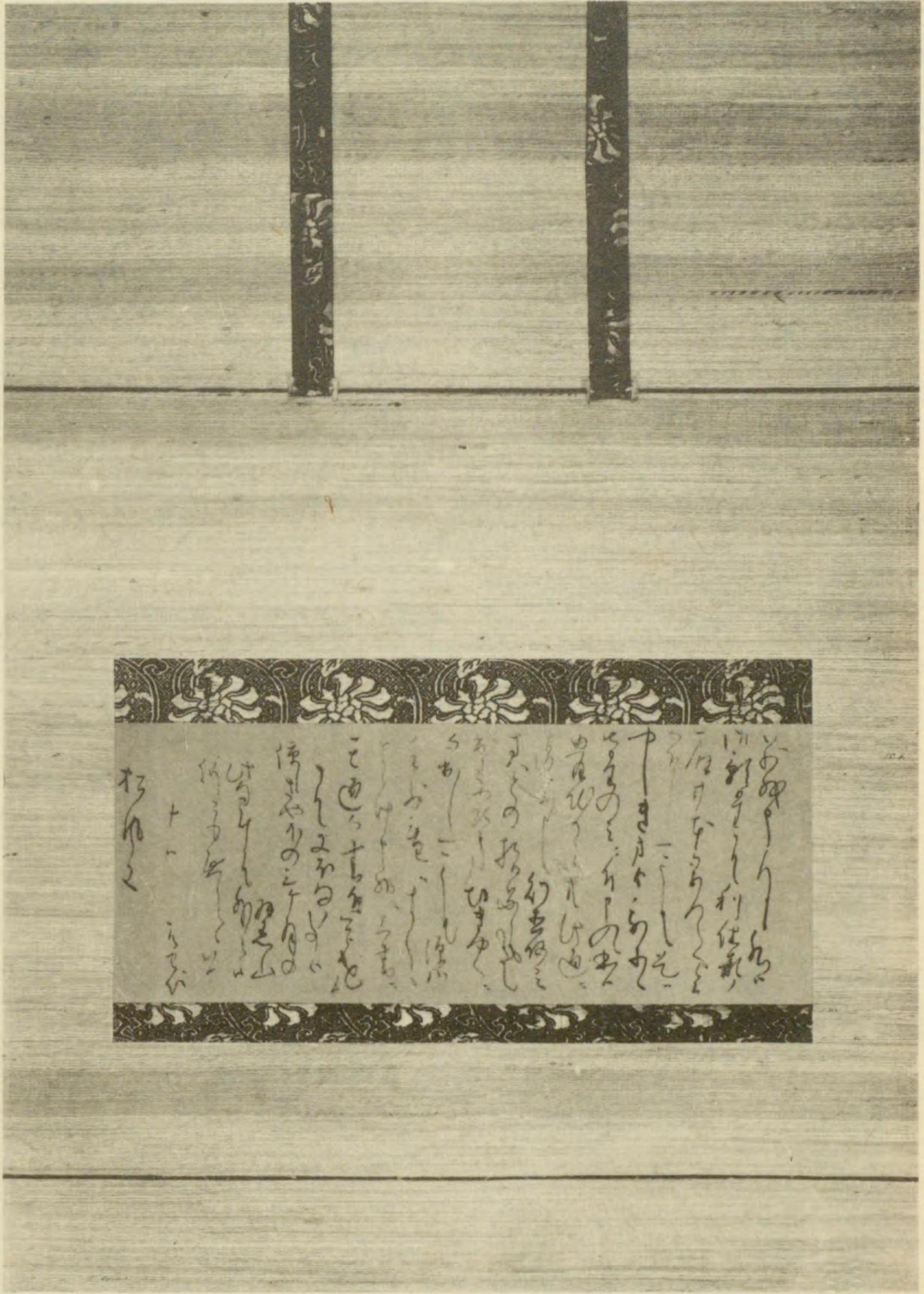
豎横の五尺にたらぬ
草の庵むすふもくやし
雨なかりせはと
西行法師の
古歌をふまへて
五月雨や雲引起す
大井川
此句いかゝあるへく哉
西行之歌に少は
似たる事も候哉又は
大きに相違候哉
き様之了簡
うけ給度候尤
き様了簡に依て
言捨之句可然候
又さもなく候は
内々集の中へも
入可申哉と存候
以上
十三日
遊水子
桃
青

荷兮宛句入之文



以手紙申入候其後は
久々不申通候處
却而御狀被下候
以後に成迷惑に候
彌御無爲目出度御
事に候此方御同前に
居りし外はほ句
夕部にも朝にも
つかす瓜の花
花と實と一度に
瓜のさかり哉
右兩句申入候
猶追々可申入候
以上
廿三
荷兮丈
はせを
(元祿三年頃)

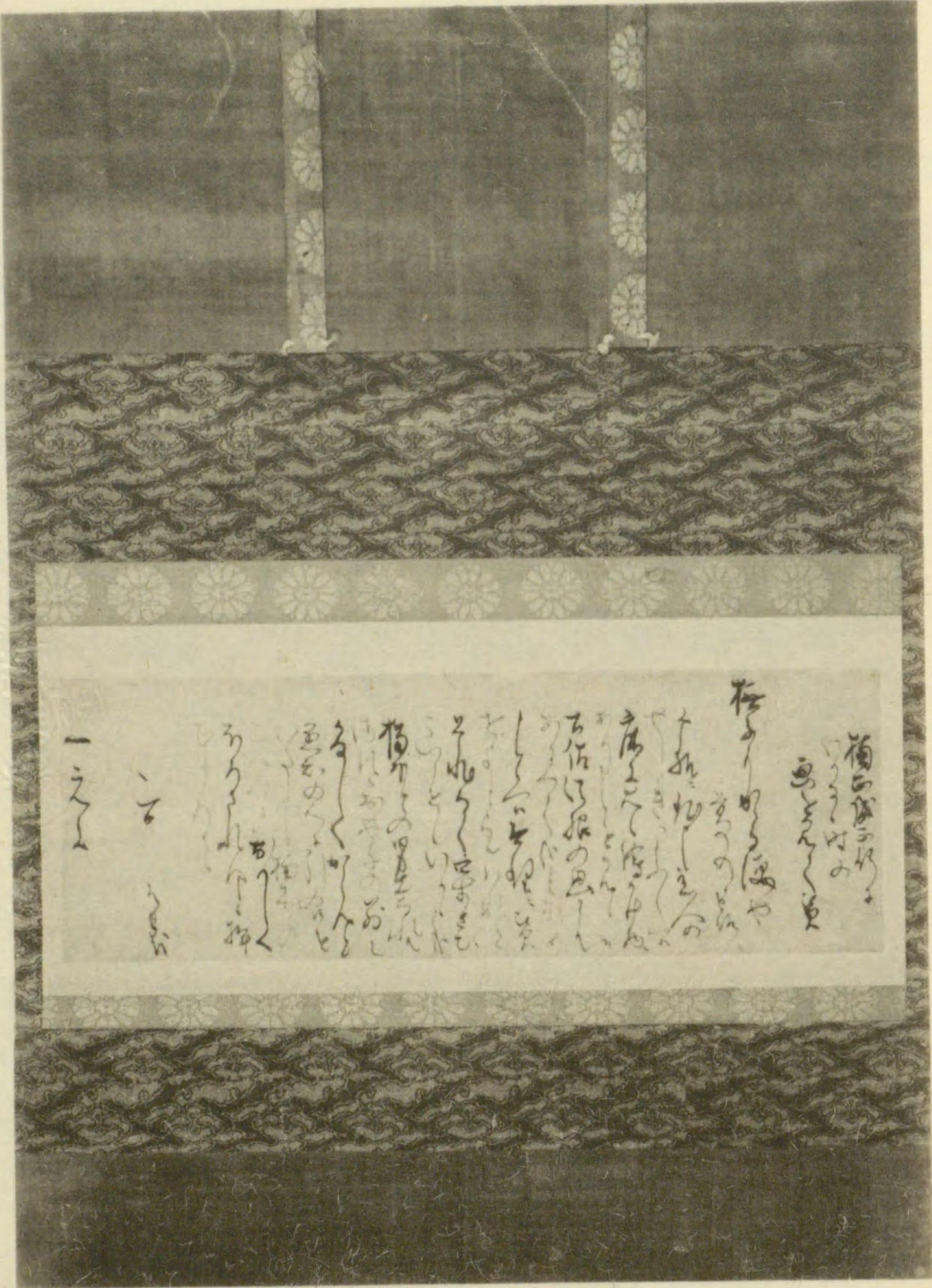
松風宛句入之文



別紙申まゐらせ候然は
御預置候利休形の
扇廿本御あつらへ候而
御下し可申候是は
やしき方より我等へ
御たのみ付申入候本日
骨地かみ共此通に
違不申候則直阿み
方への指圖も御さ候
出来次第ひきやくに
御出し可被下候深川
手前庵へすくに
と、け申様に上書に
其通御書付可被遣候
さて又ほ句ノ事は
涼しさやほの三ヶ月の
羽黒山
此句計りにて外には
何にも無之候以上
十日
松風丈

はせを

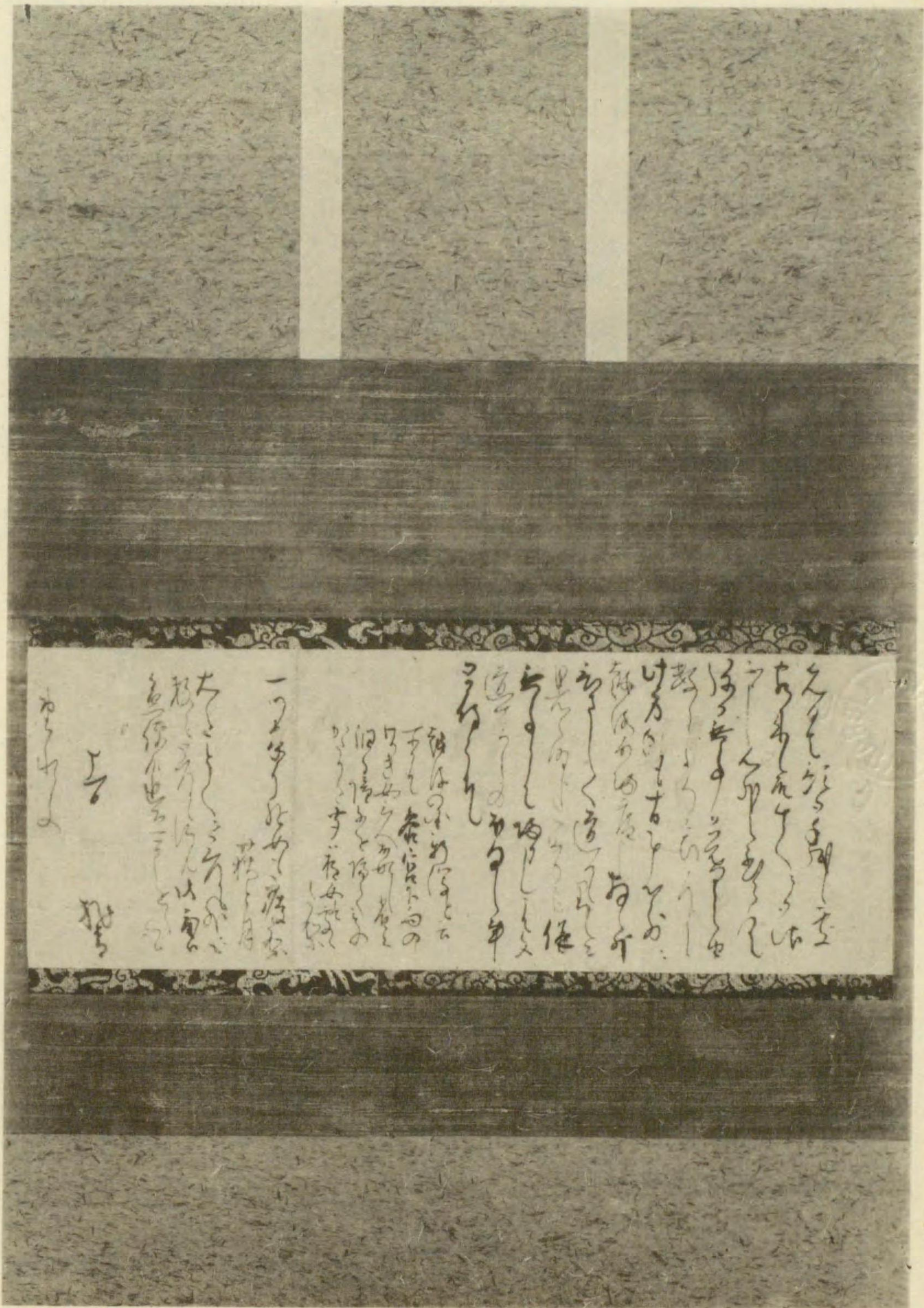
一元宛句入之文



楠正成正行に
わかるゝ時の
書を見て賛
撫子にかゝる涙や
葛の露
筒様ニ致申候有人の
やしきへ參候へは
床に右之繪かけ物ニ
ありしを見候而
土佐法眼の畫にて
あるへく哉とほめ
申候へは無理ニ賛
せよと乞はれて
是非なく口すさひ
まいらせ候いかゝ候哉
楠ほとのおや子の別レ
さすかおや子の別レ
かなしくからんと
愚知の心に引合せ
いたし楠木の
こゝろニはおかしく
おほされんと押
斗存候
二日
一元丈

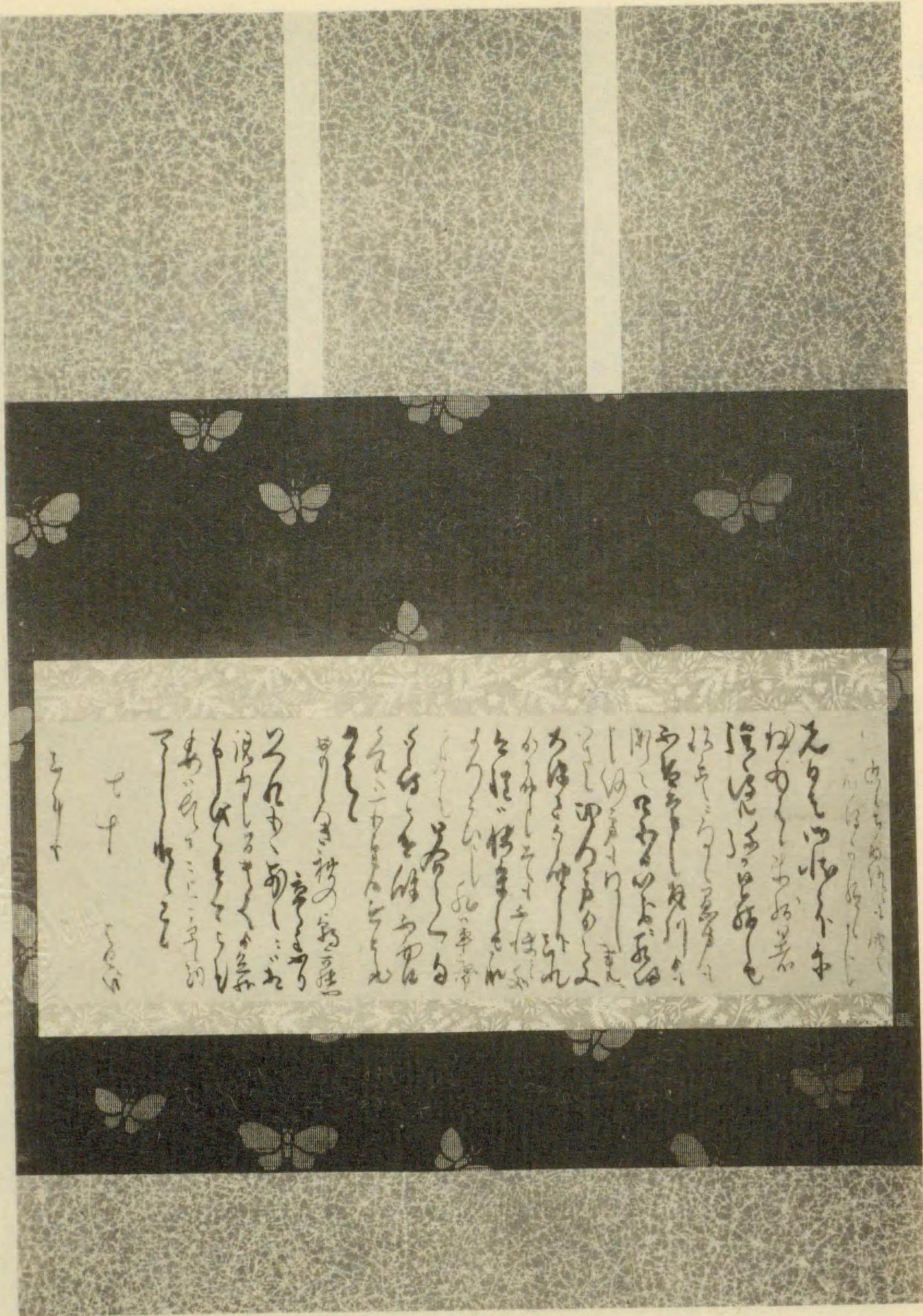
はせを

野水宛句入之文



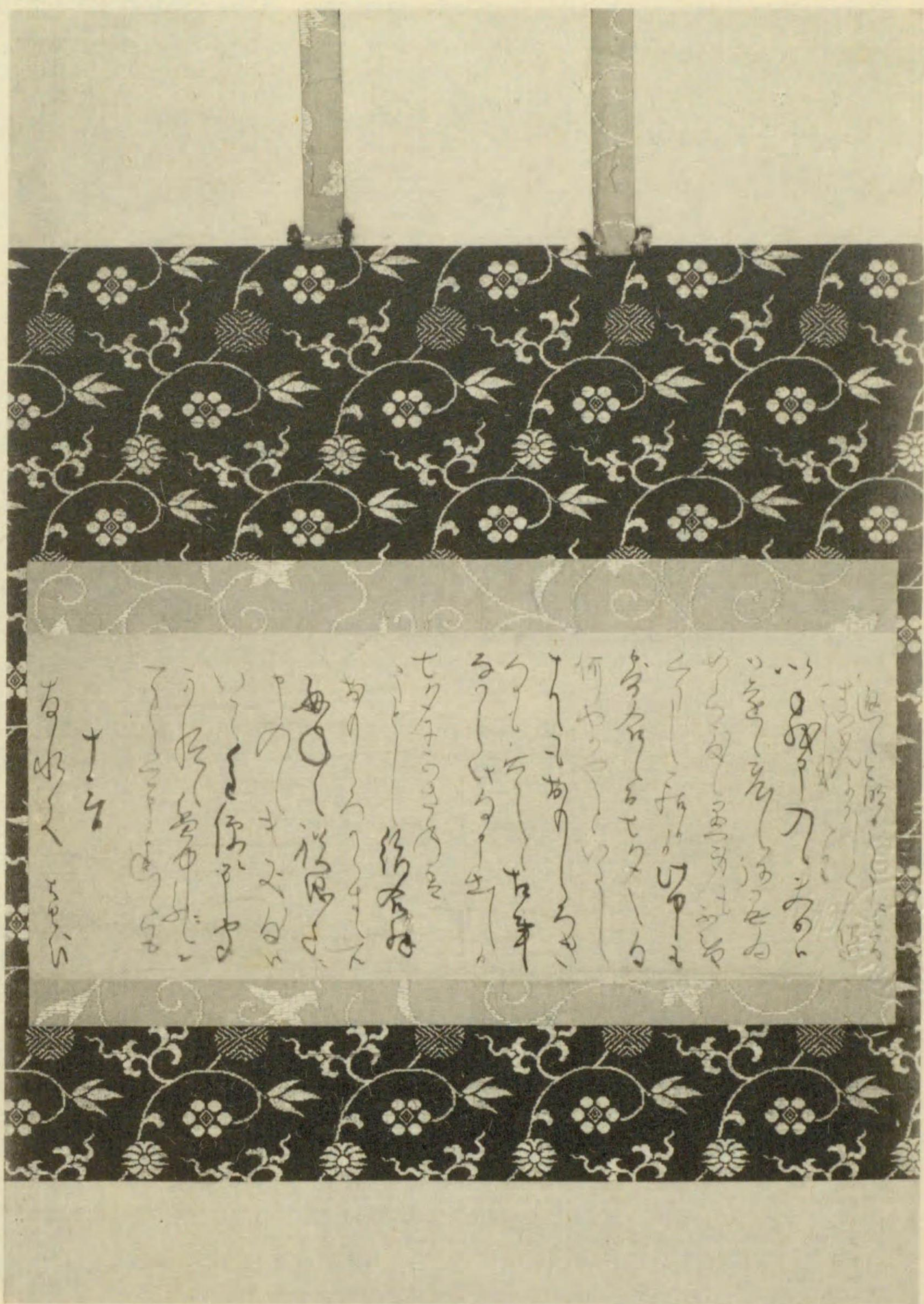
先日は預御手紙候處
客來候故艸々に御報
不申心外之至に存候
彌御無事御暮之由
敷々よろこひまゐらせ候
此方儀も十日計以前に
越路より歸庵申候存之外
ひさしく道にかゝり候て
暑之時分こまり申候併
無事にて歸り申候又
道すからのほ句之事
御尋被下候
越後の國新潟と云
所にて參宮下向の
わかき女三人おなし宿に
泊り障子を隔てもの
かたりを聞は遊女と聞え
たり
一つ家に遊女も寝たり
萩と月
右之ことくに御座候外にも
敷々御座候得共此度は
急便故追而可申進候以上
十一月
桃 青
野水丈
(元祿二年頃)

半斗宛句入之文



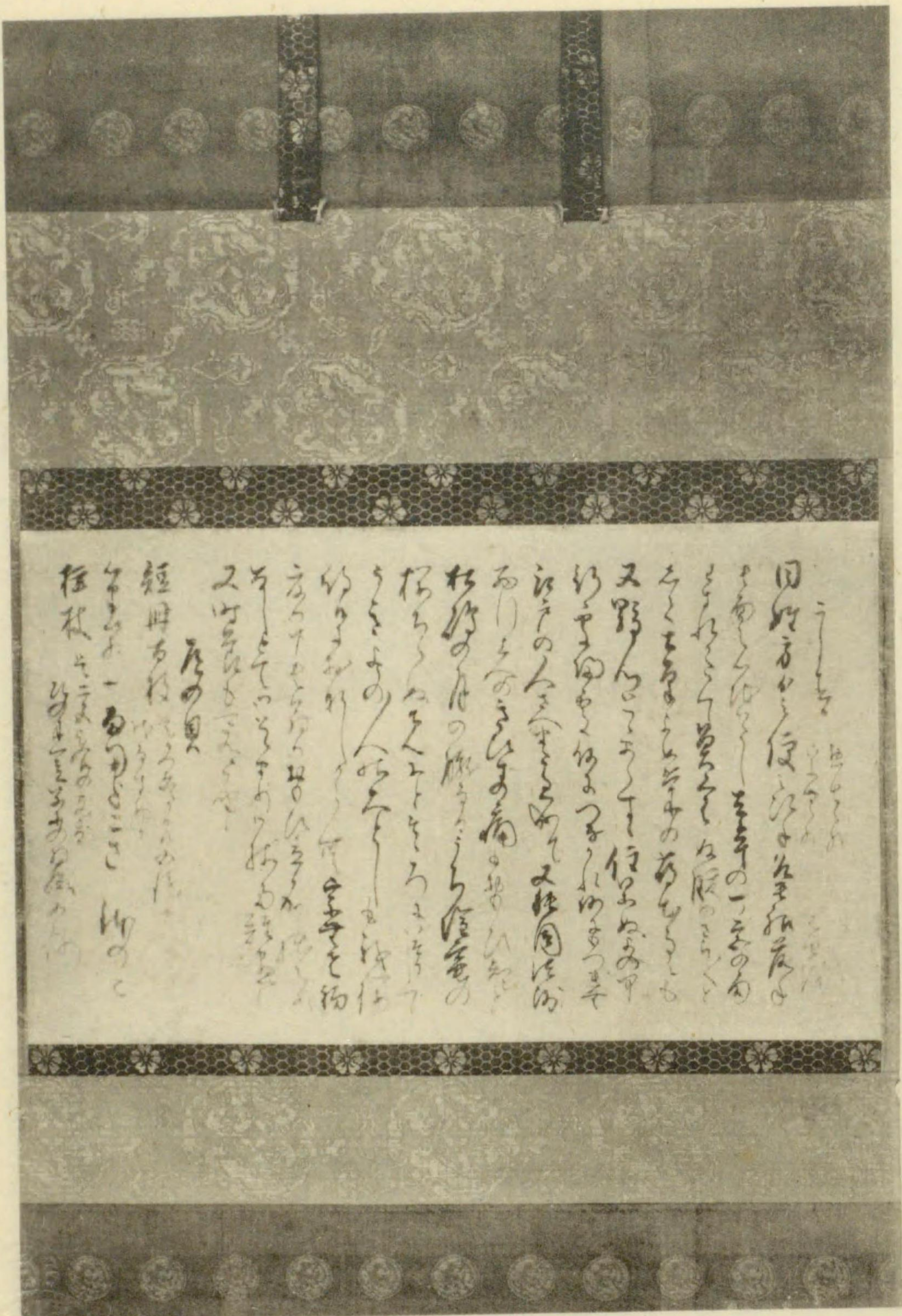
返々御物語にても能く
御心得可給候已上
先日者御狀被下忝
致拜見候未殘暑
強く候得共彌御堅勝之由
珍重に存候愚身も
不替暮申候尾川よりも
漸々四五日以前に罷歸
申候何方も同し事共に
御さ候越人方より之文
大津迄御届申候 志水
より届申候是も不快に候處
今程は快氣之由承
よろこひ申候然は車席
方にて御合之一句
御尋被遺餘不面白
候へ共御所望故無是非
如是候
おもしろき秋の朝寝や
亭主ふり
いづれもへ別々には相
認不申候間貴丈より宜様
御申越被下度候
悉は頓而上京之刻
可申承候已上
七十七
半斗丈
はせを

友水宛句入之文



返しも明日之事に候間
すいふんよろしく御仕廻
可被成候
以手紙申入候夫よりは
御遠々敷候彌御無爲
めて度候愚身も不替
くらし居り候此中も
寄合候而 七夕之句
何やかやといたし
すかたもおもしろき
句も無之候 古事
なから此句申出し候
七夕にかさねは
うとし絹合羽
おもしろからす候へ共
毎年の祝儀迄に
申入候貴丈ノ句は
いかゝ重便に御申聞
可給候盆中に參候而
万々可申述候以上
十三日
友水丈 はせを

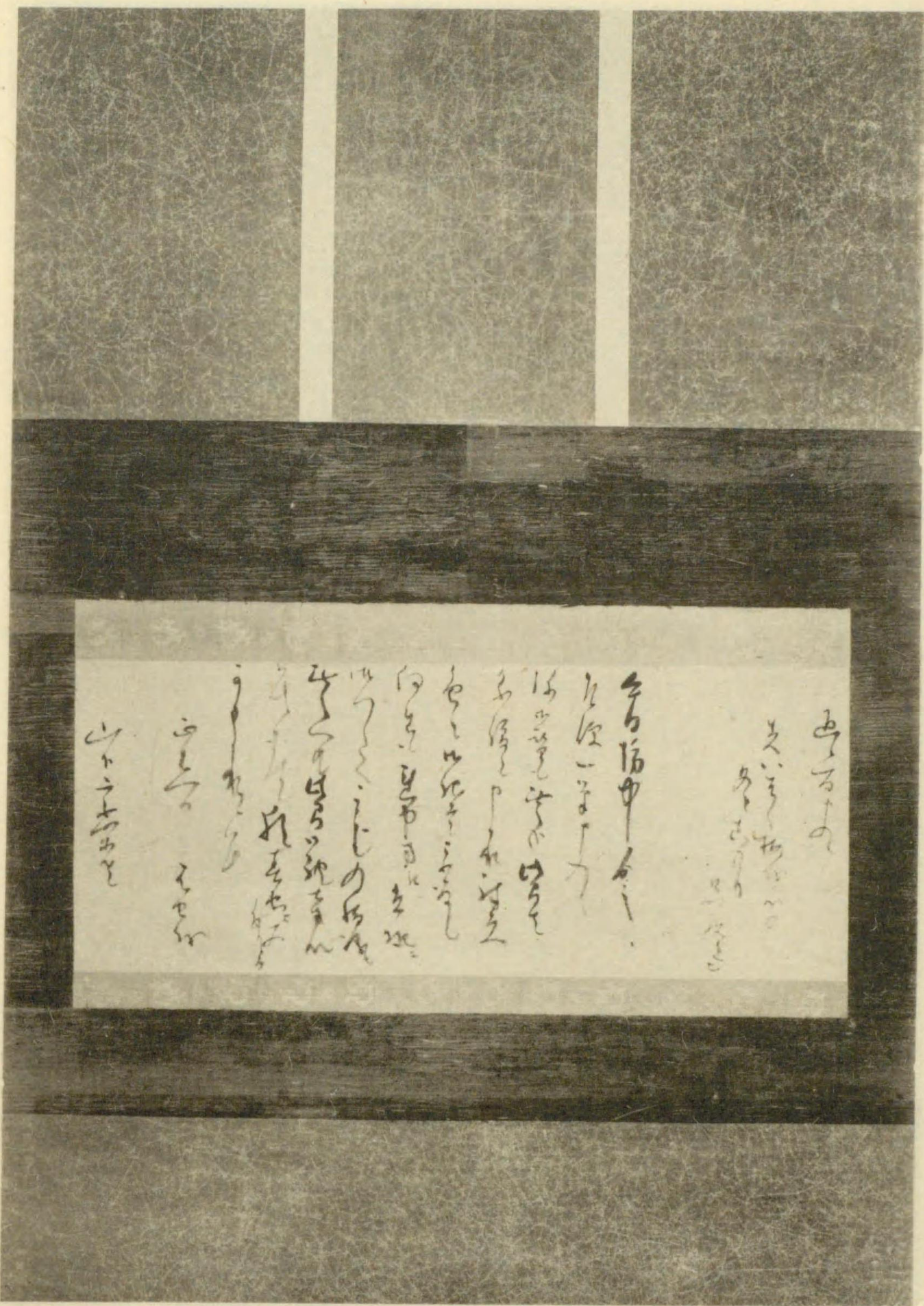
惣七宗無宛之文



二月十六日 惣七様 はせを
同姓方より之便之次手午貴報落手
貴面之心地いたし去年の一ノ宮ノ雨
わすれかたく候魚くはぬ腹のさらりと
して土筆よめ菜の萌出るにも
又野心とまらす候住果ぬよの中
行處歸處何につなかれ何にもつれむ
江戸の人さへまた過成て又能因法師
西行上人のきひすの痛もおもひ知れと
松島の月の朧なるうち鹽竈の
櫻ちらぬ先にとそらにいそかし候
うきよの人の大としも我櫻
待日におなしからむ宗無老初
夏以下貴翁かおもひ立被成候拙者か
なしとて御とまり御殘多難申盡候
又時節も可有御座候
道の具
短冊百枚 是かつまたる日五錢と
代なすものか
筆箱一 雨用意こさ 鉢のこ
柱杖 是二色を食の支度
ひの木管茶の羽織如何例

本文函書漢詩人小野湖山翁筆
裏面 芭蕉翁桃青消息
吟詠居然爲別裁 導人之妙一宗開
誰知春日補第句 高自幽風詩內來
右題翁梅香卷舊作也今觀此消息因錄
戊寅之冬 湖山老人

山下宗閑老宛先いはへの句入之文



返々一句申入候

先いはへ梅を心の

冬こもり

只祝迄に

今日坊中より之

乍便一筆申入候

彌御替も無之哉此間者

參緩々申承殊更

色々御馳走忝存候

何れも連中方え宜様ニ

御つたへ可被下候爲指儀も

無之候へ共此間御禮旁以

如此御座候猶春長ニ又參候而

可申承候以上

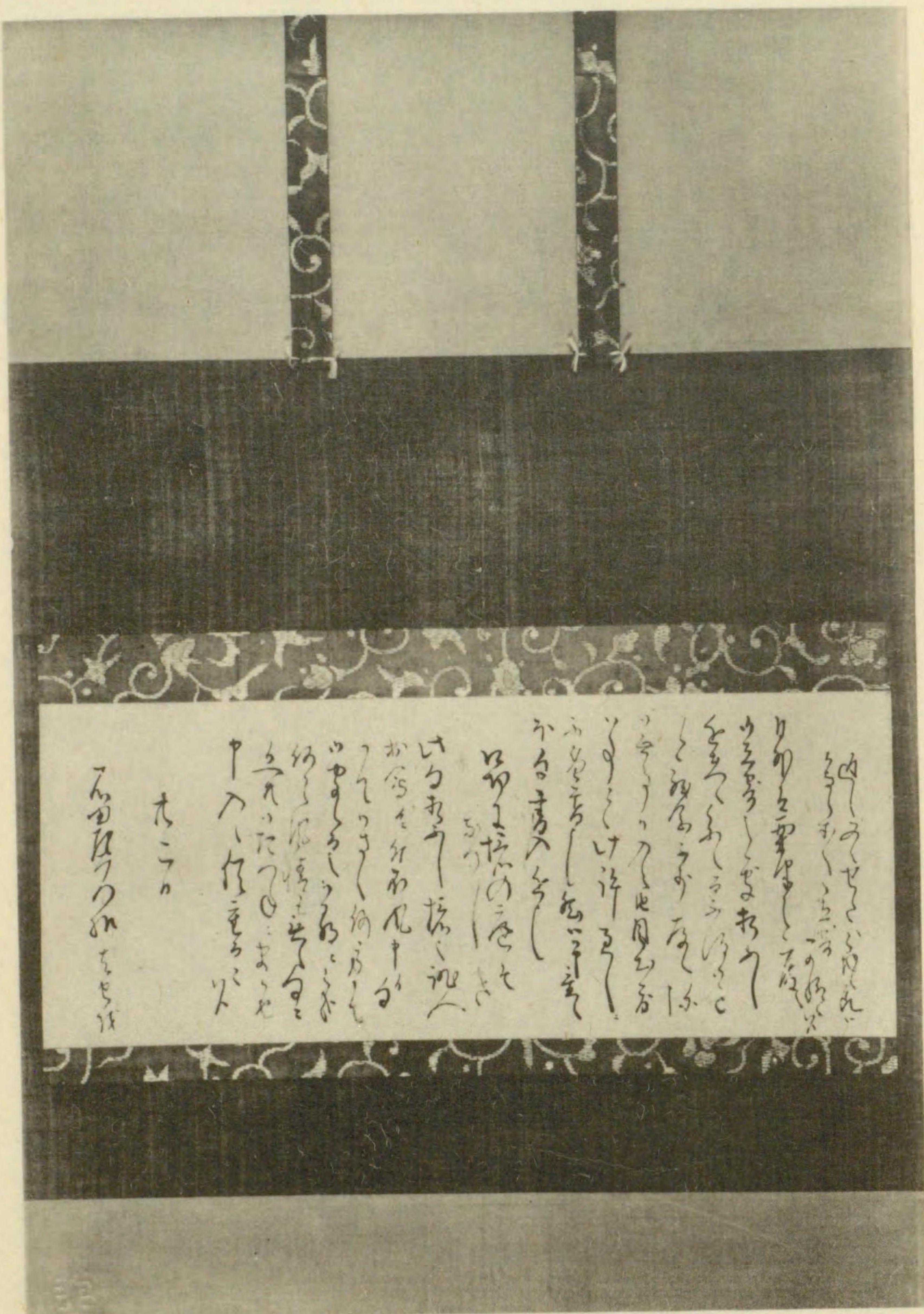
正廿一日

山下宗閑老

はせを

山下宗閑は彦根藩の茶人

石田左衛門宛句入之文



返々又々せたへ参り候節は

かならず御立寄可給候已上

日外は栗津へ度々

御立寄之處折ふし

近在へ參候而不得御意

候て残念不少存候 彌

御無事御入之由目出度

御事に候此許過しく

不替暮申候然は御申置候

ほ句書入進申候

口切に境の庭そ

なつかしき

此句折ふし境之誹入

出會候に付不風申候句

にて御さ候何方にて

御聞候而之御尋に候哉

何之風情も無之句に

候へ共御たつねにまかせ

申入候猶重而々已上

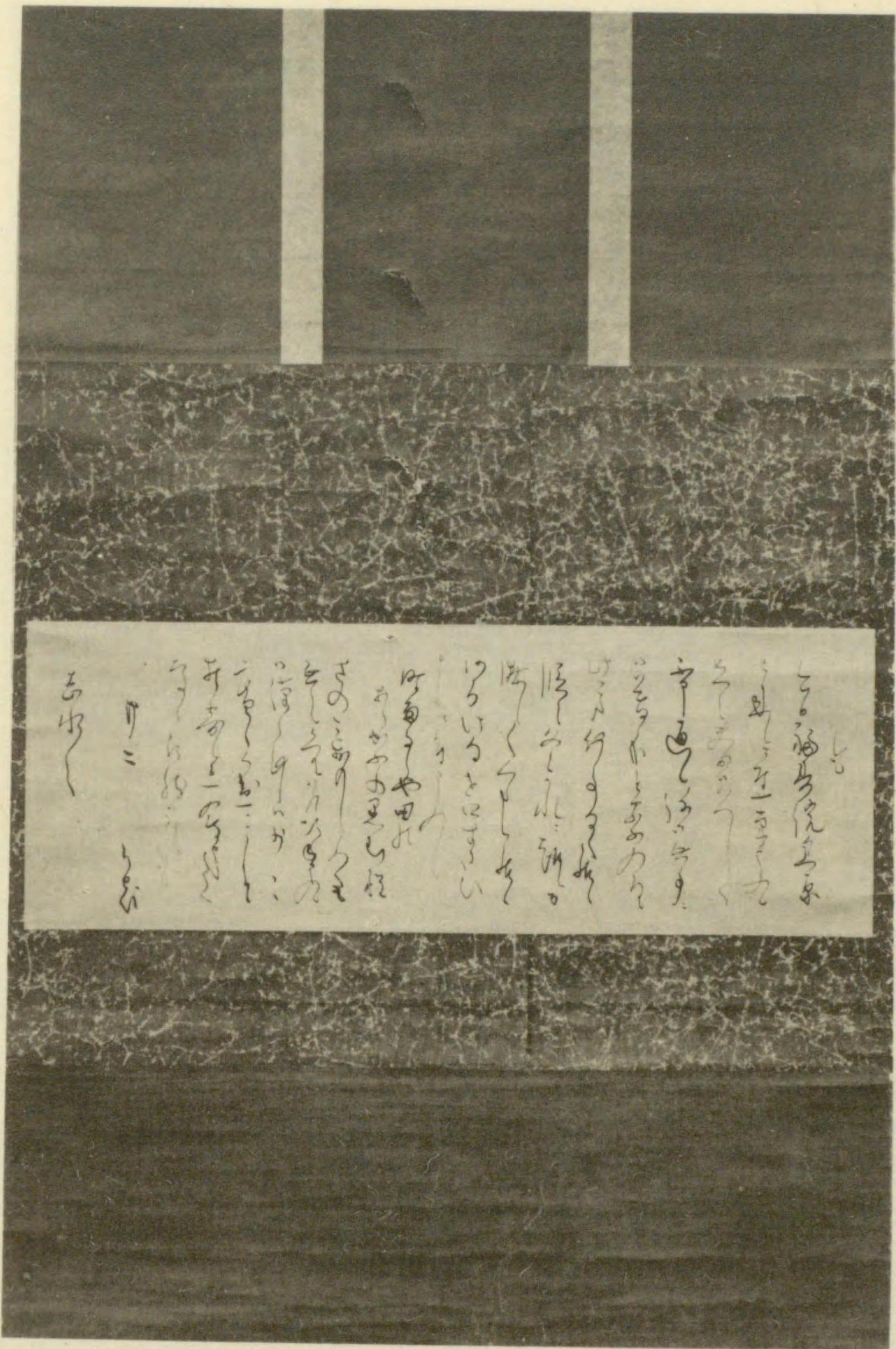
廿二日

石田左衛門様

はせを

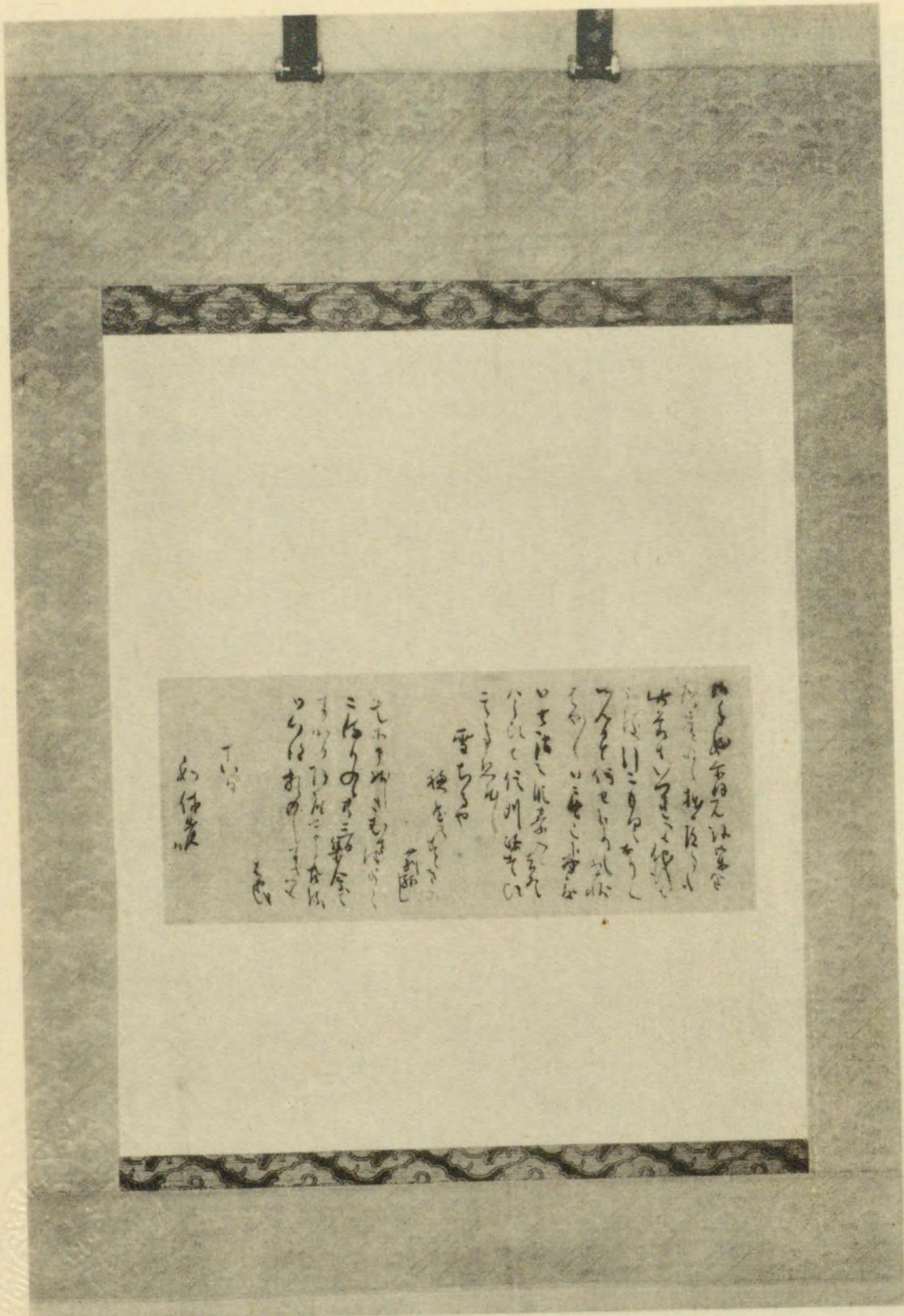
(元祿四年頃)

志水宛句入之文



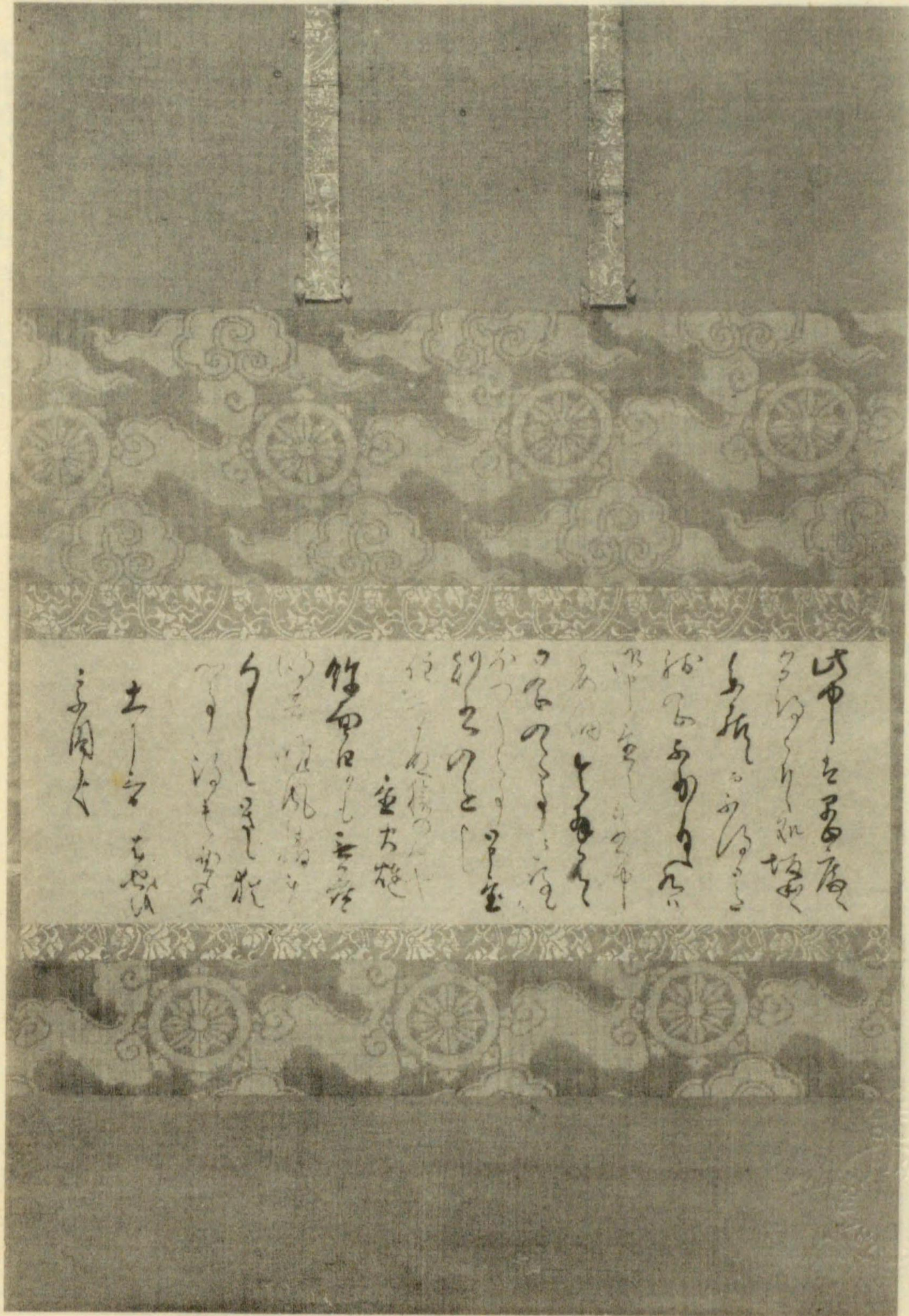
今日福壽院御上京
被成候に付一筆申入候
先々夫よりは久しく
不申通候彌御無事に
御暮候哉と察入存候
此方何事なく居候
段々冬かれに趣候而
淋しくらし居候
仍而此句を口すさひ
申候に付申入候
時雨るゝや田の
あらかふの黒む程
さのみおもしろくも
無之候へとも乍次手申入候
御障無之は少々
庵へ御出可被下候
打寄て一會申度
存候取紛早々已上
廿二日 はせを
志水丈

和休宛雪ちるやの句入之文



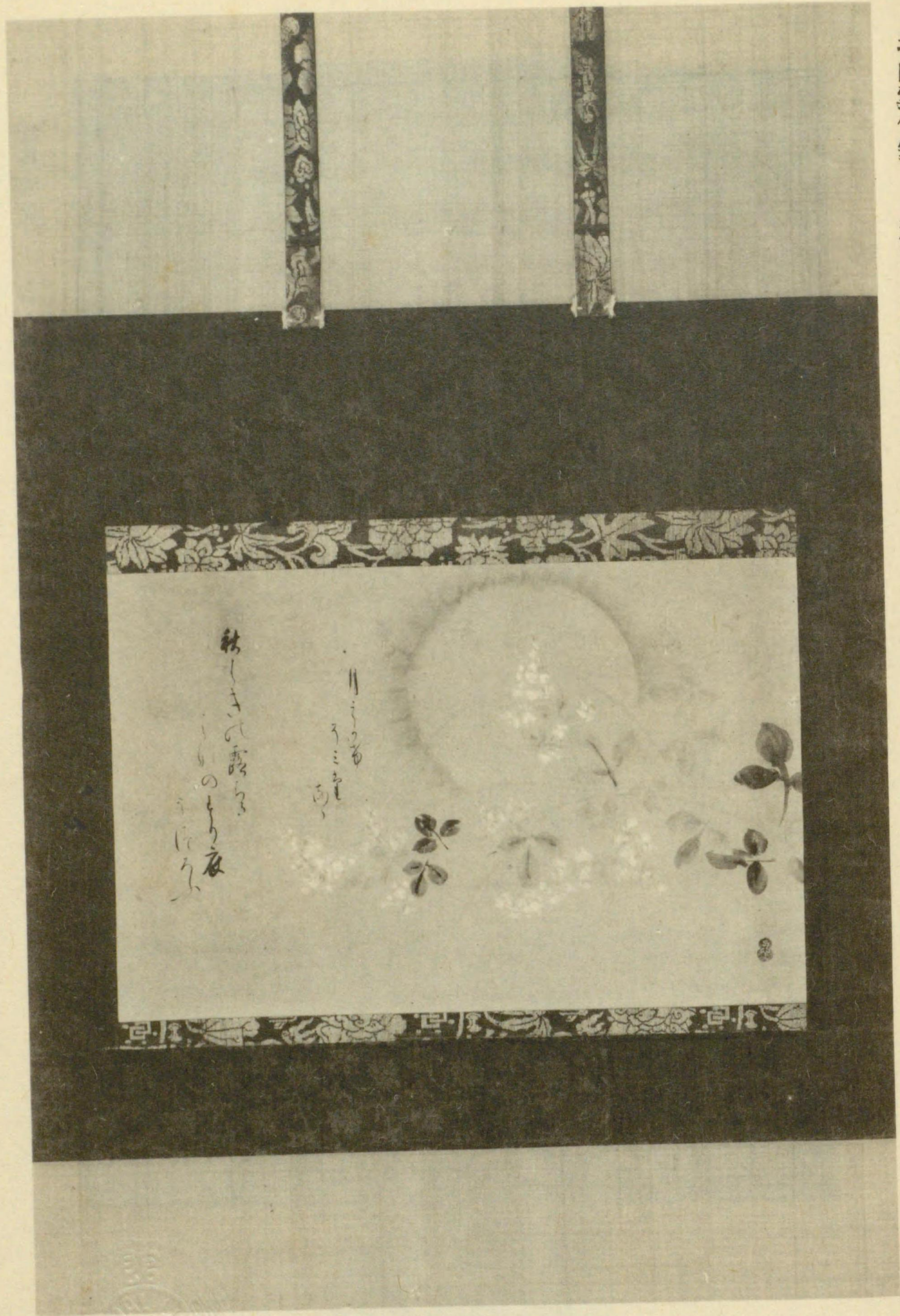
御手紙忝拜見彌御安全
珍重ニ存候拙庵事も
此節はいつれへも他行も
不致引こもりをり候
先日は伊せよりの書状
はや／＼御届被下再度
御世話之段察入候去冬
今頃は信州路出候頃
其事思出候
雪ちるや
穂屋のすゝきの
蒔残し
是等申残しさむさつよく
こまり入候廿三日集會へも
まいり拜顔可申候左様
御心得頼入候早々以上
十八日 はせを
和休老へ

宗因宛句入之文



此中は愚庵へ
御尋被下候處坂本へ
參居候而不得御意
殘念不少存候右は
御申置之御書中
委細合拜見候
御念入之御事に存候
ほつく之事御申置
則書入進申候
住つかぬ旅の心や
置火燧
餘面白くも無御座候
得共唯風情斗
句にて御座候猶
心事期貴面候已上
十一月三日 はせを
宗因丈

蕉
門
其
他



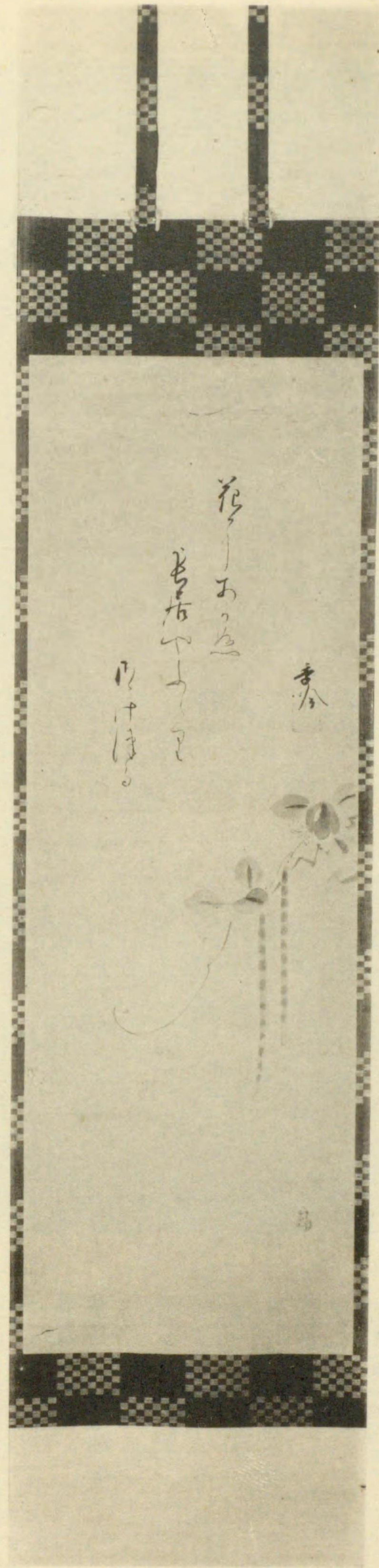
北向雲竹筆

萩に月の自書賛

秋はきの露ちる
はなのすり衣
うつろふ

秋はきの露ちる
はなのすり衣
うつろふ

月のかげ
そみた
るゝ



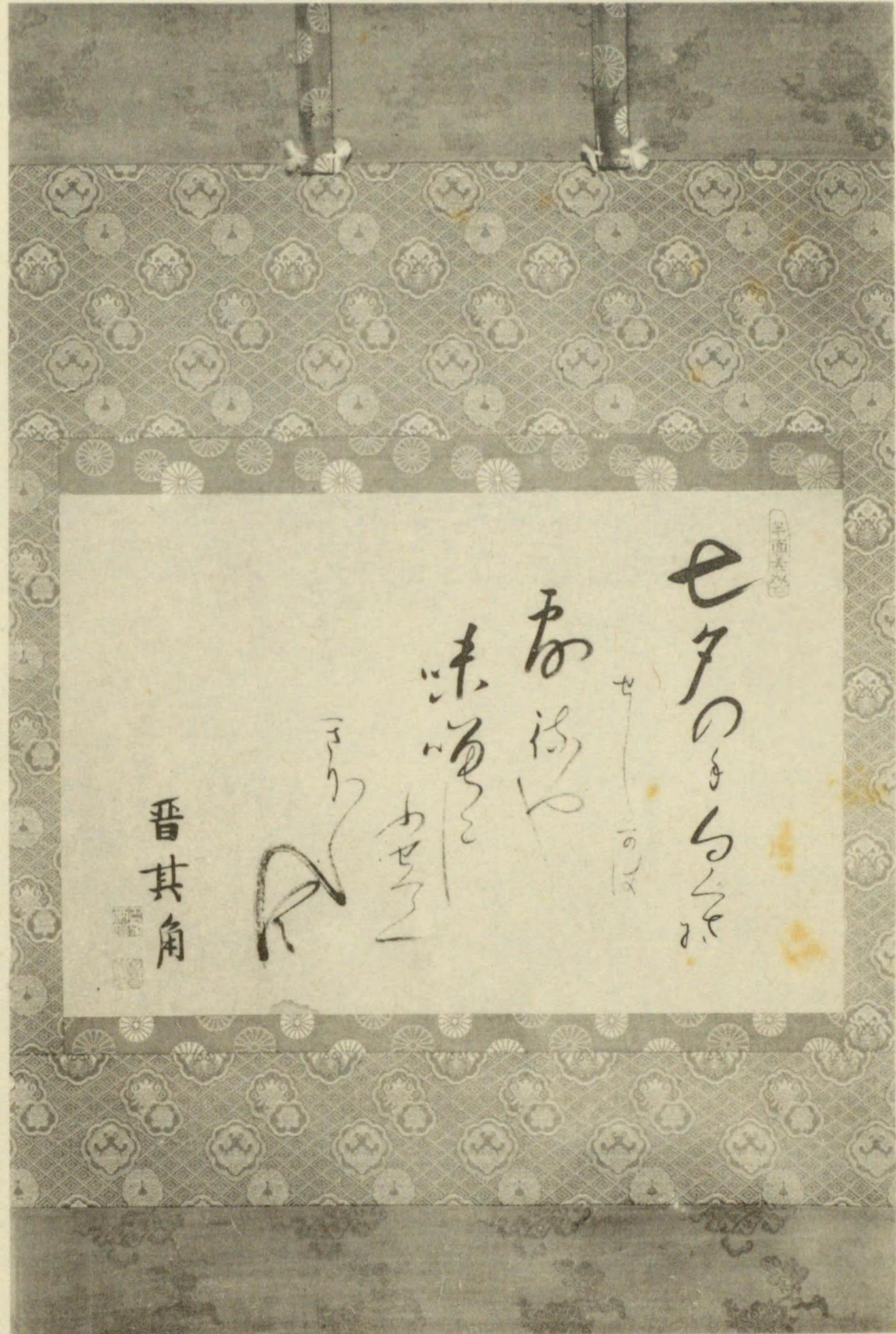
季吟 さゝげの自書賛

花にあかぬ
長居やふらり
さゝげつる

花にあかぬ
長居やふらり
さゝげつる

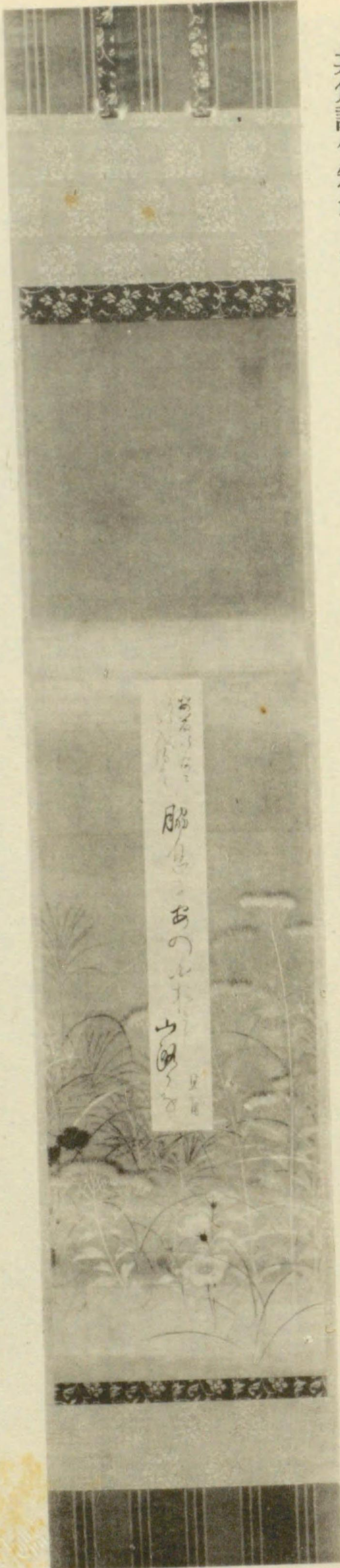
季吟

晋其角筆 七夕の詠



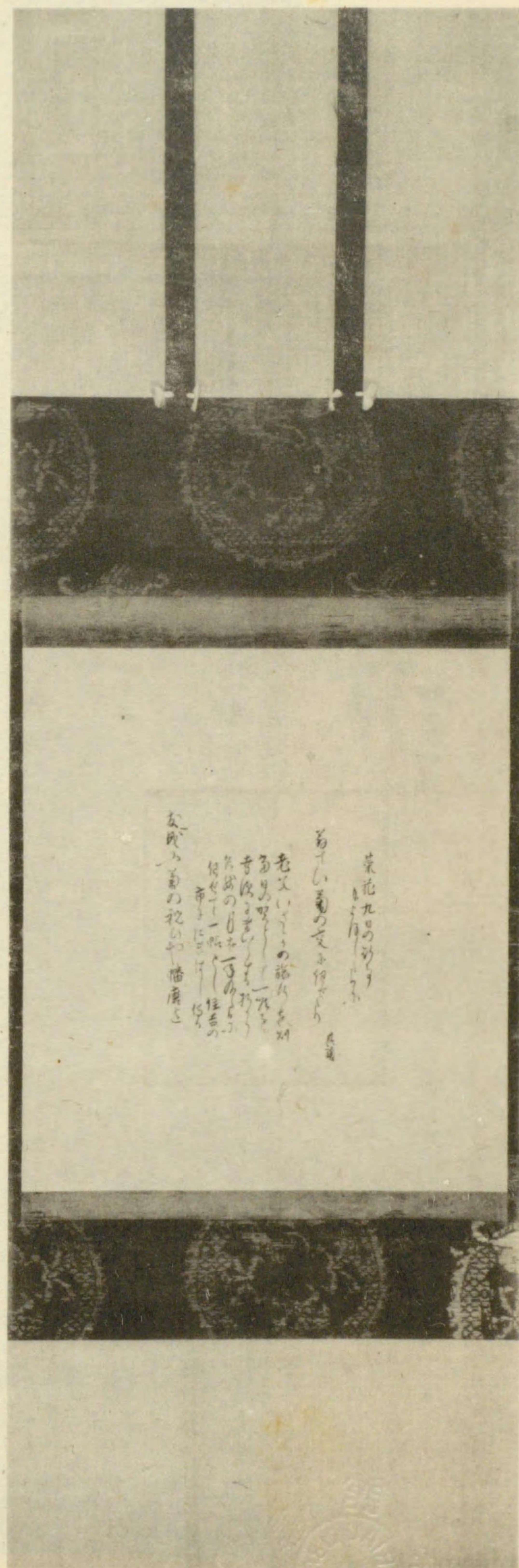
七夕の手向くさに
せしかは
露待や
味噌こし
ふせて
きりく須
晋共角

其角詠句短冊 抱一の筆繪表装



安藤行露公
あたまへ
御入湯の頃
脇息にあの花おれと
山路かな
其
角

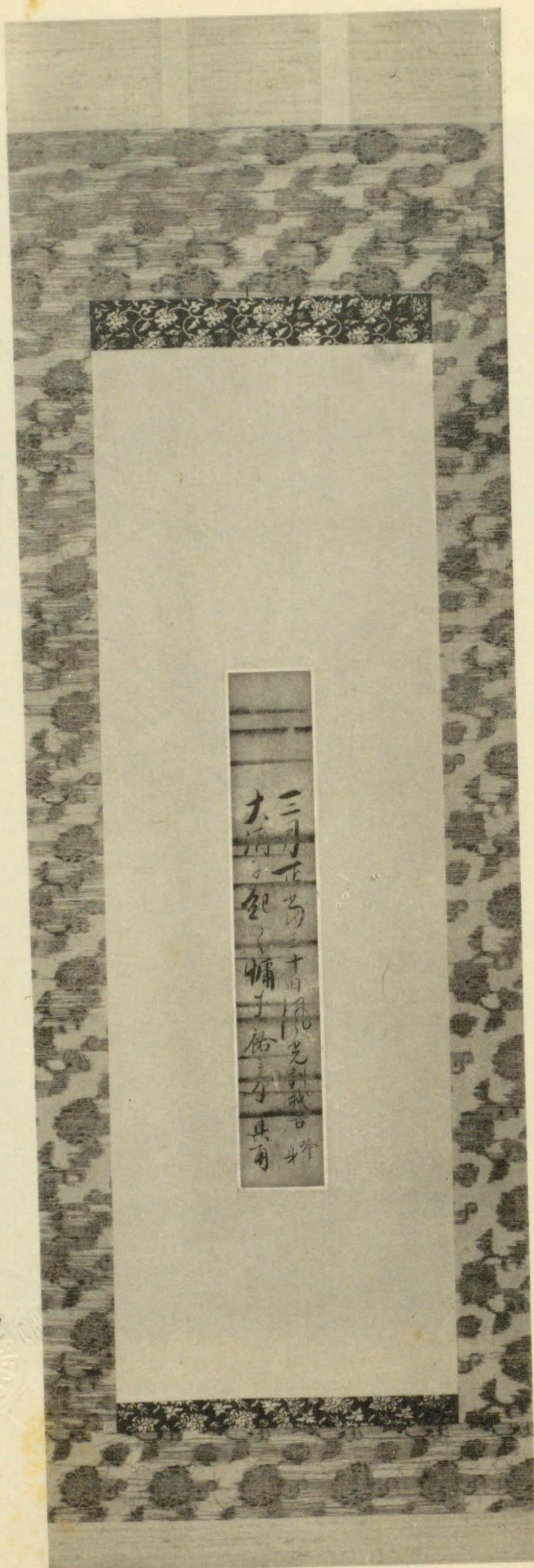
其角 菊の句詠草



菊花九日の行事
もよほしたるに
翁さひ菊の交に任せたり
老父いさゝかの旅行を則
當日の賀として一順を
幸便にまいらする折から
名残の月を承及たるに
任せて一帖とし住吉の
市にきはし侍る
友成に菊の祝ひや幡摩迄

菊花九日の行事
もよほしたるに
翁さひ菊の交に任せたり
老父いさゝかの旅行を則
當日の賀として一順を
幸便にまいらする折から
名残の月を承及たるに
任せて一帖とし住吉の
市にきはし侍る
友成に菊の祝ひや幡摩迄

其角 七言二句並に句



三月正當三十日風光別我苦吟身
大酒に起て備き給かな
三體詩 三月晦日贈劉評事 買島
三月正當三十日風光別我苦吟身
共君今夜不須睡未到曉鐘猶是春
とある買島の詩の起承二句より案出された
句である

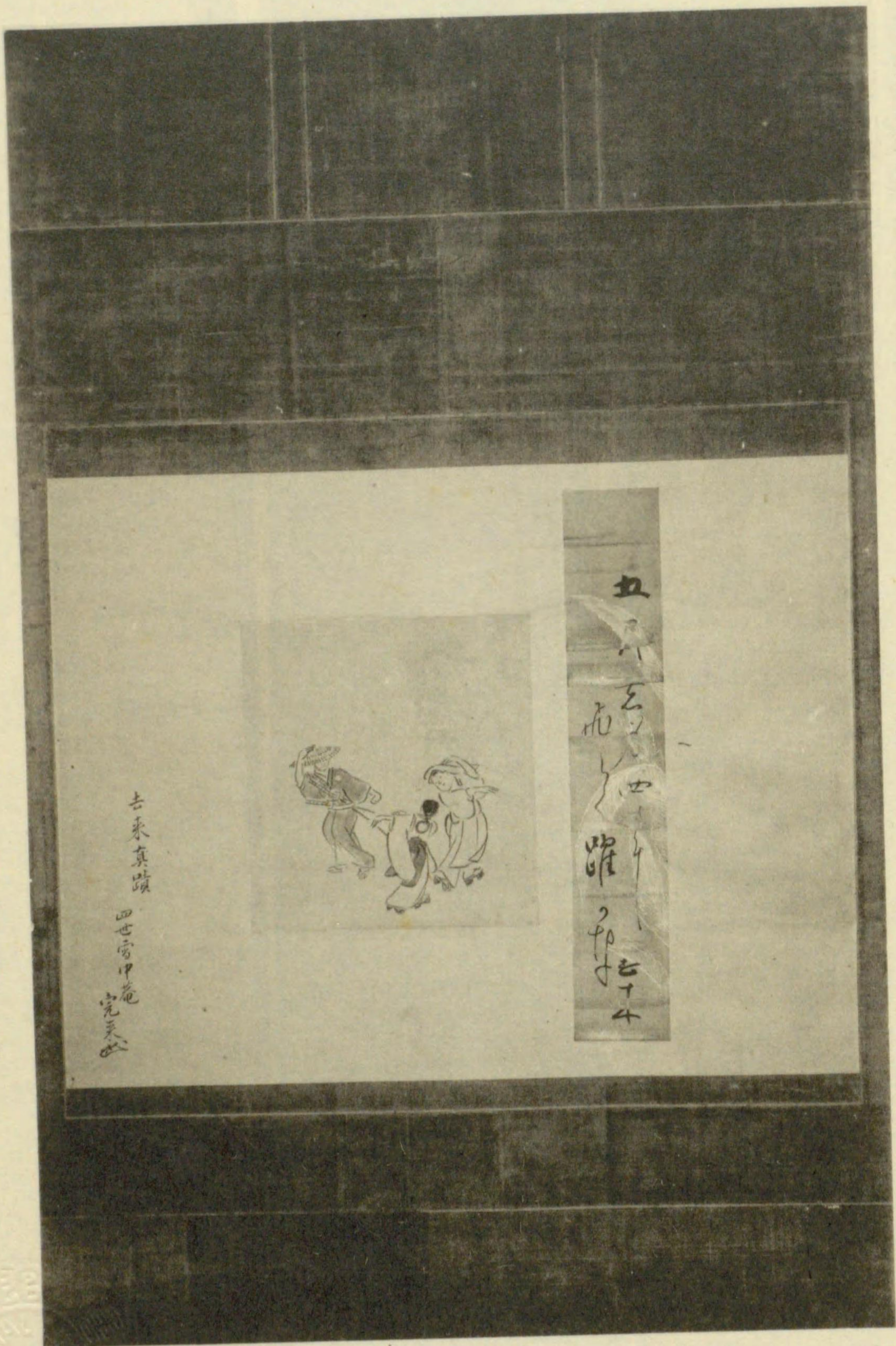
三月正當三十日風光別我苦吟身
大酒に起て備き給かな
三體詩 三月晦日贈劉評事 買島
三月正當三十日風光別我苦吟身
共君今夜不須睡未到曉鐘猶是春
とある買島の詩の起承二句より案出された
句である

嵐雪 梅の自畫賛扇子



此んめを
遙に月の
にほひかな
嵐雪

去來筆 躍の詠短冊並躍の圖



五尺の身四寸にひらく躍かな
雪中庵完來紙中極



名月や海も思はず山も見ず

名月や海も思はず山も見ず 去來 (元祿元年)

浪化上人宛去來の文

浪化上人宛去來の文 (Calligraphy on a scroll)

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of items, possibly related to the adjacent page's title.

Handwritten text in vertical columns, continuing the list or index from the previous page.

Handwritten text in vertical columns, continuing the list or index from the previous page.

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of items, possibly related to the adjacent page's title.

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of items, possibly related to the adjacent page's title.

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

と御間可被遊候かの法皇の
くまの御行脚にははかしく
人もつきそひ奉らすなと
候へはとりわけて此法皇の
御影に仕候而付たる句と
奉存候而御影の句には先
人を立候而その人の御影と仕
候事も御影又は此はたれそか
面影となり申候句も御影の
物言などはいかさま古き草紙
當語などうちら興風見
當候事なと御座候すへて
面影の句には落涙可仕句
とも多く御座候此は必光
他へ御もらし被遊間敷候
押よふてねては又たつかり枕
火とほしてくればはほるみねの寺
ク様之句ともたれその
面影に立申候句にて御座候尤
他流にもク様之句とも御座候
心をも何の心もなく仕たると
各別の意味出申候
古詩古歌を取候事一段
せめ上候而取申候他御得心
珍重仕候しかれば
柴門流水依然有
此句を御取被遊候か？
梅か香を奉行を送る村の口
此句叶可申かと御尋御尤に
奉存候しかしなから此はた
風景自然に見來處の
味同敷故に左様ニ思召寄
たると奉存候きなりなから
景物も見聞もたかひ候へは
叶かた候はんか只今仰により
風存候候

陽炎や流にうつる柴の門
此五文字すしきやとも
可仕候か此なんと叶可申や
すへて古歌古詩を取申候も
事も情を取候とも景を取候も
よ段せめ上候而取申たるか
者か句に先年下掛候千子も申候
すか山にて
小鳥さへ渡らぬほと深山哉
王新口か佳句一鳥不鳴
山更幽ナリト同々と申候而
うけ取不申候他流は此かま
ひなく候富流にも人かま
先年下掛候へとも下掛は嫌申候
猪のれに行かたや明の月
此けしきの面白さに
自讃にて翁へみせ申候處ニ
翁暫く物をも申されず候ゆへ
拙者心に翁の猪の山へかへ
其風勢申しれざるやと重而
されはそのけしきの面白き

事は古人も
かるとて野へより山
の麓のあとを吹くる
とよみ申候へは暫く俳諧の
手樹なきやうに存し候故
及句案候とことへ申され候
此は發句と少事もちかひ候へとも
中へ脚吹をくる萩の上風候
とよみ申候は俳諧に合せては
明の月と申田んは俳諧に
既たる場のよく口をし
此句をうち捨申候すへて
古歌なと取らんには一しほ
風勢も情もせめ上申したき
事に奉存候されはいまや引
らん望月の駒に存しより候て
と駒寮の木曾や出らん三日の月
相坂の歌により候し取たる所は
その歌にすからず候
翁の當處且に申もらし候
翁の當處且に申もらし候
悲観初何の聞はやいせの便
いせにしる人おとつれて
便嬉しき
此いせ便の出處にて蓬菜ニ
まづ初の一字翁の魂
奇妙に奉存候
鐘隔雲聲到運
此心におもひよせて
翁
花の雲錦は上野かあさくさか
深山木のその梢とは見えざりし
切は花にあらはれにけり底張
梅ヶ香を見れば櫻哉
柳の枝に咲てそ見ん其角
梅折て柳の枝にまたかせん
雲花のまかふ事を
たかせんと謂ましるし野水
切か上野かあさくさかなと
皆己か力を古詩古歌の上にて
詩を歌を發句に直したる
まて二候此意尤御句案可然候
伴あまひ古詩古歌に
より候事は強テ好し申候事
にて無御座候尤候と申にて
はざら無御座候尤候と申にて
の付申さぬやうに仕候事をふるひ
右から左からも大事ニ仕候
下掛も定家卿の輝十文
字におもひより候て
又遊人も定家卿の猪の
戀のうたによりて
うらやましおもひ切時
ねこの戀
おもひ切時をうらやみたるは
越人か秀作と奉存候た
發句もいろくまの集
姿可有御座候さるの集
御らん可被成候さまの風御座候

其れを一體に心得候へは却而
發句仕かた候へはねはりなく
さらり仕候を第一ニ被成候而
句のすかた候へはかやうになりとも
被出御らん可被成候
此度まつ手紙に御座候
發句とも少く上上仕候伴
此内江戸の集に入申候而
承合候而進上可仕候其内ニ
集出可申候此も去夏より
の催しよまた出版不仕候舊冬
出来のよしは承候下掛句
ともは十五六此集のために
關東へつかわし候まていま
いつれ入不入不承候右此度
可申上候拙者句は何時ニ而も
進上仕候事に御座候當春
以來元去年江戸へ申もらし候
句共少々申上候
酒堂三吟の事酒堂連
ニも直に大坂へかへり候下掛も
去月よりさんへ相煩漸
このころ本快仕候ゆへにまた
埒明不申候進上可仕候
昨日も酒堂方よりセカミ
て文こし候
正秀第三かせん事は
當時正秀方不叶公用
御座候而夫故連引仕候尤
此時明候へは早々出来仕候
皆に御座候セム運業いつれも
待かね申候よし承候尤
此かせんは却而可早候
京大坂かせんは其元より
被下次第ニ催し可申候
酒堂方より申越し候大坂
進業は百韻御さ候此を進
上可仕やと申來候併御連業
意人も御入無之百韻入申候而
集のやうすあしかるへくと奉存候故
拙者もいかと思案仕候
尤御所説におほしめし被成候は
打付向を句案仕たるかよく
御さ候左様に仕候へは事皆
實事に成行候故第一句
も人の身にとまり意を以て
催し候今日掛意を以て
に被遊候や承度奉存候
昨日賀翁北枝參會初而
仕立候句ともたへ虚候
のみにて終ニ人を感動
いたさせ候句にいたり候事は
無御座候齊門の教花實
を不抱さる内に實を
以て向を立て申候第一ニ
仕候此段能く御句案
可被遊候乍推参存出候故
申上候恐惶頓首
浪化公
五月十三日
去
來
貴答

此は御句かとおぼえ申候物而
此御句かく御工案可被遊候フ様に
草をあたゝめんか爲に
腹這たるやうにきこえ候
されは先頃の評にも草
あたゝめて何の腔にやと申上候
かと覺申候同し事にて
臨這に草かぬくむやひはり倍
と被遊候へは久敷腹這て
草も自然とあたゝむるてい
きこえ候伴あまり過たる御發句
にて無御座候間御用捨
御心次第に可被遊候
御色をもとめつくり情を
こしらへ候事はあしく候た
古人のしたる跡當時の身
の上旅戀不明し等にその
中の事共をおもひ出し候て
仕たるかよく奉存候風景の
前句に連候は此はいつこの
景たるへしや前句を先
きためんの上の事ニ候は
此はたれ人いかなる人の身
の上なるへしや前句の
人をさきためて下の句を
拙者もいかと思案仕候
尤御所説におほしめし被成候は
打付向を句案仕たるかよく
御さ候左様に仕候へは事皆
實事に成行候故第一句
も人の身にとまり意を以て
催し候今日掛意を以て
に被遊候や承度奉存候
昨日賀翁北枝參會初而
仕立候句ともたへ虚候
のみにて終ニ人を感動
いたさせ候句にいたり候事は
無御座候齊門の教花實
を不抱さる内に實を
以て向を立て申候第一ニ
仕候此段能く御句案
可被遊候乍推参存出候故
申上候恐惶頓首
浪化公
五月十三日
去
來
貴答

事はくはしめずありて
くはしめずありて
目下はれりのやうに
くはしめずありて
くはしめずありて
くはしめずありて
くはしめずありて
くはしめずありて

あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て
あつて家へ来て

ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て
ふとて家へ来て

侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて
侍はくはしめずありて

えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて
えんはくはしめずありて

儒の干川
細川家

於具の本そ道

月日は百代の過客にしてゆきかふ
年も亦旅人なり船のうへに生涯をう
かへ馬の口とらへて老をむかるものは日く
旅にして旅を栖とす古人も多く旅に

死せるあり予もいつれのとしよりか行雲の
風にさそはれて漂泊のおもひやます海濱
にさすらへ去年のあき江上の破屋に蜘蛛
古巢をはらひやゝ年もくれ春立る霞の
空に白川の關越んとそゝる神のものに
つきて心を狂はせ道祖神の招きにあひて
とるもの手につかすもゝ引の破れをつゝり
笠の緒付かへて三里に灸するより松島の月
先心にかゝりて住める方は人に譲り杉風か
別墅にうつるに

中略

からひたるも艶なるもたくまじき

もはかなけなるも於くの細道

みもて行におほえすたちて手

たゝき臥て村肝を刻む一

般は義をきるくかゝる

旅せまほしとおもひ立一たひ

は座してまのあたり奇景

をあまんすかくて百般の情

に鯨人の玉を輪にしめしたり
旅なる哉器なるかな唯なげかし
きはかうやうの人のいとかよはけにて
眉のしもの置そふこそ

元祿七年初夏

素龍書

此卷は古師芭蕉翁の紀行
にして素龍清書す書の長

五寸五分幅四寸七分紙の重五十三

初終に白紙あり行成の表紙

紫の糸を以てとち外題は

金の眞砂ちらしたる白地

にみつから奥のほそ道と書

年月頭陀のうちにかくして

行先くゝに隨身したまふ

元祿七年水無月予か方に

偶居ましくゝてかつく

ほのめかし給ふを書寫の

事深く乞ひたてまつり
けるにおなし年の神無
月なにはあしのかりねに
心地なやみたまひぬと聞え
ぬれは急きとふらひまかり
けるに枕ちかう呼たまひて
けふ我やまひ頻なり汝日頃
此集の求ふかし今將に
足下に譲りなんふしき
にもなからふるためしも

あらは寫しとめて本の
書をかへすへし書は兄の
慰にとて古郷に残し置ぬれ
はつとくゝに借送るなるへしと
聞えたまふかたしけなくも
かなしくもかしこまりやか
てうつしとめてめてたき
此まきは捧侍りなんと泪
を落しぬかくて遷化の後
兄の許へ文して乞奉りける

に今はかうやうのものをこそ
しはしとまるへき老のかた
みともなくさみ侍れば聊
手をはなち侍人もあさまし
う覺られぬれと遺言なれ
は送りやりぬ且は奥羽の
たひねの夢の跡もなつかし
く且は門葉のひとゝの
手跡もめつらしとみまほし
ければ予に書寫して送り

侍るへしと也然はふたゝ
ひ能書をゑらふによしなく
やゝその製をたかへすといへ
ともなを誤字落字の多
からん事を恐れ侍るのみ

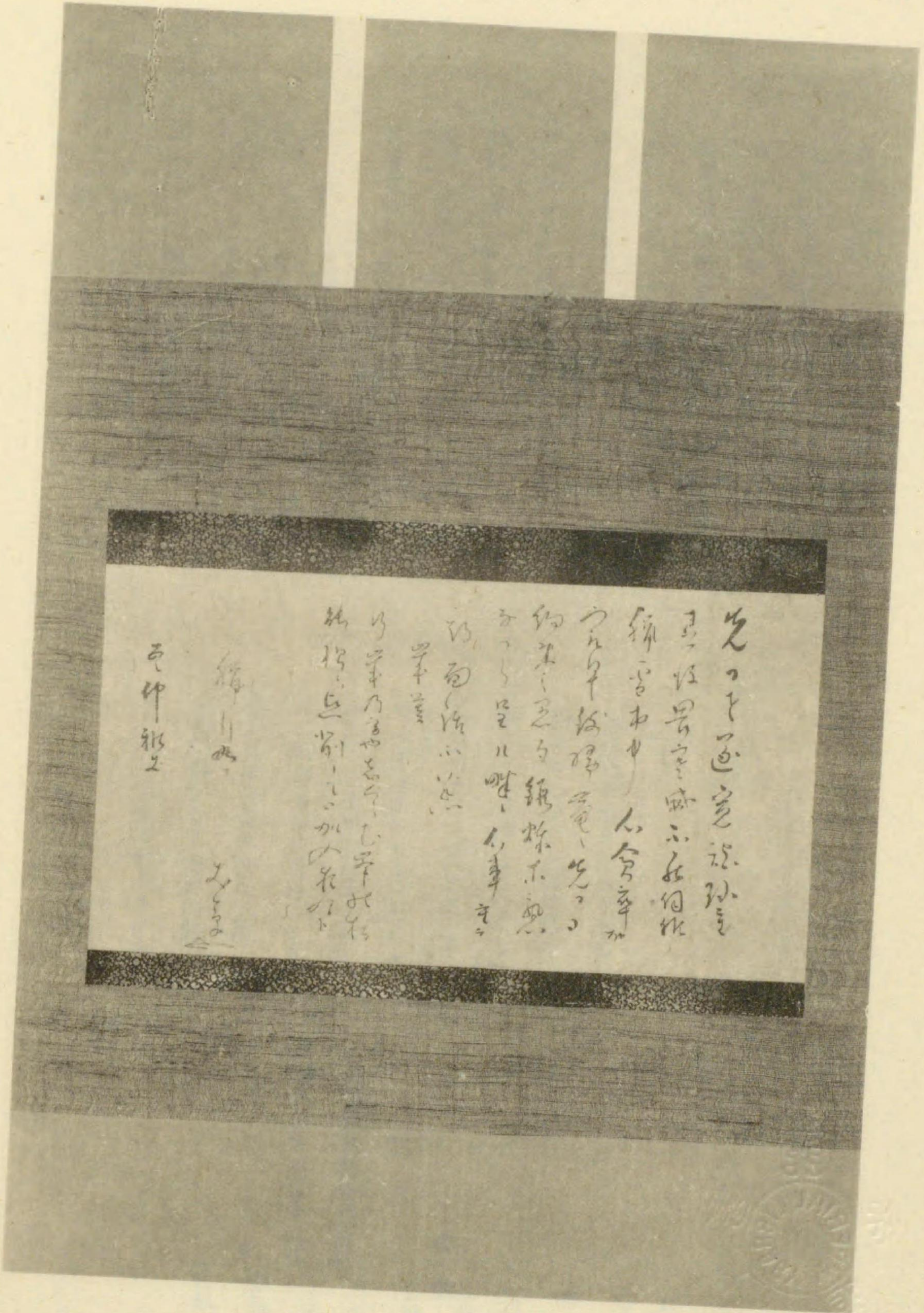
濡つ干つ
旅や
つもりて
袖の露

元祿八乙亥九月十二日
於嵯峨落柿舎書寫焉

門人

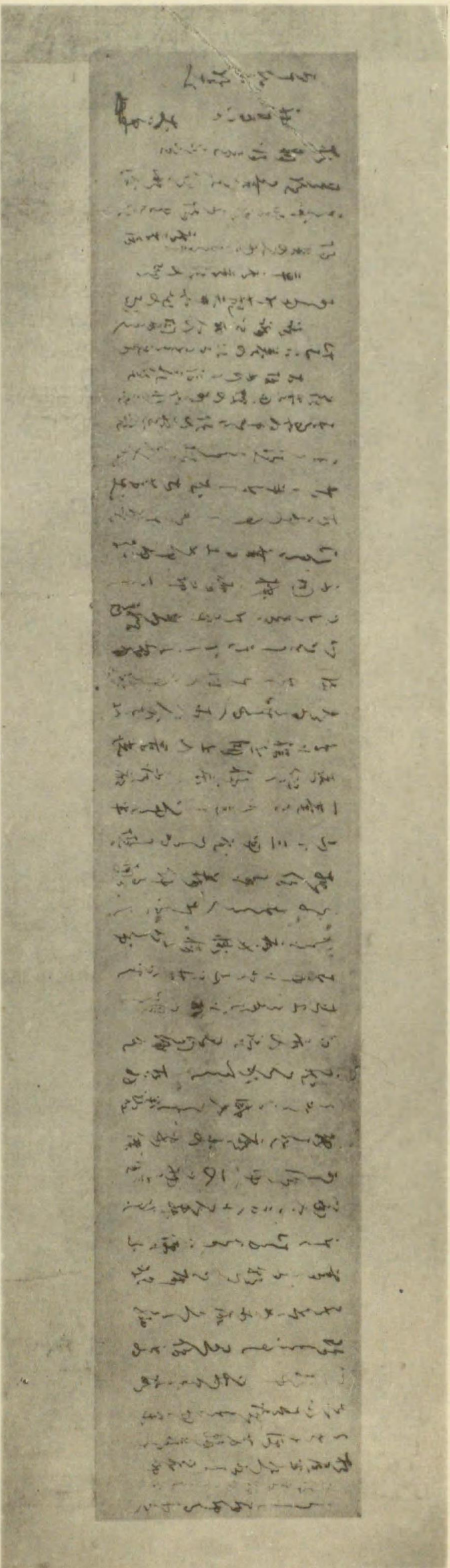
去來拜

内藤丈草 句入之尺牘



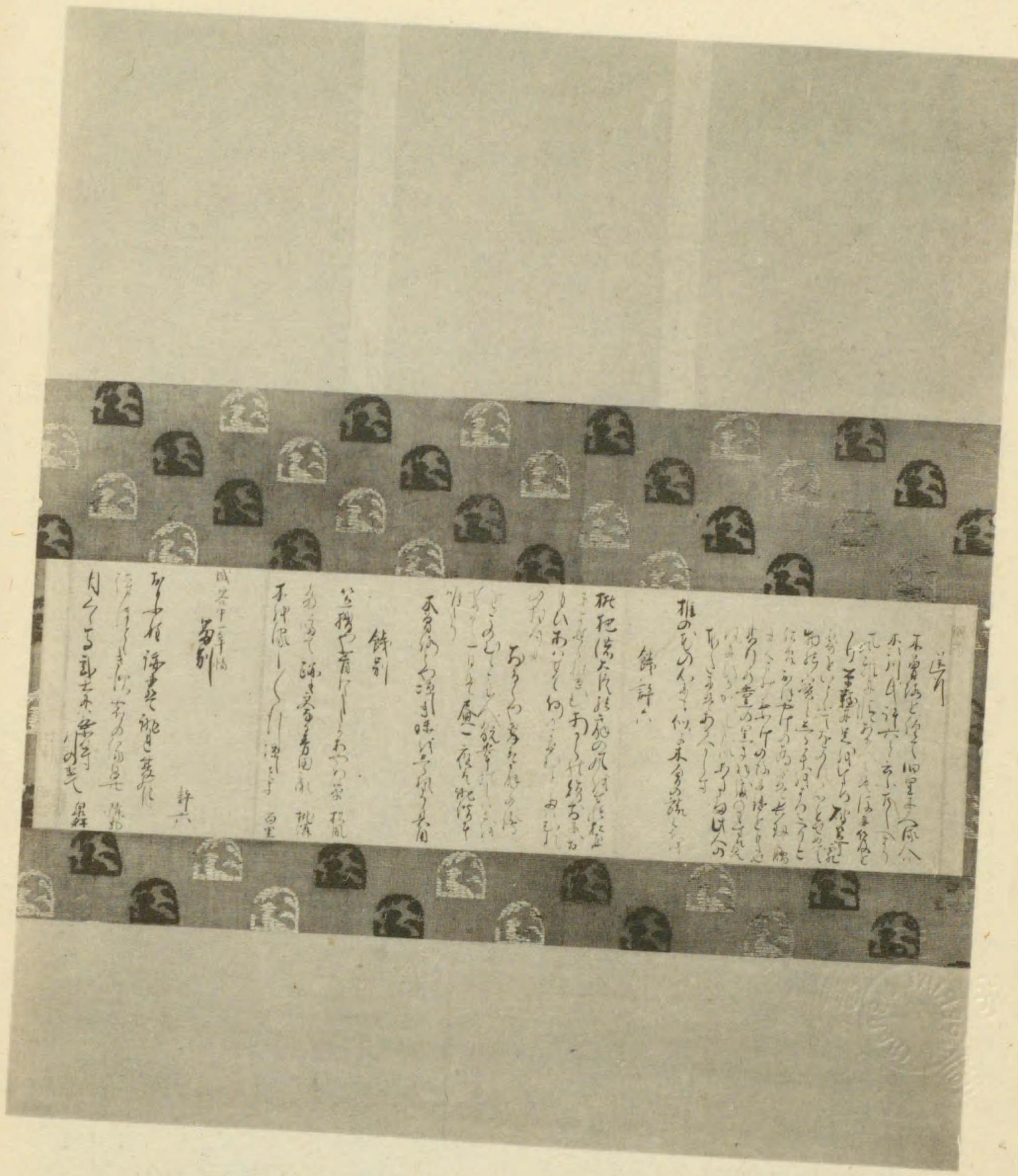
先日者透覽談珍重
 其後畏寒威不罷何候
 臘雪市中心倉卒處
 最早致歸庵候先日御
 約東之恩句鍛煉未熟
 なから呈几畔候心事重而
 期面話不悉
 歳暮
 行歳の方やしぐらむ峰の松
 能様ニ點削して御加入頼入候
 臘月九日
 吾仲雅丈
 丈草

丈草 卓袋宛之文



尚々義仲寺和尙へ
 御傳書奉有候已上
 松尾半左衛門殿より御飛脚
 被遣今便芳翰落手
 尤以其庵無別條
 御一類中御安全之段
 珍重事に候愚情無爲
 罷在候如示諭久々絶
 書候而朝夕御床しく存候
 斗候此方より候便も不
 承各々方へも且舞申事も
 あらず候ゆへ一入御物邊に存候
 能こそ爾參の家儀
 被遣候と趣入いたし候半左衛門殿
 可然御心付可被下候 古翁
 如居の跡も見問儲存候
 其上となたへも掛御自度存候
 春中も登志は少々御座候
 成とも病身懶惰にからけ
 られ春さへ打過申候
 拙僧儀も義仲寺より南の
 山下三四屋つらなりし境に
 一庵を取立申候いまだ半
 造作にて移居は不仕候願
 邊も程近く湖上の景光も
 常ならず候ゆへ所の人のすゝめに
 まかせ候々様の事なにも
 心いそかしきややら候兎角
 御無言に打過候如何様其内
 不圖搜獲筋可申候
 頃日御發句等如何にかに
 古翁の事申出られ愚句
 少々書付申候尤士芽丈
 へも御覽被下候様に頼入存候
 春雨やぬけ出たまふの夜斎の穴
 花巻田螺のあとや水の底
 大坂如行に請はれ侍て
 此春は墓の次而にとはれけり
 嵯峨の郷或る人の閑居にて
 あたまうつ芳天井や花の雨
 草庵普請の砌に
 陽炎の見あきするなり庵普請
 其外野語不堪早机下候
 其庵御發句等承度候
 猶期後音候 不宣
 八年初夏八日
 丈草 華押
 卓袋 雅丈

許六送行の文並に蕉門餞別之辭句



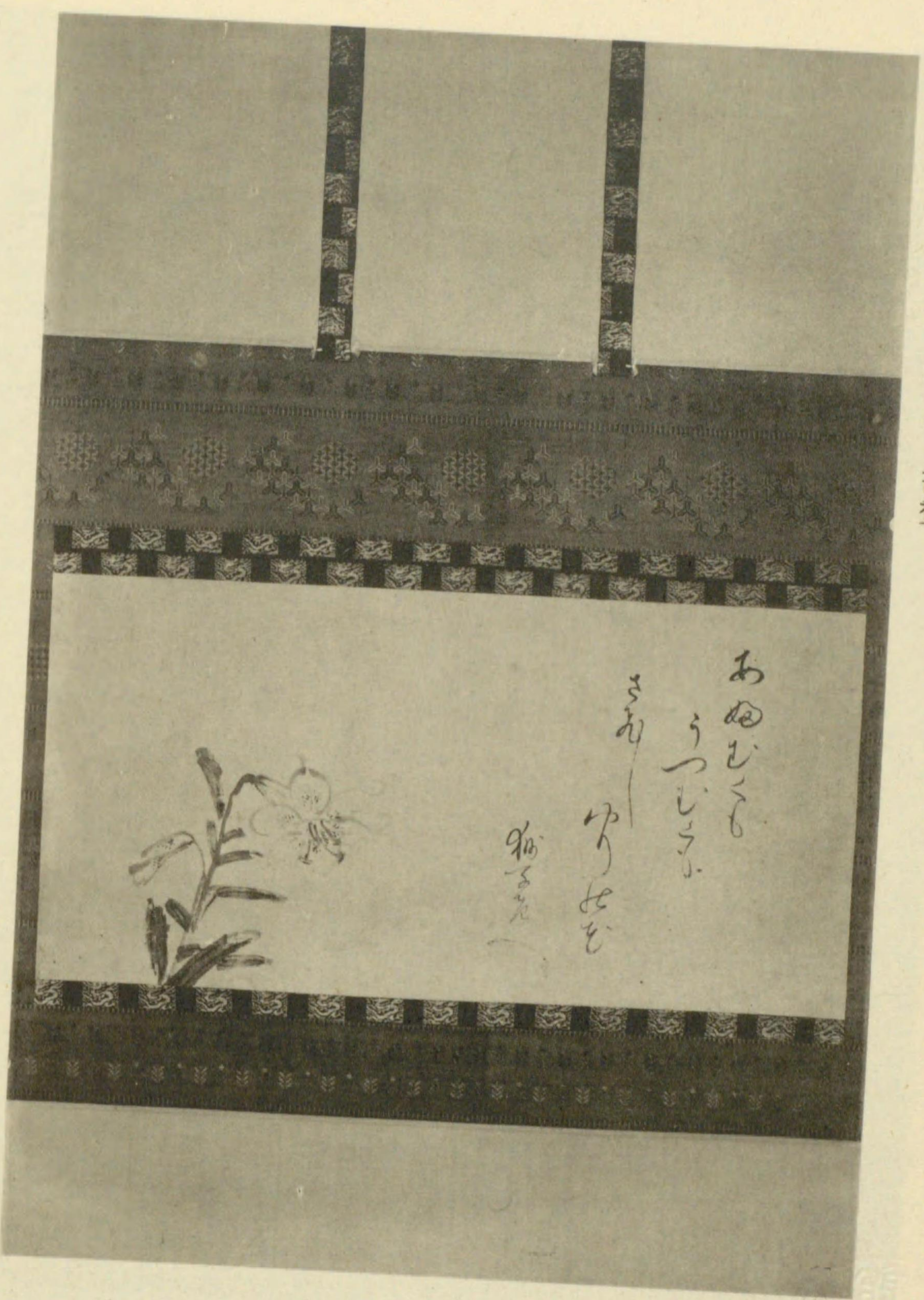
送行
木曾路を経て舊里にかへる人は
森川氏許六と云ふ古しへより
風雅に情ある人々は後に笠を
かけ草鞋に足をいたため破笠に霜
露をいとふてをのれか心をせめて
物の質とふる事をよこへり今
仕官おぼやけの鷹には長剣を腰
にはさみ乗かけの後に鎧をもたせ
歩行若黨の黒き羽織のますそは
風にひるかへしたるありさま此人の
椎の花の心にも似よ木曾の旅
はせを
許六
枇杷の大臣の扇の風を生の松原
によせられけむあからの贈別にお
もひあはせて何かよせむとたはむれ
の狂句に
別るゝや我は扇に繪
をこのむと主人瓶掌のしはさを
せめて一日は晝一夜は誹諧に
明たり
木曾路とや涼しき味をしられたり
其
筥摺や葺わたしたるあやめ草
鼻啼て跡も更なる青田かな
百桃杉
感客中一年情 行涼しさよ
泉
留別
おもふ程跡には誹れ夏の月
待ほとよき須宿の縁鼻
目くら馬武士には乗せず
引のけて
郭
鮮

五老井許六 勢田の橋自畫賛



湖南に
住侍るころ
石山の邊にて
初時鳥を
きよて
寶とよきす
勢田は
鱧の自慢かな
五老井許六自道

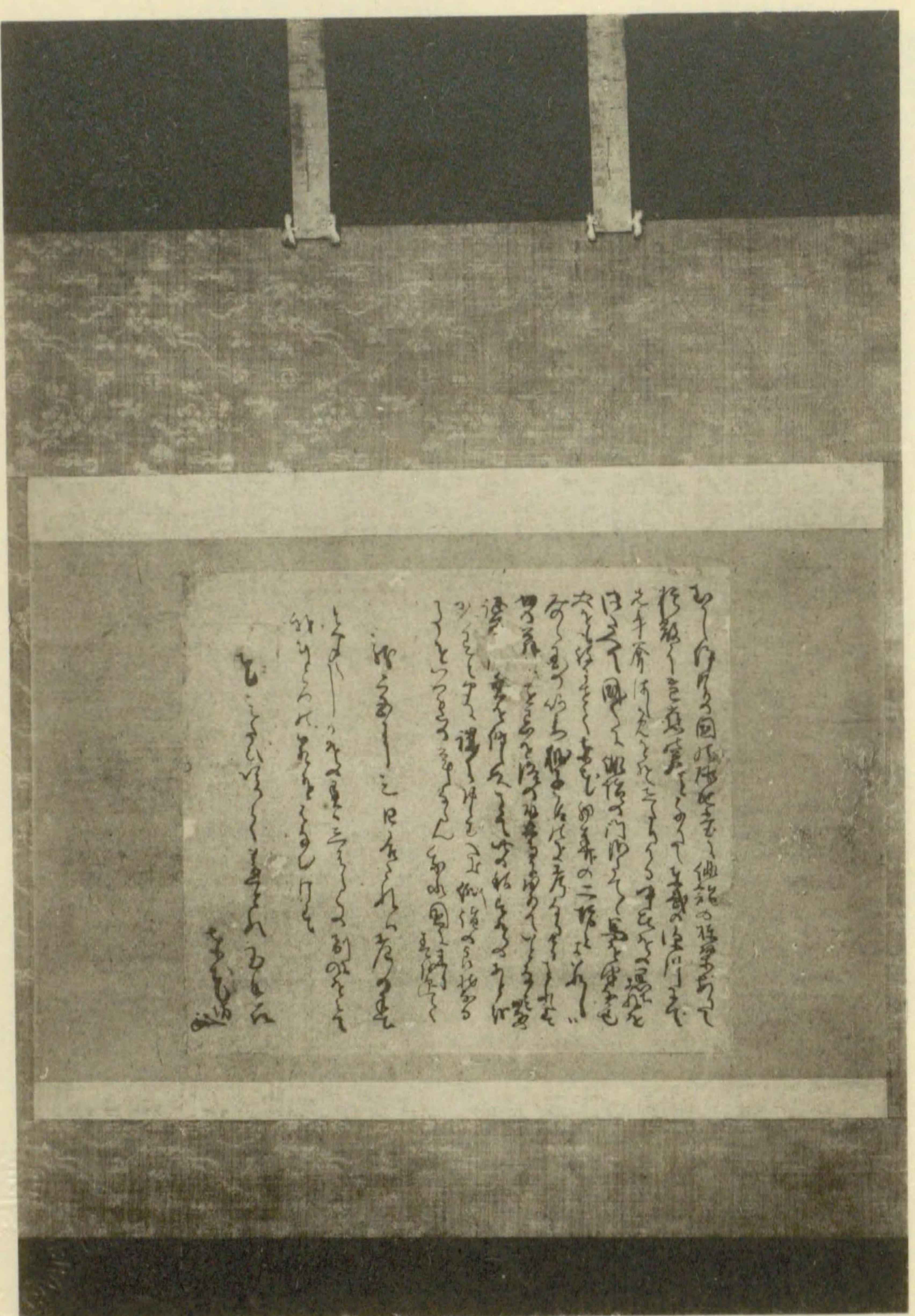
獅子庵支考 百合の花の自書賛



あふむくも
うつむくも
さひし
ゆりの花
獅子老人

あふむくも
うつむくも
さひし
ゆりの花
獅子老人

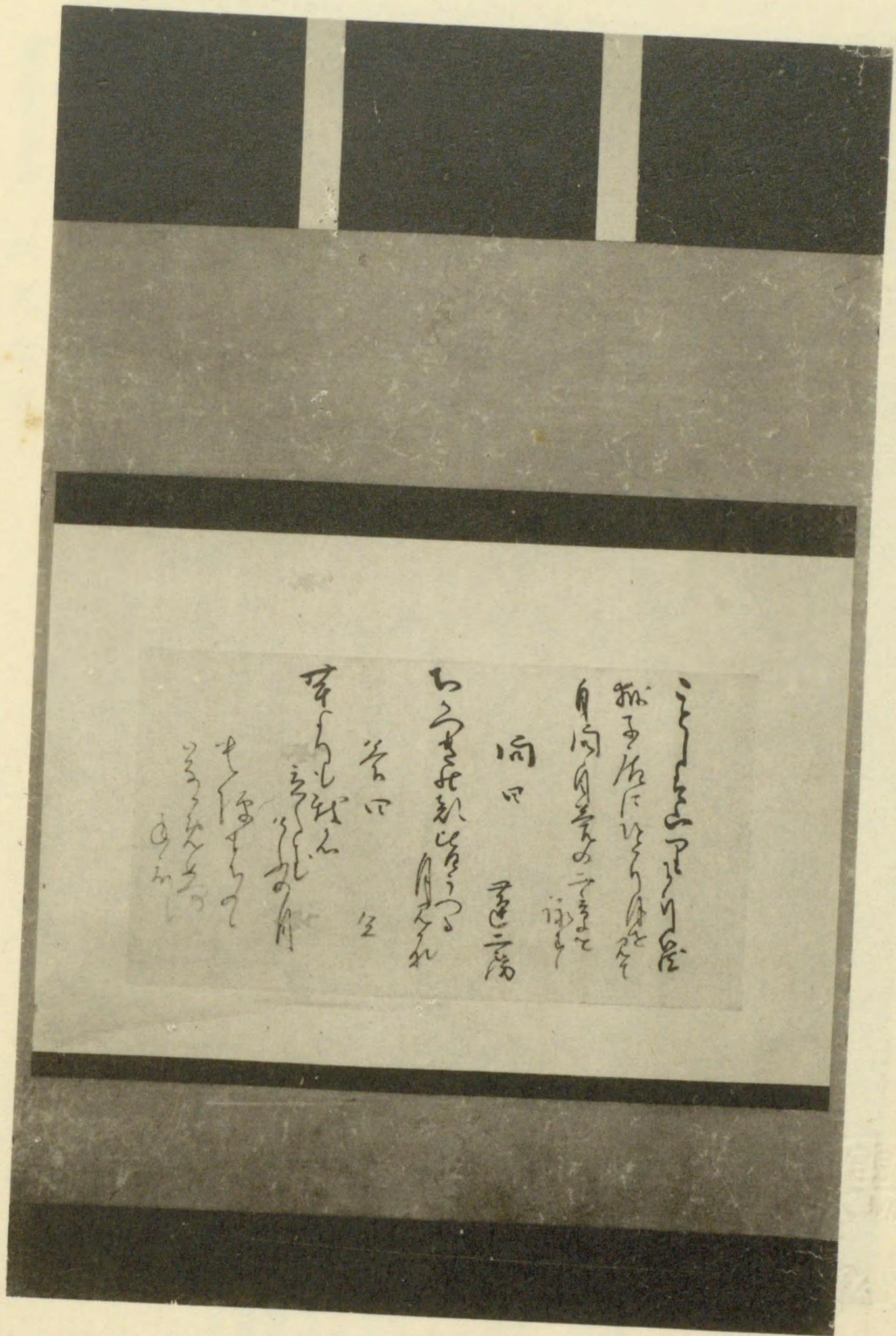
東花坊支考 句入之文



あふむくも
うつむくも
さひし
ゆりの花
獅子老人

むかし伊賀の國の桃地黨に俳諧の棟梁ありて
朽散に芭蕉の翁となりて東武の深川にて
先手斧はしめをそしたりける中比その墨かね
をつたへて國々に俳諧の門をたて、馬をつ
なかせ犬をもねさせて東花西華の二坊とよは
れしはみの、國の何某獅子庵の支考なりけり
されはかの翁の遠忌を洛の双林寺におゐてい
となみかなの(虫バミ)恩を謝しぬきて此の秋はそ
のあとをかへすと聞に誠におしむへき俳諧の
良材なる事をいつれの年ならん我れ國に來り
春を迎て
龍宮に三日居たれば老の春
と聞へしかその春はしばらくの別にのそみて
我ひとつの箱をはなむけす
花みたひ咲て蓋とれ玉手箱
東花坊(花押)

蓮二房支考 句入之文



ことは山里に引籠
獅子庵にひとり月を見て
自問自答の二章を詠す
問曰 蓮二房
ちかつきの顔皆うつる月見かな
答曰 同
芋よりも我名立ちむけふの月
貴評まち入候
御なかめ如何承度候

杉風筆 風鈴猫の自畫賛



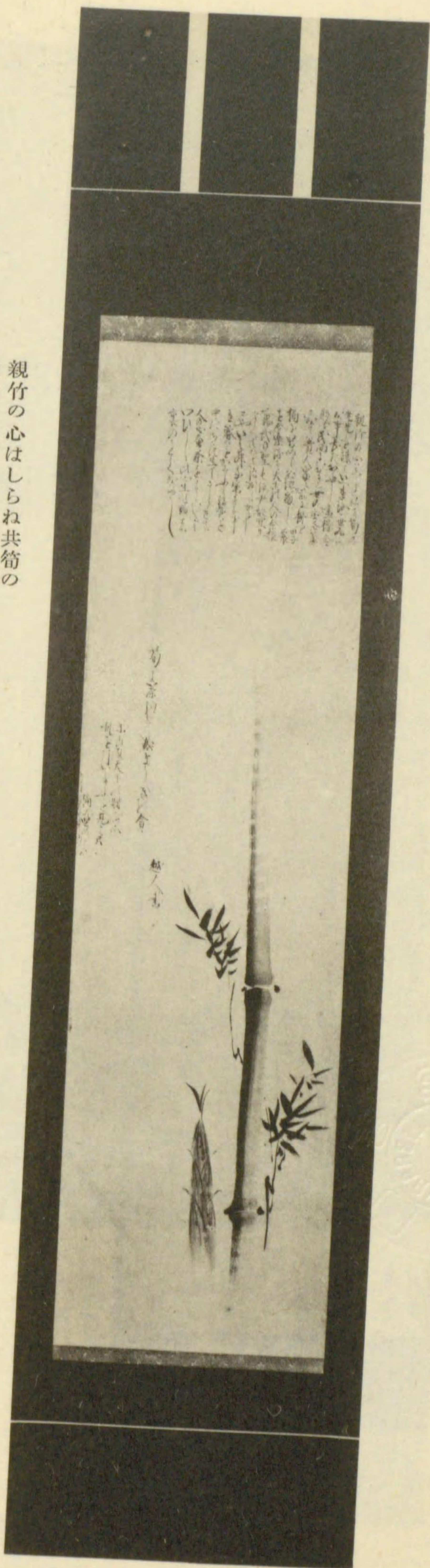
八十翁
風鈴をねらふは猫の涼みかな
杉風

杉風筆 門松の畫素堂の賛



素堂
初空やねまきなからに生れけり

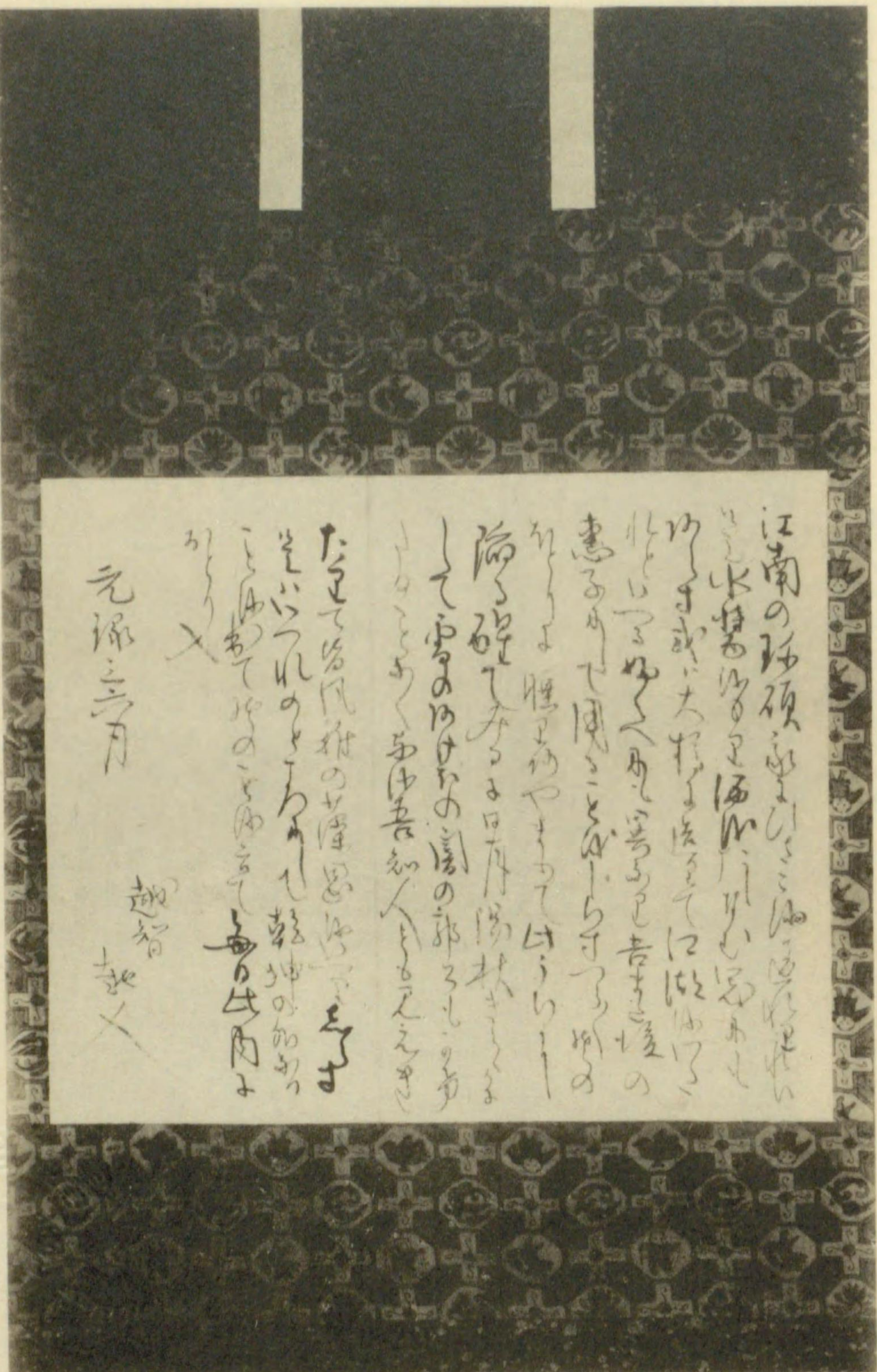
越智越人 竹の自畫賛



親竹の心はしらね共筍の
 老先を諫ていへり汝かせるに
 成事甚たおほし畫樓金
 殿より民間に至る迄世の寶也御簾
 と成ては貴人家之前に掛り田子
 桶を堅めては土地を富し農
 を令樂るは天下の人の命根
 也湯武の聖も伊尹散宜生
 ならては其治成かたかるへし
 とやいは舞我案する事
 有賽をかこふて博奕を
 中たち花生にきられては
 人の心奢茶をすゝむるそ
 わひし此心生せ鏡の
 裏のことく成へし

筍よ茶抄に成なうきの貧
 東山殿天下の財を盡し
 亂を引出し給ふを見よ只
 桶の堅めと可成
 越人書

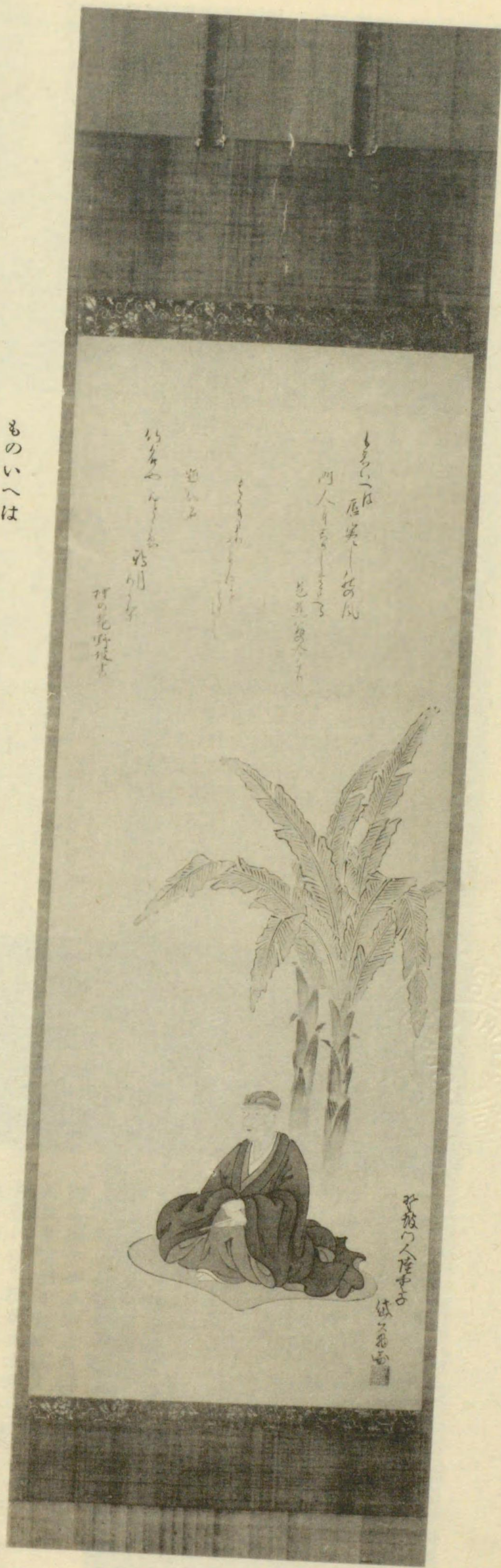
越人 瓢集の序



江南の珍碩我にひさこを透れりこれは
 是水醬をもち酒をたしなむ器にも
 あらす或は大樽に造りて江湖をわた
 れといへるふくへにも異なり吾また後の
 恵子にして用ることをしらすつら／＼その
 ほとりに睡りあやまりて此うちに
 陥る醒てみるに日月陽秋きら／＼かに
 して雪のあけほの闇の郭公もかけ
 たることなくなほ吾知人とも見えき
 たりて皆風雅の藻思をいへりしらす
 是はいつれのところにして乾坤の非なる
 ことを出てそのことを云て毎日此内に
 おとり入
 元祿三六月
 越智
 越人

江南の珍碩我にひさこを透れりこれは
 是水醬をもち酒をたしなむ器にも
 あらす或は大樽に造りて江湖をわた
 れといへるふくへにも異なり吾また後の
 恵子にして用ることをしらすつら／＼その
 ほとりに睡りあやまりて此うちに
 陥る醒てみるに日月陽秋きら／＼かに
 して雪のあけほの闇の郭公もかけ
 たることなくなほ吾知人とも見えき
 たりて皆風雅の藻思をいへりしらす
 是はいつれのところにして乾坤の非なる
 ことを出てそのことを云て毎日此内に
 おとり入
 元祿三六月
 越智
 越人

陸雲子筆 芭蕉翁像 野坡之賛



ものいへは

唇寒し秋の風

門人にしめしたまへる

芭蕉翁の吟なり

くらきよりくらき道にと

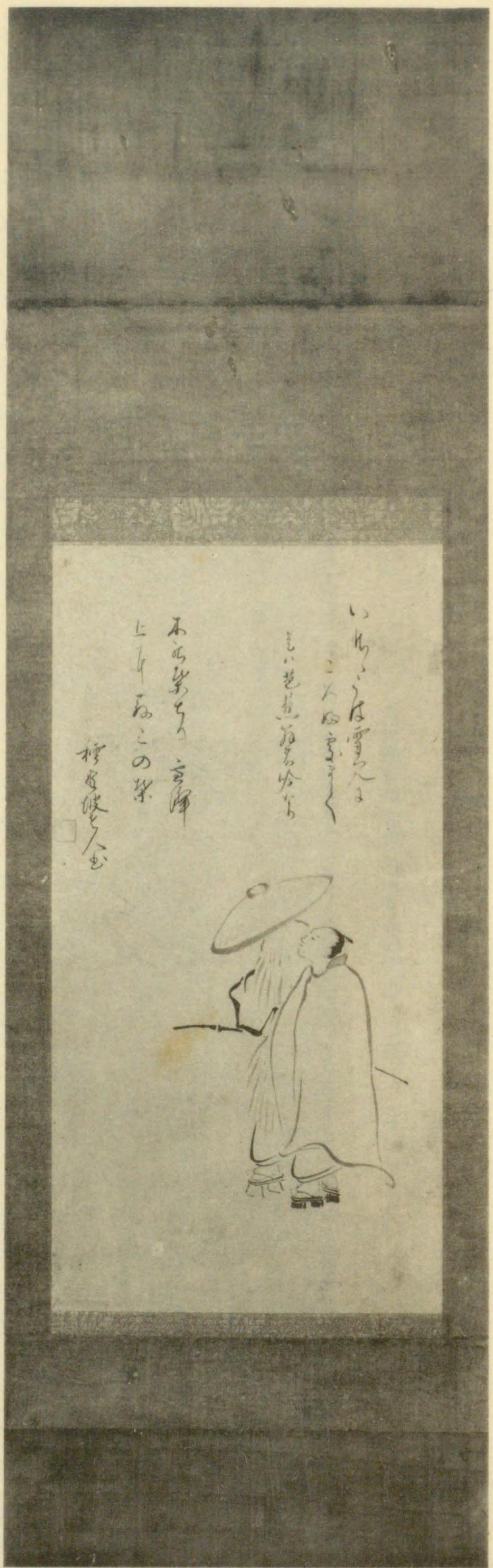
いへるによりて

題佛名

佛名やひとこゑ鶏月あかり

楞の庵野坡書

野坡 自畫 賛



いさよらは雪見に

ころふ處まで

是は芭蕉翁の吟なり

木の葉ちり雪降

上に散この葉

楞の庵野坡老人書

いさよらは雪見に

ころふ處まで

是は芭蕉翁の吟なり

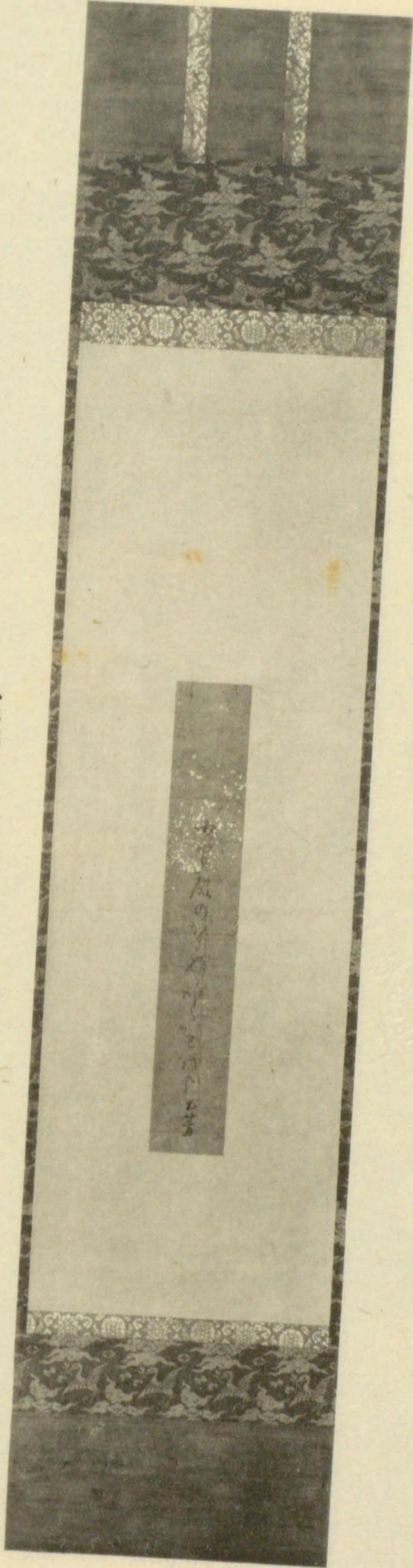
木の葉ちり雪降

上に散この葉

楞の庵野坡老人書

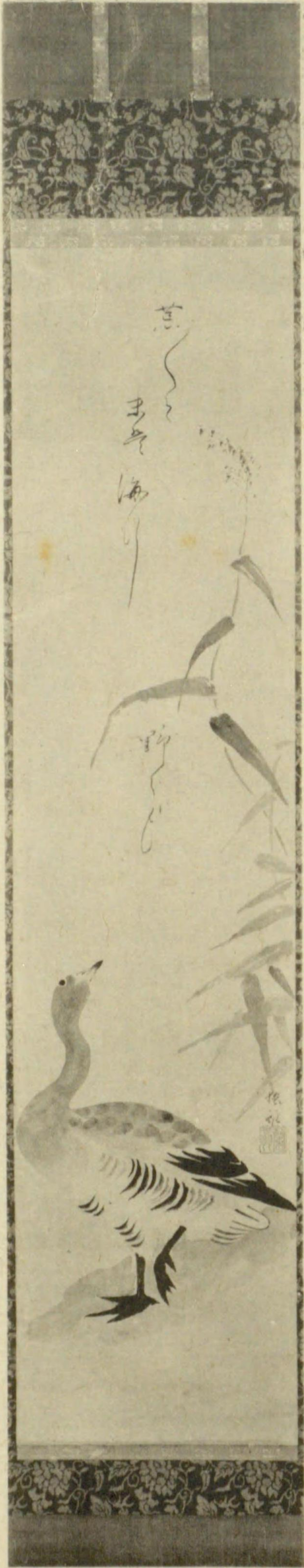
楞の庵野坡老人書

服部土芳 小男鹿の句短冊



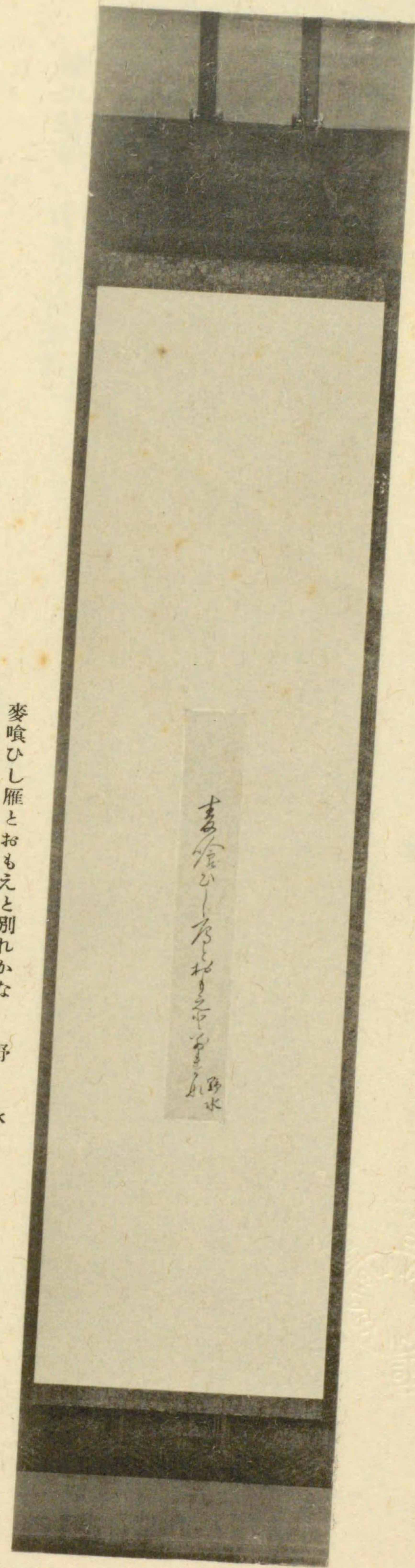
小男鹿のかさなり臥るかれ野哉 土芳

築山猿雖 芦雁之自畫賛



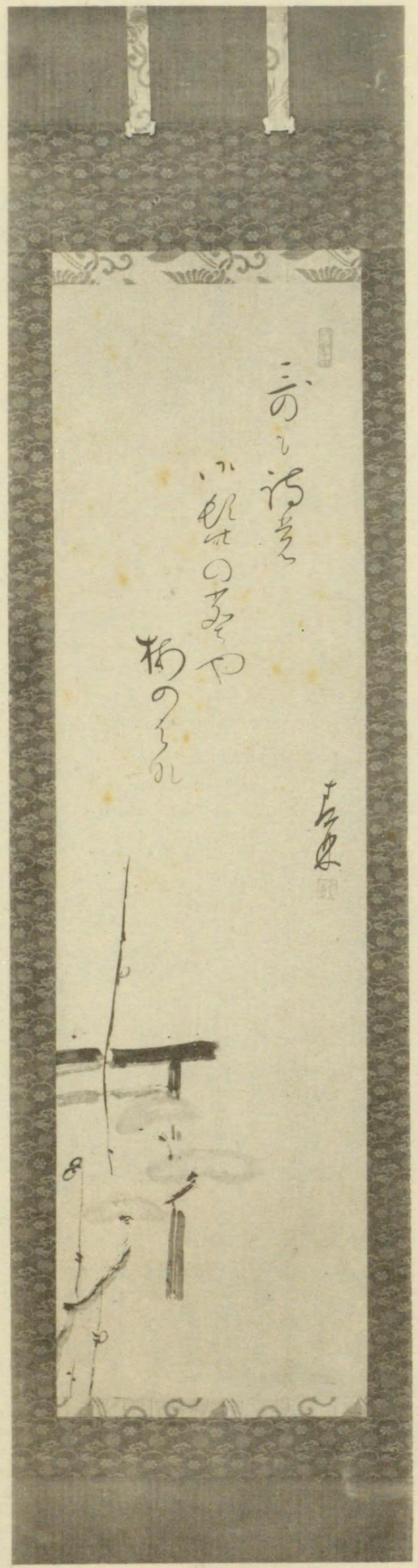
荒くて末は海行く野分哉 猿 雖

岡田野水
短冊
冊

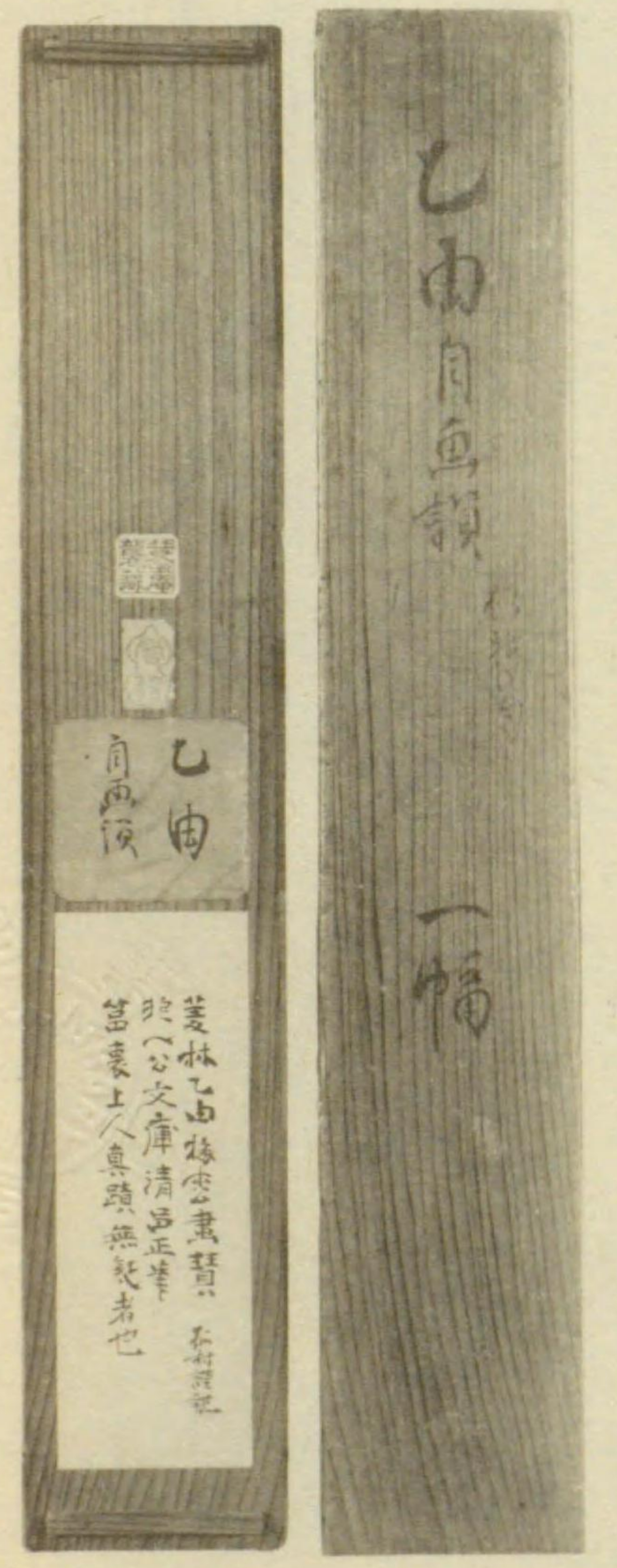


麥喰ひし雁とおもえと別れかな
野水

乙由梅の自畫賛

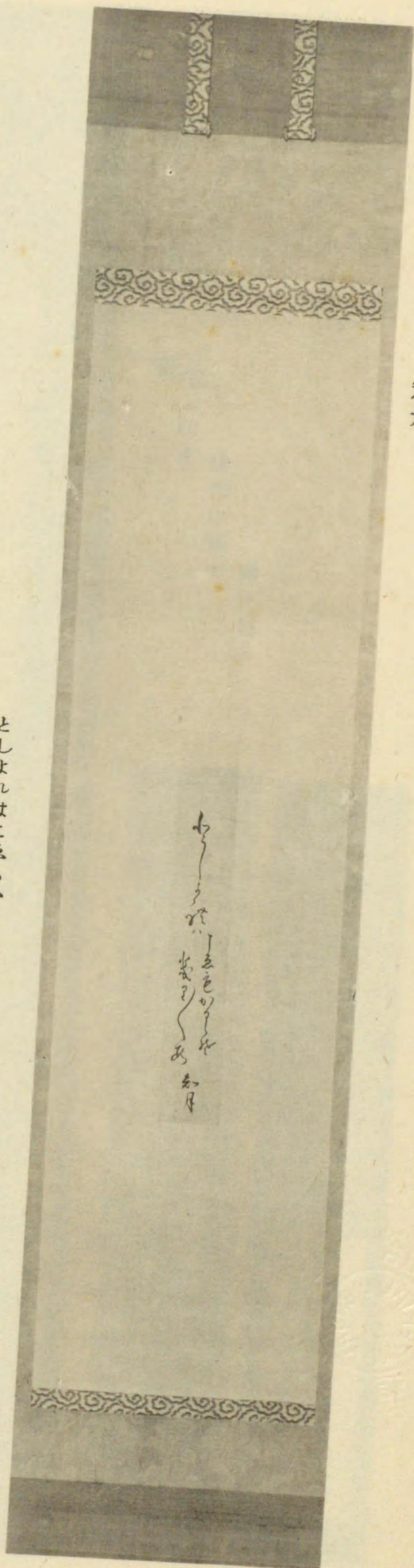


歌も詩も
御髭の塵や
梅のはな



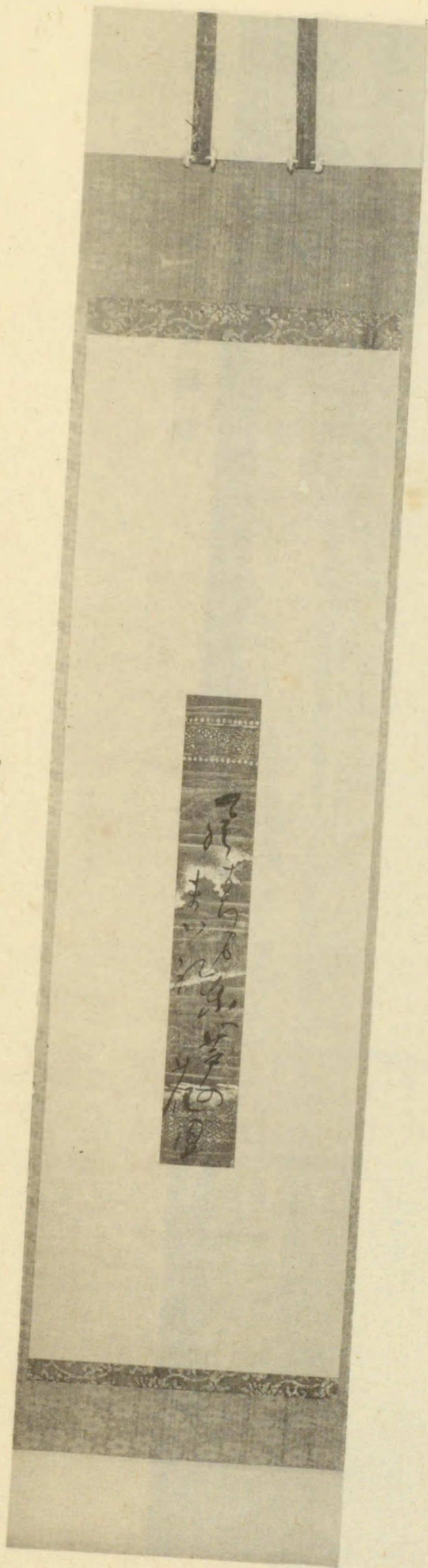
美紙乙由梅の自畫賛
於(心)文庫清品正筆
筆墨上人魚頭無記也

川合知月 さりくす短冊



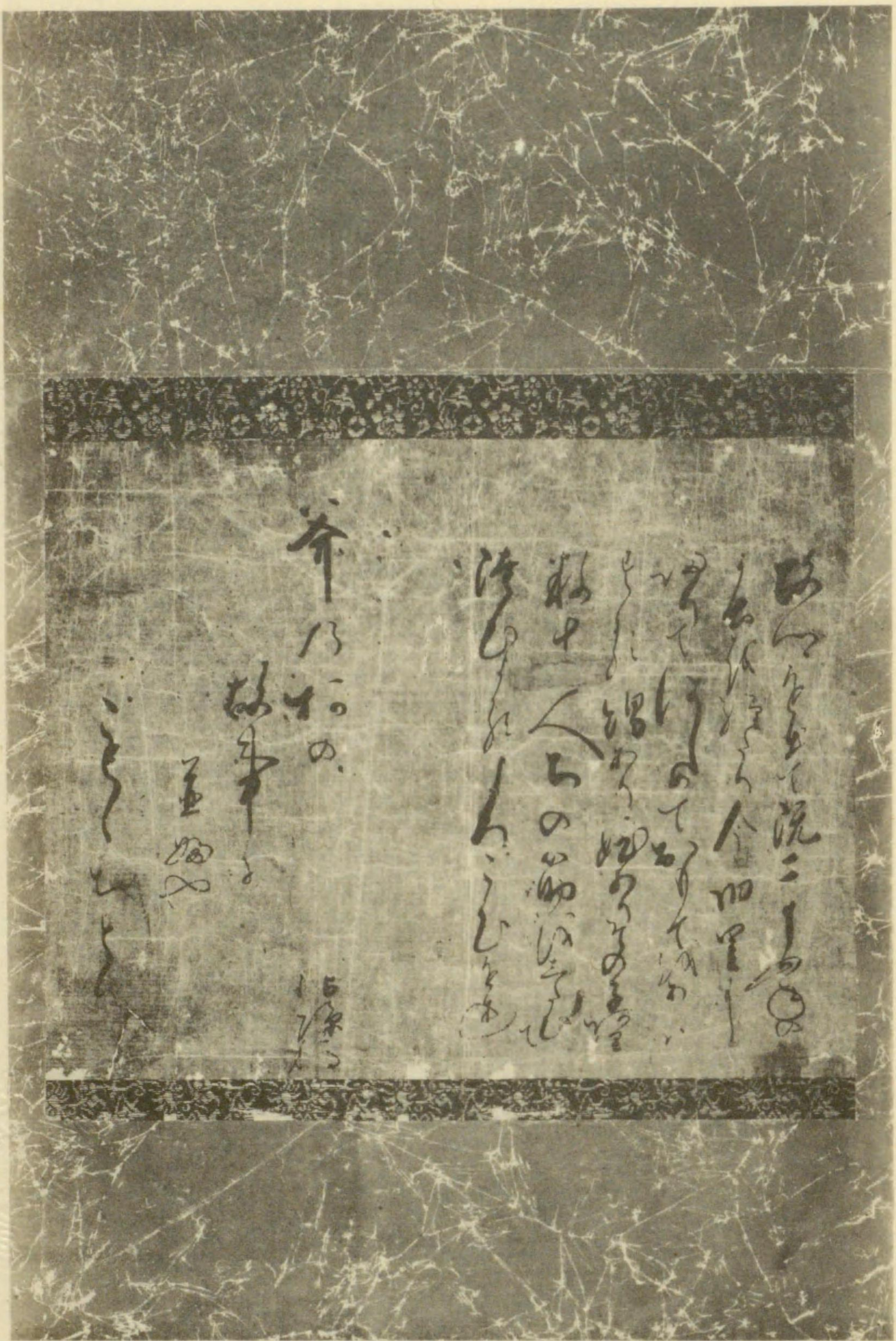
としよれはこゑもかるゝそさりくす知月

園女 芦の花の句短冊



風すちも東へ 芦の花 園女
まはれ

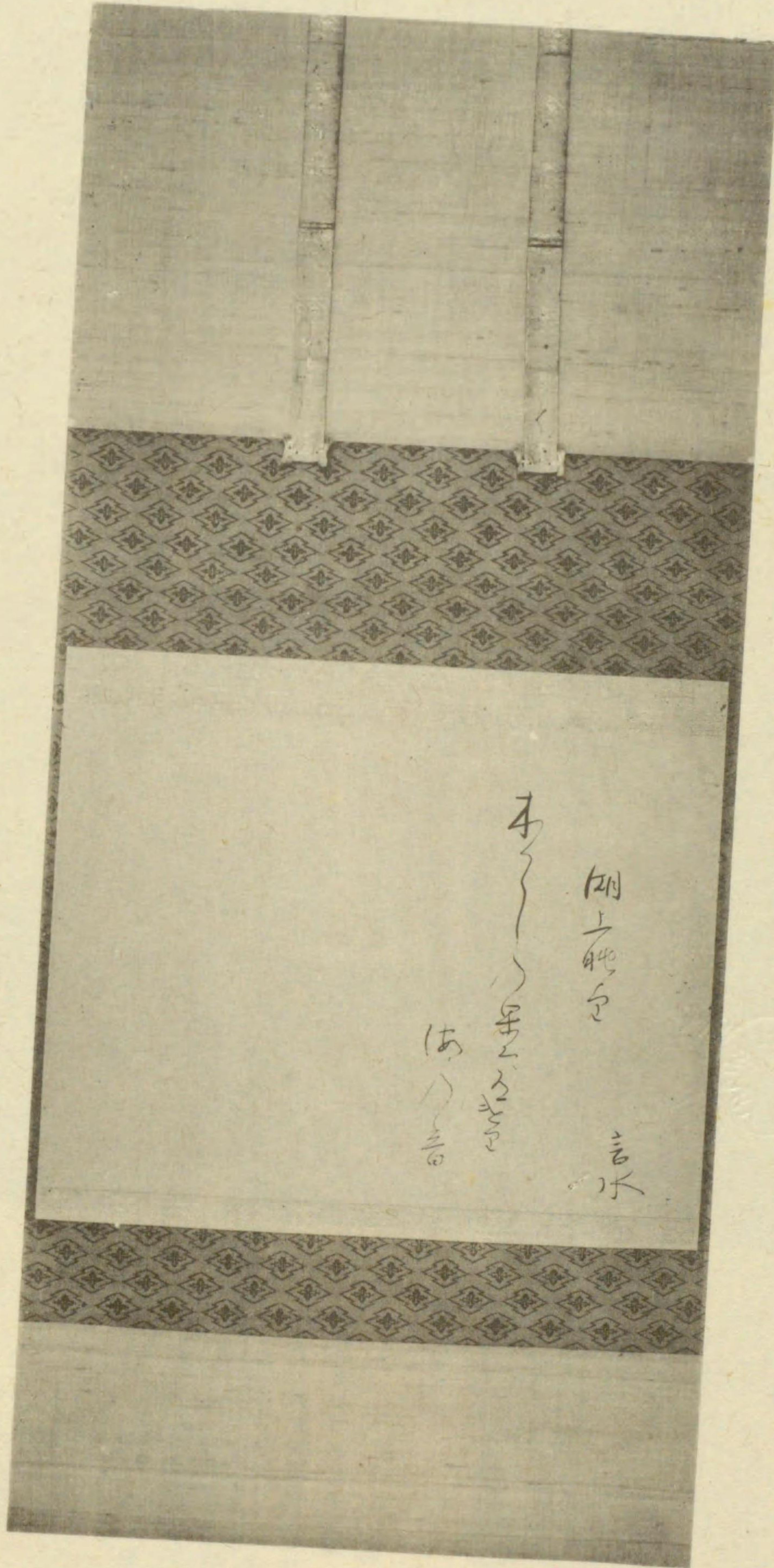
菊岡沾涼 歸郷之辭



故郷を出て既に二十四年の
うちを經たり今舊里に
歸りてはじめておもてをあらは
する甥あり姪ありその子あり
數十 人ちの筋をしたひて
睦ひよるよろこひを述
沾涼稿

芥の柯の
故事に
並ふや
もうちとり

言水名譽の句

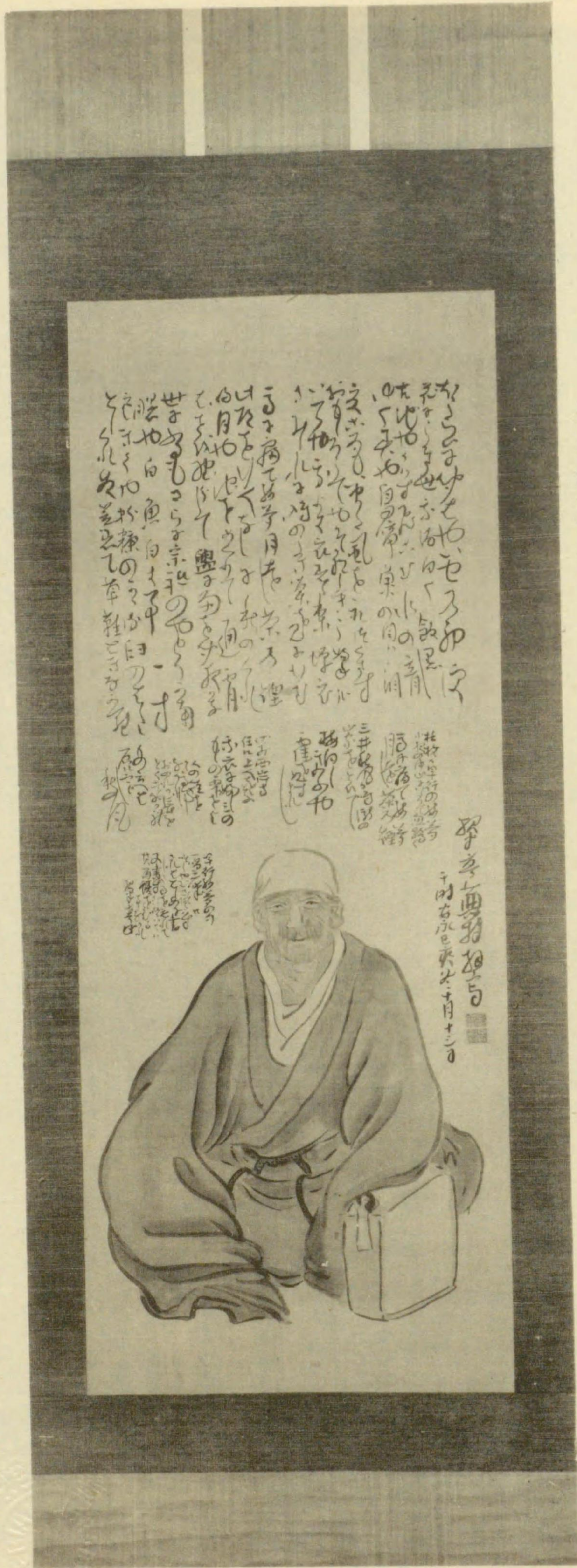


湖上眺望
言水
木からの果は有けり
海之音

夜半亭蕪村筆

芭蕉翁像並賛

門人吳春箱書



ほららいに聞はやいせの初便
花にうき世我酒白く飯黒し
古池やかはす飛こむ水の音
ゆく春や鳥啼魚の目は泪
夏ころもまた風を取つくさず
おもしろうてやかてかなしきこふね哉
いてや我よき衣着たり蝉衣
さみたれに鳩のうき巢を見に行む
馬に寝て残夢月遠し茶の煙
此道を行く人なしに秋のくれ
明月や池をめぐりて通宵

芭蕉が早行の睡夢
小夜の中山にいたりて忽驚く
馬に寝て残夢
月遠し茶の煙
三井秋風が鳴瀧の
山家をしめて
梅白しきのふや
鶴をぬすまれし
伏み西岸寺
任口上人をとふ
我衣にふしみの
もんの髪せよ

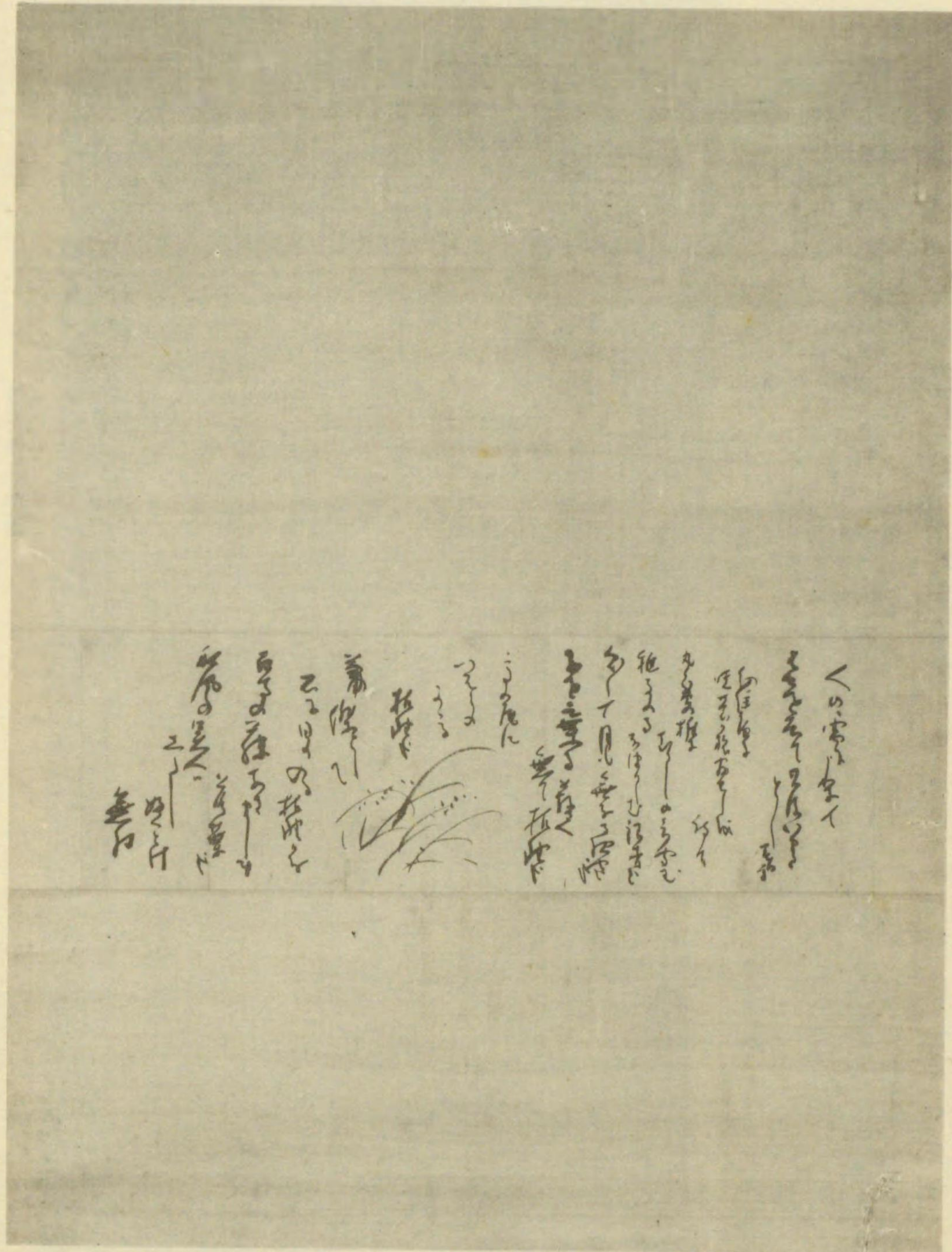
はせを野分して鹽に雨を聞夜かな
世にふるもさらに宗祇のやとりかな南
曙や白魚白き事一寸
寒菊や粉練のかゝる白のはた
としくれぬ笠着て草鞋はきながら

人の短を
なかる事
なかれ
おのれが長を
とくこと
なかれ
もの云へは
厭まし
秋の風

早行睡夢の句
一唱三嘆の口
吟しやむこと
されはしめに書
したることを
忘れて
又書すこいねがは
其再復をとりがは
事なかれ
夜半亭

夜半亭蕪村拜寫
于時安永己亥冬十月十三日

燕村筆 秋冬雜詠句草



人の需によりて
はせを去りて其後いまた
とし暮す
幻住庵に
曉臺の旅寢せしを
訪て

丸盆の椎に
むかしの音聞む

稚子の寺
なつかしむ銀杏哉

欠くて月も無なる夜寒哉
子を乗る藪さへ
無て枯野哉

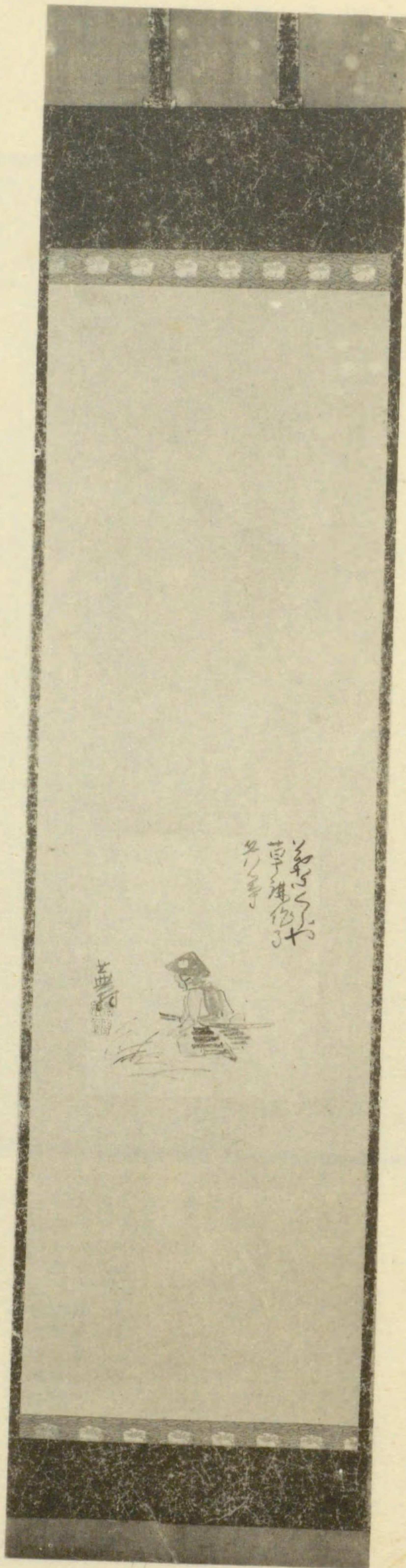
馬の尾に
いはらの
かゝる
枯野哉

蕭條として
石に日の入る枯野哉

古寺の藤あさましき
落葉哉

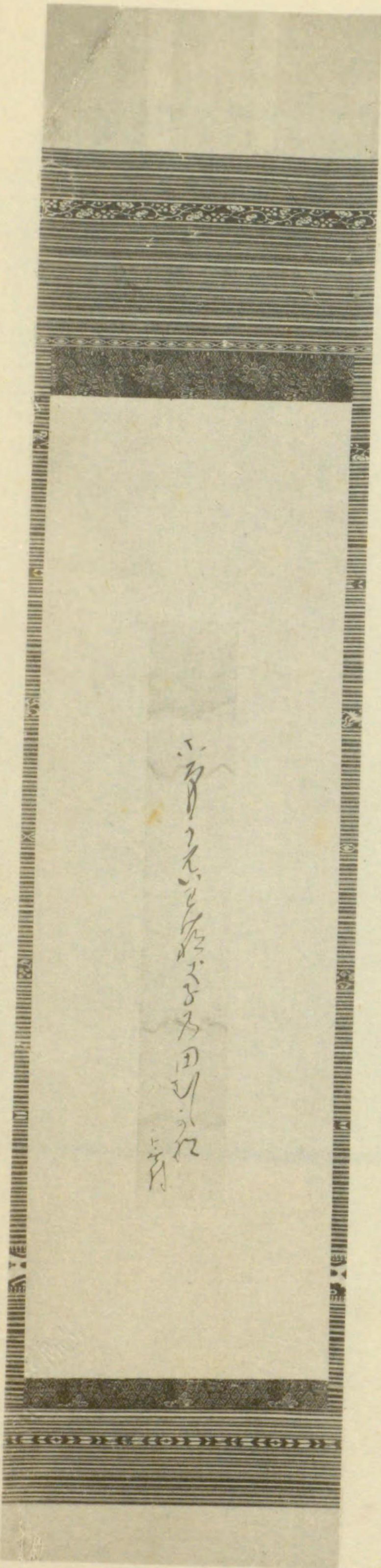
秋風の呉人は
しらしふくと汁
燕
村

燕村の筆 自畫 賛

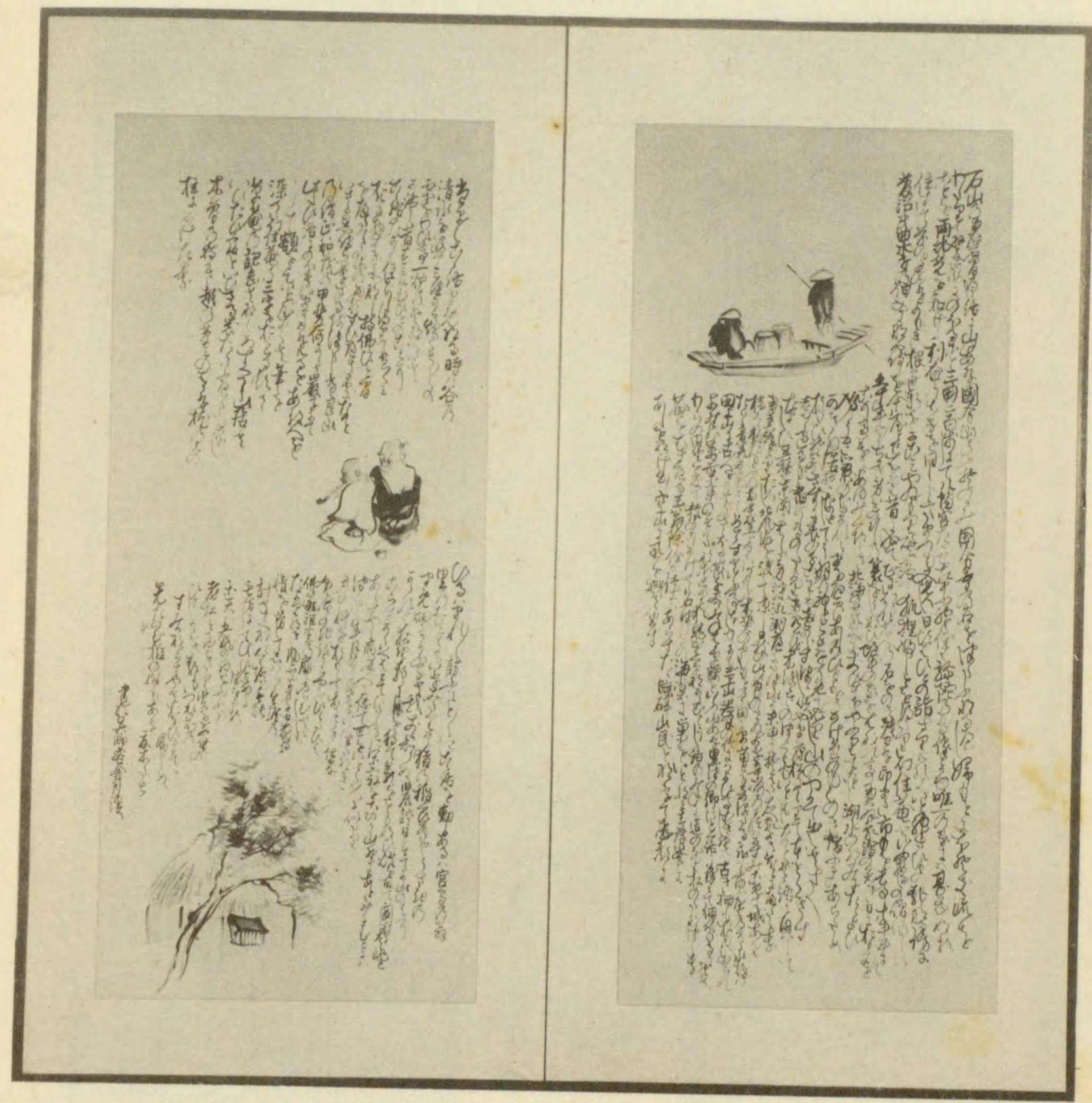


葉さくらや草庵作る兵等
燕村

燕村 衣更短冊



ころもがえいはけなき子の田むしかな



石山の奥岩間のうしろに山あり
わたりの奥岩間のうしろに山あり
ことたりて兩翠微のほるに山あり
住すとを和け利益のち三曲
管沼水子の伯父になん侍りし

五十年はやとみやねも又貴し日頃まふ名をつたふなるへしふもとにほそき流を
かかし高き集のなかり昔落し日頃まふ名をつたふなるへしふもとにほそき流を
おきね結そなかとせはみみむの初い北の荒なひ蝸牛の家をはなれて奥市中を去る事十年斗にして
しほひ過るほすとしかれとくまるし鳥の初い北の荒なひ蝸牛の家をはなれて奥市中を去る事十年斗にして
南ましひ吳楚の南に北風を浸りて涼湖庭へ有すつし山は未申にそはち人とはしなとそよりに興して
橋有釣るふる物とあり北風を浸りて涼湖庭へ有すつし山は未申にそはち人とはしなとそよりに興して
田上く音美ふる物とあり北風を浸りて涼湖庭へ有すつし山は未申にそはち人とはしなとそよりに興して
よみけむ古葉集をかそなたらけりか嶽千丈事な木樵の山比ふとの山小田より辛崎の家よきほととよきす
わらむけむ古葉集をかそなたらけりか嶽千丈事な木樵の山比ふとの山小田より辛崎の家よきほととよきす
あしをむけむ古葉集をかそなたらけりか嶽千丈事な木樵の山比ふとの山小田より辛崎の家よきほととよきす

たまをわけてみよるまめなる時は谷の
清し昔すみけむのそなへいとく
かろたすくもなし持佛ひと問み
おける物すくもなし持佛ひと問み
をへたすかしの夜物おさむへき處など
いさかしの夜物おさむへき處など
此僧正は加茂の甲斐何かしか嚴子に高良山
染て幻住を乞ひのほりまそかりけるを
草庵の念と三すく筆を
木會たひ念のほりまそかりけるを
柱にかけたさ越の菅かのはかり枕の上の

ひるはまれ訪ふひとにころを動しあるは宮守の翁
まめ期にかよふなり秋きり知らぬ農談ひすらしうさきの
かすれは夜静に月を待ては影をともし山野にいとをかくさむとは
あらすやく病身人へはとて世をいとふ人に似たり
つら科を病身人へはとて世をいとふ人に似たり
佛命の科を病身人へはとて世をいとふ人に似たり
情より室の屏に入らむとせしは仕官
計とさなれは終に無能の花鳥に
無才にして此一筋に無能の花鳥に
樂天は五蔵の神をやふりなかる
老杜はやせたり賢愚文質の
ひすみかならざるもいづれか幻の
先のむ椎の樹もあり夏木たちふしぬ

書於吳郷客舍月溪

月溪筆 燕村翁之像並句



冬こもり燈下に書すとかゝれたり
炭圍法師火桶の穴よりうかゝひけり

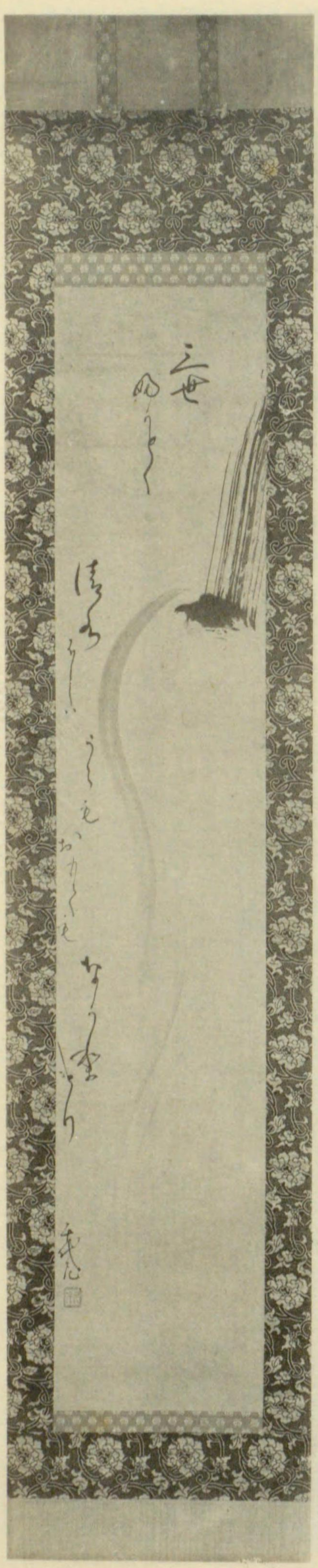
夜半翁の句
月溪書

千代尼 壽老の自畫賛



縫てからわらひころふや長頭巾
千代尼

千代尼 拂子の自畫賛

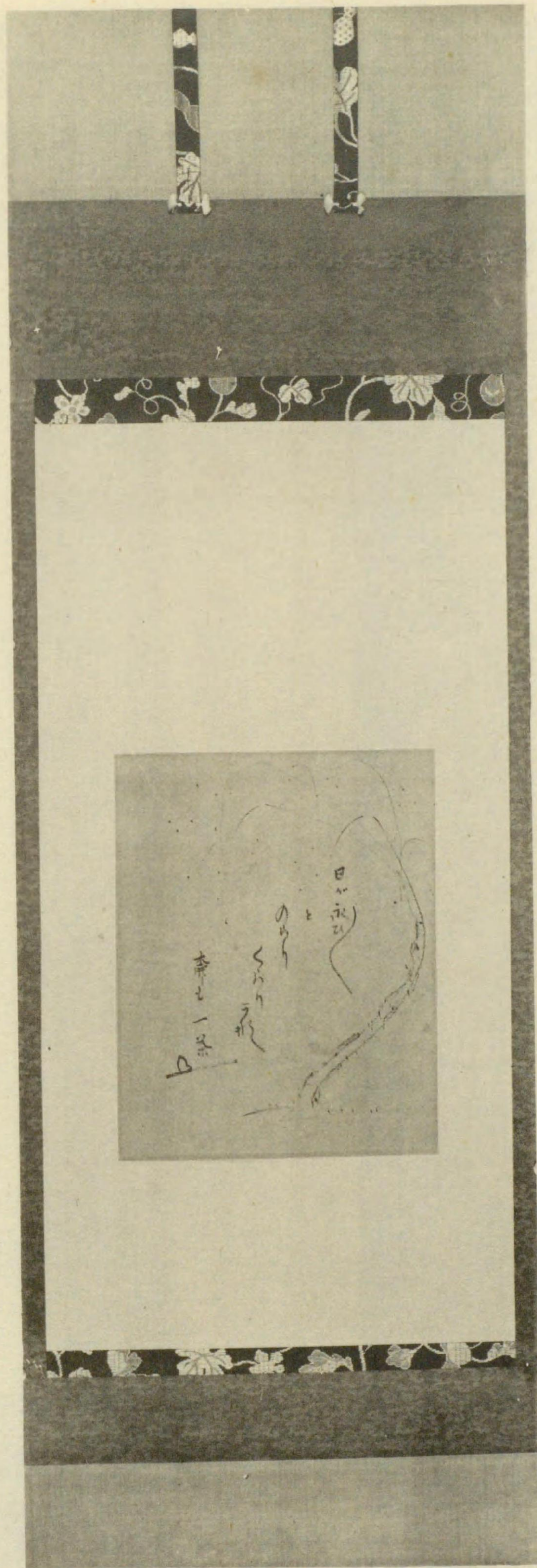


三世ふかとく
清水にはうらもおもてもなかりけり
千代尼

(千代尼句集 眞如平等 清水には裏も
表もなかりけり)



長命寺畔芭蕉翁涅槃之像寫意



俳諧寺一茶 柳の自畫賛

日か永ひくとのらりくらりかな
柳も一茶

穂庵筆

芭蕉翁行脚像

古稀翁 島本青宜賛



はつしくれ猿も小蓑をほしけなり

清暉筆

芭蕉翁と蛙



松本交山筆

蕉風十哲 對山賛



ふとん着て寝たるすかたやひかし山
朝賀保やその日くの花の出来
散時のこゝろやすさよけしの花
片枝にみやくやかよひてうめの華
ほ登ゝき須なくや湖水のさゝ濁
鶯の身をさかさまに初音哉
十圍子も小粒になりぬ秋のか是

嵐 杉 越 支 丈 其 許
雪 風 人 考 草 角 六

美圖うみの水まさりけりさ都き雨
夕かせや何ふきあけて臘月
此頃の垣のゆひめやはつし具禮
野 北 去
枝 來

天保十稔三亥歳冬十一月廿八日爲雪松軒書
交山
五世空筠居士對山捻香中
庵



蕉翁

印

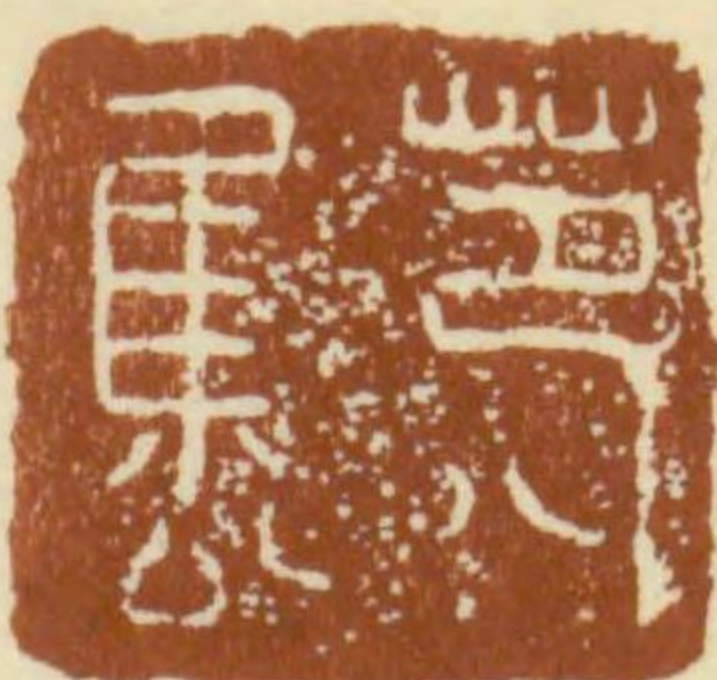
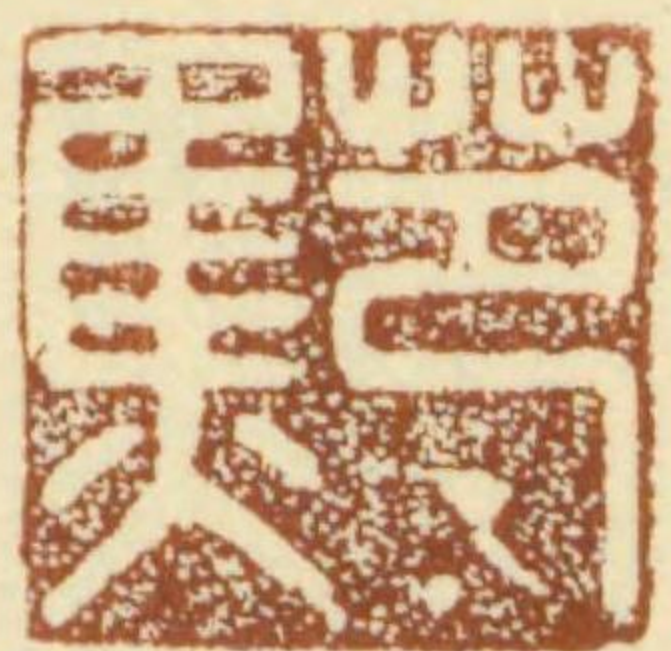
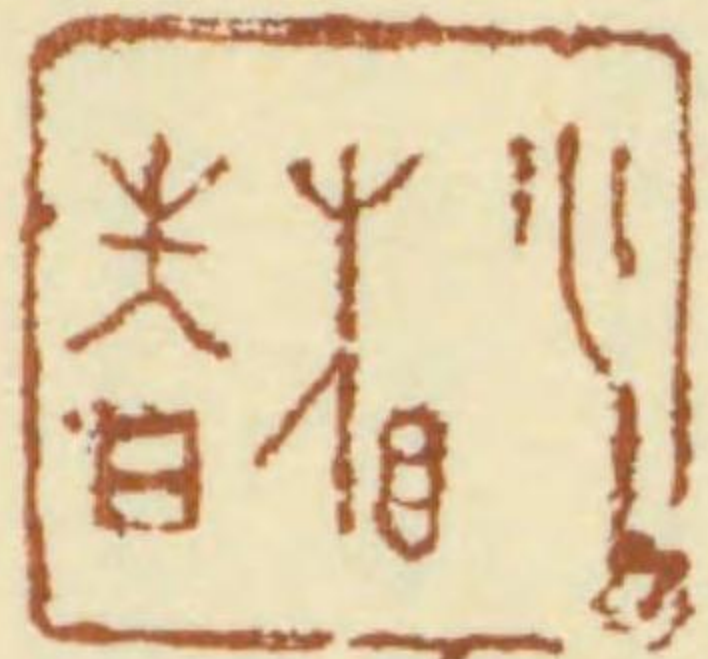


部



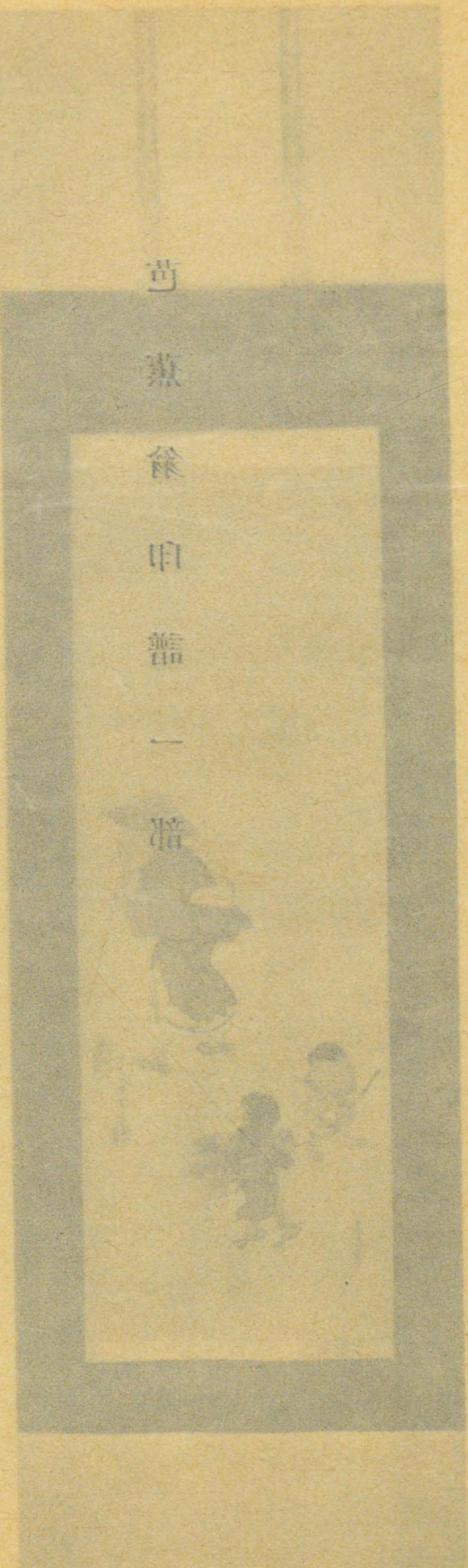
容齋是真合作 西行法師行脚之圖





容齋是與合作 西行法師行脚之圖

芭蕉 徐 印 齋 一 齋



跋

俳句は季題を中心として十七文字の短詩型であり、世界にも比類稀なる一種特色ある短文學なることは今更申すまでも無いが。入り易き所から和歌、漢詩等に比し、大衆文學として今や我國に於て最も多くの作家を有し、最も汎く行はるゝことは周知の事實である。而かも俳句は容易に達し難く、幽玄高雅なる文學たることも亦明かである。而して言ふまでもなく斯の文學の正風を大成したる始祖こそ蕉翁其の人であつて翁出でゝより茲に殆んど三百年、斯道の神と仰がれ、或は俳聖と稱へらるゝは洵に由縁あるかなである。

右の如く俳句の流行につれて蕉翁を欽慕崇拜する者日と共に多く、世を擧げて翁の遺墨に目を注ぎ、之を需めむとする者の多きは自然の勢であり、従て翁の遺墨の偽筆贋作の多きも亦自然の數である。爲めに翁の遺墨の眞蹟と

稱すべきものは極めて稀で、世の鑑賞家をして眞偽の去就に彷徨せしむるに至つたのである。斯の時に方り菊本氏の『蕉影餘韻』一たび世に出で、翁の眞蹟手鑑を多數に覗ふことを得て、恰も闇夜に照明を得たるの感あらしめたのである。

今の世に俳聖の斯る眞蹟集を得ることは啻に鑑賞上より重要な計りでなく、實に文學上より將た書道の上より見るも頗る重要なことである。蓋し翁の著作其の他の作品は之を寫し傳へ或は之を印行し、現今に在りては其の全集等の印行せられたるものは固より多々あり、翁に關する書物は汗牛充棟の多きに上り、其の研究も漸く微に入り細に進まむとする時、斯る眞蹟集は能く寫本や印行物の誤謬を訂正して、作者たる翁の眞意を了知せしむることあるは申すまでもない。又斯る眞蹟の蒐集に依りて翁の遺作の未知のものが新に發見せらるゝこともあり得ると信ずるのである。又書道の上より見れ

ば、徳川期に入りて一面絢爛華麗を極めし元祿時代に於て蕉翁竝に其の門系俳人の靜寂味ある筆致風格を窺はしめ、書道研究の上にも大功を齎らせることあるを信ずるのである。

菊本氏は今茲、古稀に達せられ、其の自祝の記念出版として更に『蕉影餘韻』の續篇を刊行せられ、之を同好の士に頒たんとす。今其の稿本を見るに、同篇には爾後十年間に蒐集せられたる蕉翁の眞蹟を中心として、翁の追慕する西行の筆蹟を卷頭に、翁以後の俳人にして代表的の人々の筆蹟をも集められ、是れ亦前篇と同じく斯道に多大なる裨益を與ふることあるは言を俟たざる所である。

菊本氏は夙に慶應義塾に學び其の業を卒へて、直に實業界に入り、其の高潔にして眞摯なる風格は斯界に於ける重鎮として其の英名を恣にせられ居ることは今更申すまでもない。併し乍ら實業界に於て偉功を樹て世に英名を馳

せて居らるゝ人々は、氏を措いても他に其の人に乏しからず。故に予は氏の實業界に於ける功蹟を讃へながらも、今茲に改めて之を説かふとは思はないのである。

然るに氏は蕉翁と郷貫を同じうする所から、一方郷土愛の念慮に燃ゆると共に、翁の幽遠高雅なる人格を敬慕し、郷國に於ける翁の舊棲たる蓑虫庵を始めとし、其の他の舊蹟及遺物の維持保存に努められ。殊に翁の遺墨に至ては眞蹟と見れば一筆片墨と雖も、出來得る限り之を蒐集し、其中より特に優秀なるものを選択し、茲に前篇、續篇を刊行し、以て世の蕉翁研究者に資せんとす。斯る點よりして俳道の爲めに寄與せらるゝ功蹟に至ては他に全く匹儔を見ざる所で、氏を措いては他人の企及し能はざる所である。故に予は氏の偉名は實業家としてよりも寧ろ蕉翁愛護家として天下後世に其の名の傳はるべきを信ずる者である。而かも這は一般蕉翁崇拜家の聲なのである。

予は固と法學に於ける學究にして敢て俳道に志す者とは云はぬが、明治三十三年伯林遊學の頃、巖谷小波君等と共に白人會を結び。爾來餘技ながらも斯道に親しみ、本篇編纂を擔當せられたる松宇大人にも親交を得て斯道に遊ぶこと年あり。菊本氏の前記の事業を耳にして悦びに堪へず、自ら蒐集せるもの數點を割愛して本篇に輯載を得たる緣故もあり、又平素氏の人格に敬服するの餘り、拙文ながら跋を乞はるゝまゝに茲に一言を叙して氏の萬福長壽を祝すると共に、斯道に對する厚意を謝すると云爾。

堆き家寶に坐して菊薫る

昭和十四己卯年九月

加藤 犀 水

昭和十四年九月五日 印刷
昭和十四年九月十二日 發行

(非賣品)

東京市小石川區關口臺町二九

編輯人 伊藤松宇

東京市赤坂區青山南町六ノ一二六

發行人 菊本直次郎

東京市芝區新橋七ノ一二

印刷所 東京美術社

152
85

